

学生と教員を対象とした
生成AIの教育利用状況と意識に関する
全国調査
2024年—2025年比較調査

2025年10月

仙台大学

AI教育研究チーム

もくじ

- 調査概要 P.3
- はじめに：生成AI活用の“実装フェーズ”を見据えた教育実践への羅針盤 P.4
- 本調査のサマリー P.5
- 総括 P.10
- 学生と教員の生成AIの利用状況 P.11
- 学生と教員の生成AIの教育・学習利用に対する意識 P.28
- 教員の生成AIによる教育上の課題 P.46
- 学生の生成AIを利用した学習上の問題行動と課題 P.53
- 調査結果に対する考察とこれからの学びに向けた提言 P.63

項目	内容	
調査目的	本調査は、生成AIの利用率・頻度・目的、不正や依存への不安、プライバシー意識、情報活用スキル理解、ガイドライン整備の進展を重点的に把握することで、教育現場の課題と対応の成熟度を明らかにすることを目的として2025年3月に実施。生成AIの教学における進展度合いとその影響の変化を明らかにするために2024年度と2025年度調査において、同一設計の質問票・対象層を用い、1年間の変化を統計的に比較可能とした。調査結果は授業設計・評価設計の改善や教員研修、ガイドライン策定の実務的根拠として活用することを目的とする。	
調査対象者	生徒・学生：15歳（高校生相当）以上の学生 教員：小中高校、専修学校、専門学校、大学、大学院、各種学校	
調査方法	webアンケート	
回答者数・構成	<2024年度> 総回答者数：8,769名 有効回答数：6,939名 (教員：2,616名, 学生：4,323名)	<2025年度> 総回答者数：9,044名 有効回答数：7,231名 (教員：2,506名, 学生：4,725名)
調査時期	2024年3月21日～25日	2025年3月12日～19日
調査実施者	仙台大学体育学部 スポーツ情報マスメディア学科 AI教育・研究チーム (齋藤長行 教授 (研究代表者)、遠藤教昭 教授、内野秀哲 准教授、橋本智明 准教授、山口恭正 助教)	

生成AI活用の“実装フェーズ”を見据えた教育実践への羅針盤 － 2024年度調査を基点とした2025年度比較調査の意義

生成AIは、教学の現場に期待と戸惑いを同時にもたらしめています。授業設計や評価の見直し、学習者支援の再構築、学内規程の整備など、学校・大学には“使うか否か”の次元を越え、実装の質が問われる段階が迫っているのかもしれませんが。

2024年度調査は、そうした状況を初めて全国規模で可視化し、現場が取り組むべき論点として、不正行為への備え、引用・出典とファクトチェックの指導、データの扱いと同意の枠組み、そして教員研修の在り方を整理するための基準線（ベースライン）を提供しました。

国内では、大学・高専向けの周知等を通じて、各機関が自校の実態に即した指針を示し、技術や運用の変化に応じて不断に見直すことが求められています。

他方、国際的にも“人間中心”を柱とする教育政策の方向性が示され、学習者が生成AIの恩恵を享受しつつ、学びを深めるための条件整備が重視されています。こうした政策的・社会的環境は一年で大きく動き、現場の意思決定に新たな判断材料と責任をもたらしたと言えるでしょう。

本度の調査（2025年3月実施）は、2024年度調査と同一設計の質問票・対象層を用いた連続調査として、比較可能性を最大化することを意図しています。単年の断面では捉えにくい変化、利用の広がりと使い方の定着、倫理的不安の質的変容、ガイドラインの実効化、評価・課題設計への反映、教員研修や学習者支援に必要な最小限モジュールを、2024年の基準線に対する推移として可視化しました。

このことは、急速に変化する社会環境の中で、印象論や断片的な事例に流されることなく、エビデンスに基づく知見を現場に還元し、校種や教育段階の実情に応じて、どの順序で・どの深さで制度設計や運用改善を進めるかを検討するために不可欠であると言えるでしょう。

本調査で得られる知見が、学内ガイドラインの整備・見直し、シラバスや評価ルーブリックの設計、学習者への情報活用教育（引用・出典、検証、データの扱い）の具体化を後押しし、教育研究双方の文脈で、生成AIを学びの質の向上へ結びつける判断材料となることを期待します。教育者・研究者・学習者が同じデータを共有し、建設的に議論できる共通基盤として、本年度の比較調査を位置づけます。

本調査で得られたエビデンスが、生徒・学生の方々の学びと、教員の方々の教育活動を支援するための知見となれば本望です。

利用状況・基本動向

・生成AIの利用率の拡大

- ・ 学生は54.5%と過半数を超え、教員は32.3%と2024年度から約13ポイント増加しました。高校生は48.8%、大学生・大学院生は66.6%と、学校種を問わず利用率が増加しています。

・利用頻度の増加

- ・ 学生の44.6%が週1回以上利用し、教員では過半数が週1回以上利用しています。毎日利用する教員も一定数います。

・サービスの多様化

- ・ 学生ではChatGPT無料版が76.1%と依然として中心ですが、GeminiやCopilotも増えています。教員ではGemini（30.8%）、Copilot（28.7%）の利用が進み、複数ツールを使い分ける傾向がみられます。

学習行動・意識の変化

• 学習活動に対する生成AI依存への不安は大幅減少

- 学生29.1%、教員11.8%が不安を持っていますが、前年度よりも減少しています。

• プライバシー・セキュリティに対する不安の大幅減少

- 学生は2024年度の58.1%から2025年度は20.7%となり、過去の漠然とした不安は収束しています。
- 教員も2024年度の58.1%前後から2025年度は11.6%に低下しました。

学校におけるガバナンス・授業設計への示唆

• 不正行為への懸念の増加

- 生成AIを利用した不正行為を懸念する教員は2024年度26.3%から2025年度43.9%へ大幅に増加しました。特に中学校教員は22.3%から44.9%へ上昇しました。

• 大学・大学院での懸念の減少

- 大学・大学院教員では不正報告への懸念が2024年度44.3%から2025年度29.3%へ低下し、高等教育では懸念が減少しました。

• 知識不足意識の低下

- 「生成AIに対する教員の知識不足」を課題としてあげた教員は2024年度40.9%から2025年度18.5%へと低下し、教員の理解や適応が進んでいることが示唆されます。

• 制度的課題と抵抗感の解消

- 「自校における生成AI利用ガイドラインがない」は2024年度30.7%から2025年度2.3%へ、「教員の生成AIに対する抵抗感」は28.2%から2.8%へ大きく減少しました。

学生の学習活動における課題

- **課題作成における生成AI利用の拡大**
 - 学生全体で課題に生成AIを利用した割合は2024年度62.7%から2025年度68.7%に増加しました。高校生では60.1%から66.9%、大学生では65.9%から71.9%となり、全学校種別において利用が広がっています。
- **出力結果のコピー&ペースト経験は横ばい**
 - AI出力を直接コピー&ペーストした経験は、学生全体で2024年度27.8%から2025年度29.7%とほぼ横ばいでした。大学生では25.8%から24.8%へわずかに減少し、安定傾向が見られます。
- **高校生のコピー&ペーストによる直接提出の増加**
 - 高校生では課題へのコピー&ペースト経験が2024年度28.1%から2025年度33.4%へと増加し、提出物への直接的利用が目立ちました。適切な引用や倫理教育の重要性が示唆されます。

学生の学習への生成AIの利用スキル

・引用スキルの不足

- ・「生成AIが書いた文章の引用の仕方を知っている」と答えた学生は、2025年度において39.4%でした。特に大学生では36.6%にとどまり、引用指導の必要性が示されています。

・適切利用への自信の弱さ

- ・「不正行為に当たらないように適切に使える自信がある」学生は、2025年度において50.5%で、約半数が自信を持っていない状況です。

・ファクトチェック知識の不足

- ・「ファクトチェックのやり方を知っている」と回答した学生は、2025年度において36.0%で、知識が十分でない層が多数を占めています。

・生成AIの「設計フェーズ」への移行

- ・利用率の上昇と現場での慣れを背景に、課題は「使うか否か」から「どのように教育設計へ組み込むかへと移行しています」へと移っています。授業評価や課題設計、開示・同意プロセスの一貫した設計が成果を左右します。

・校種別に異なる重点課題

- ・高校では不安やスキル不足への対応、大学では「正当な協働」や開示の可視化が焦点です。校種ごとに研修・評価設計の深度を調整する必要があるでしょう。

・制度・規範の定着と次のステップ

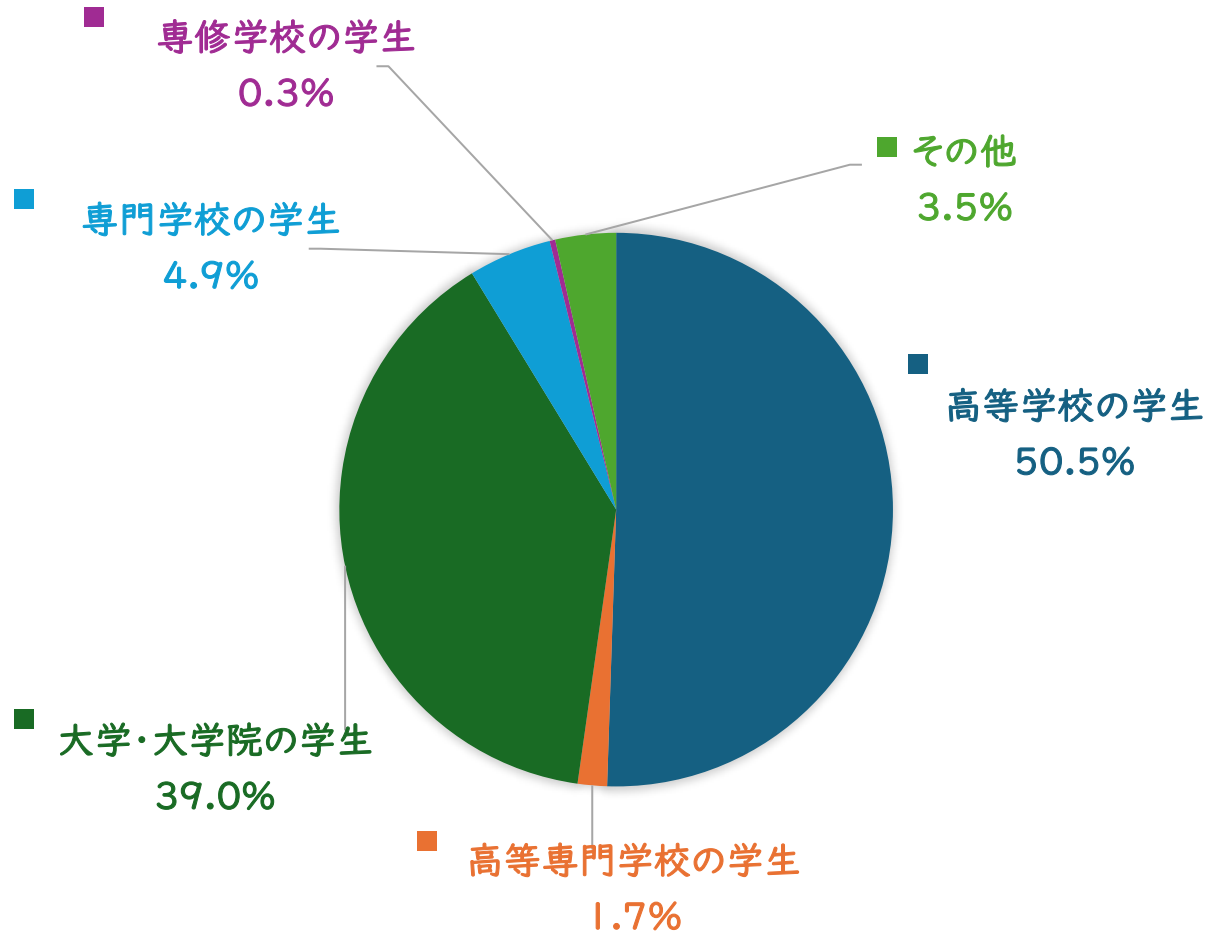
- ・ガイドラインや開示の規範は浸透しつつあり、今後は教員の設計力強化と、学生・保護者へのオプトアウトやデータ同意の説明責任など実務面の整備が求められます。

・学習者への新たな支援

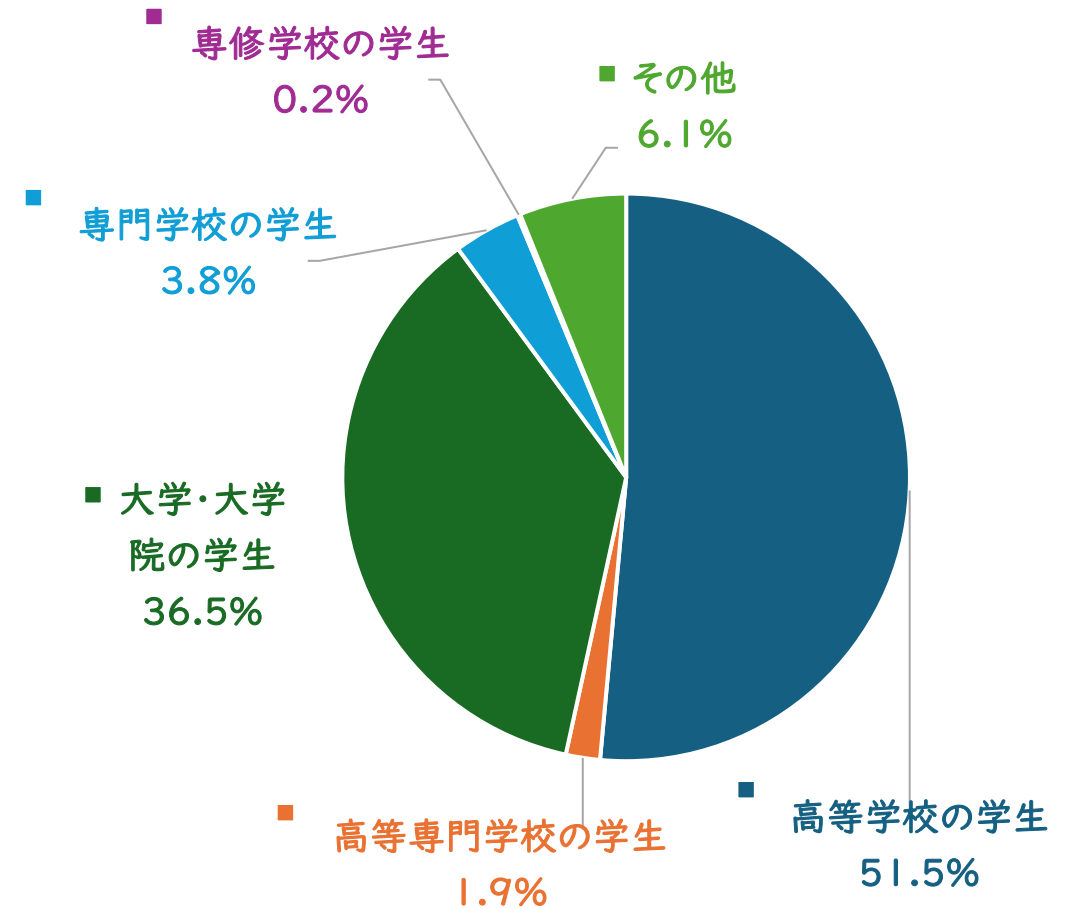
- ・引用・ファクトチェック・プロンプト開示を含む情報活用スキルを、授業に組み込んで育成することが重要でしょう。AIの結果を「鵜呑みにせず、検証する」態度を醸成することが重要となるでしょう。

学生と教員の生成AIの利用状況

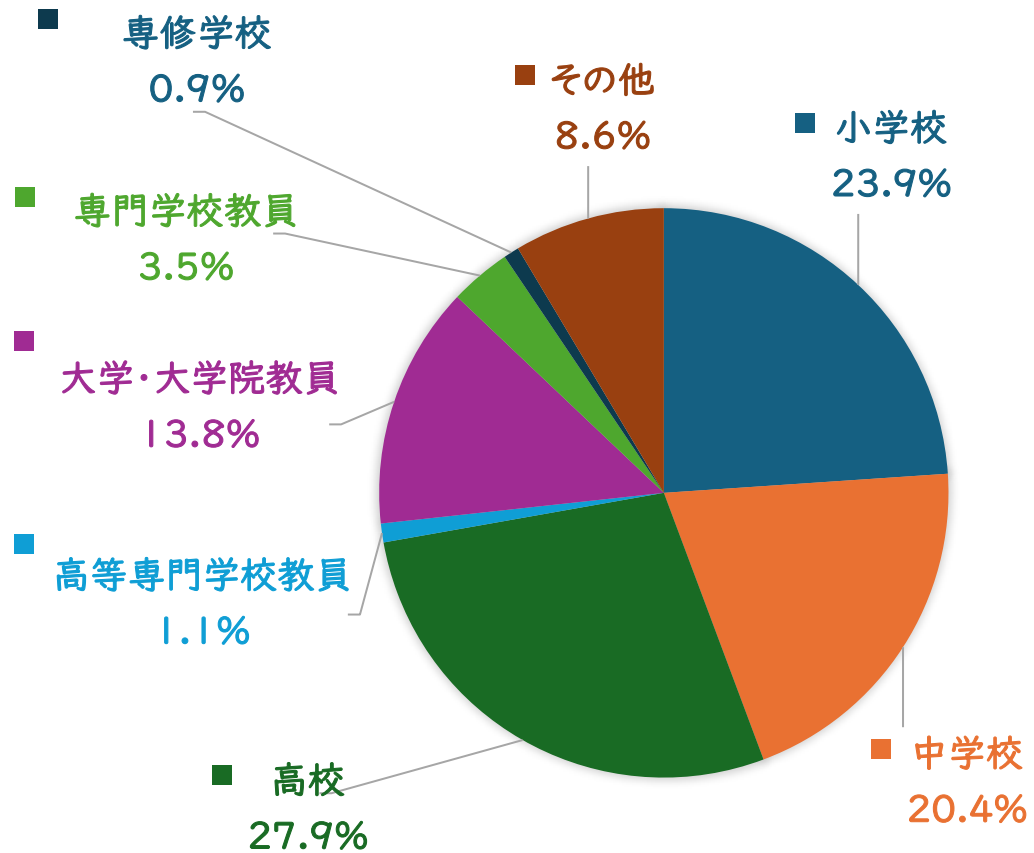
2024年 (n=4,323)



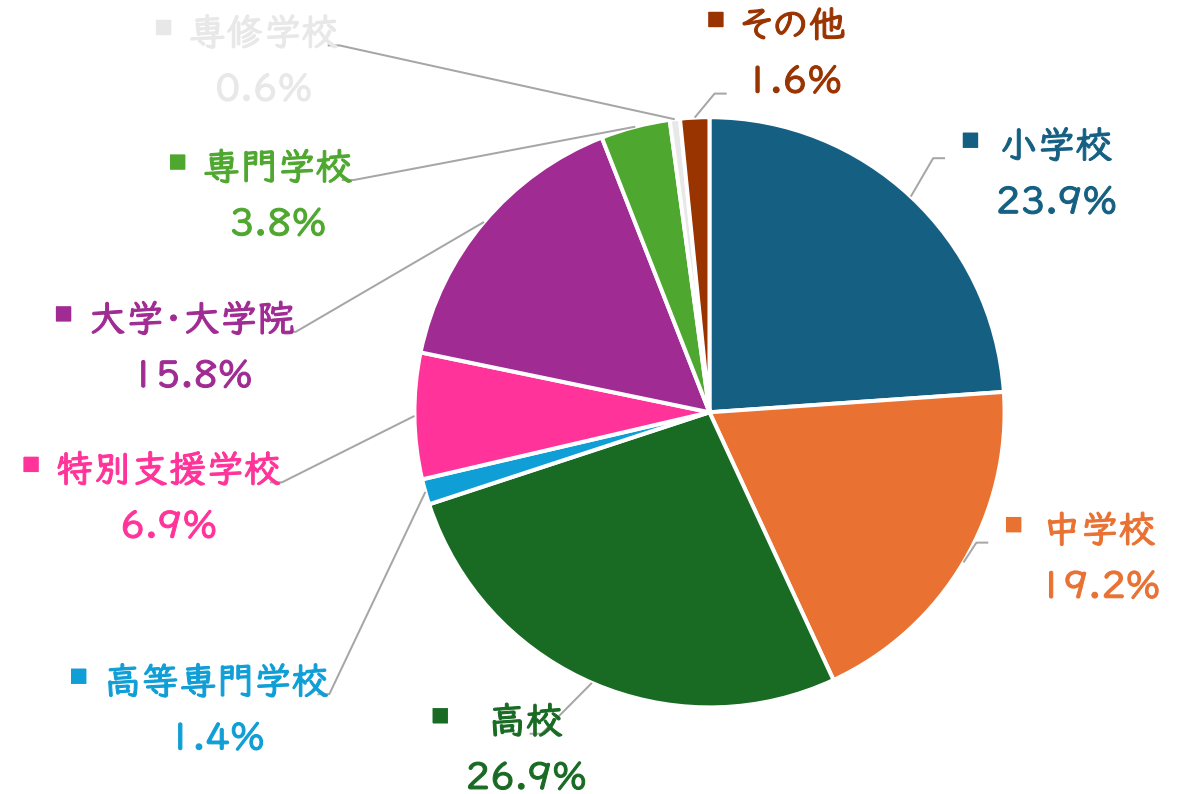
2025年 (n=4,725)



2024年 (n=2,616)



2025年 (n=2,506)



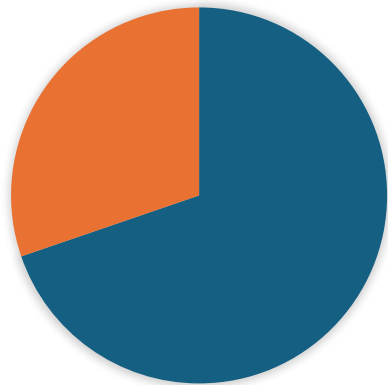
学生の生成AIの利用状況（学生全体）

- 2025年度の調査では、54.5%の学生が生成AIを使用していると回答しました。
- 2024年度の調査では、30.3%であったことから顕著な増加傾向が確認され、生成AIの利用が一般化しつつあることが示唆されます。
- 生成AIを利用している学生の割合が過半数を超え、利用していない学生の割合は5割弱となっています。1年間で学生の間において生成AIの浸透が進んでいます。

あなたは生成AIを使用していますか？

2024年 (n=4,323)

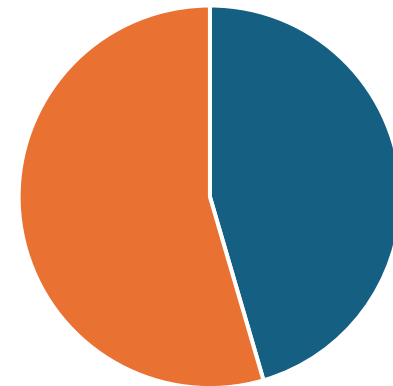
Yes
30.3%



No
69.7%

2025年 (n=4,725)

Yes
54.5%



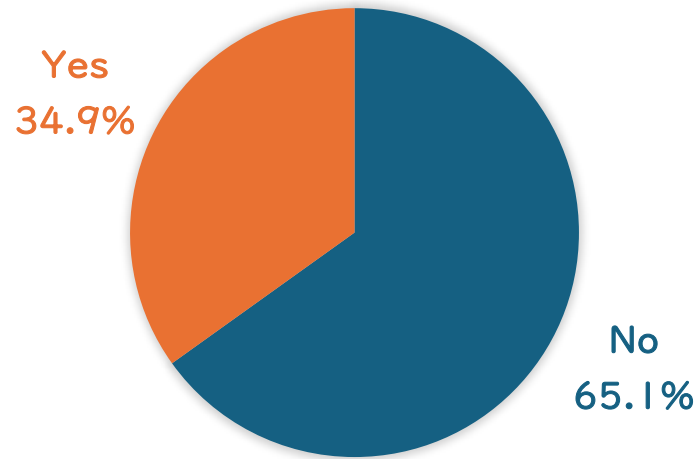
No
45.5%

学生の生成AIの利用状況（高校生、大学・大学院生）

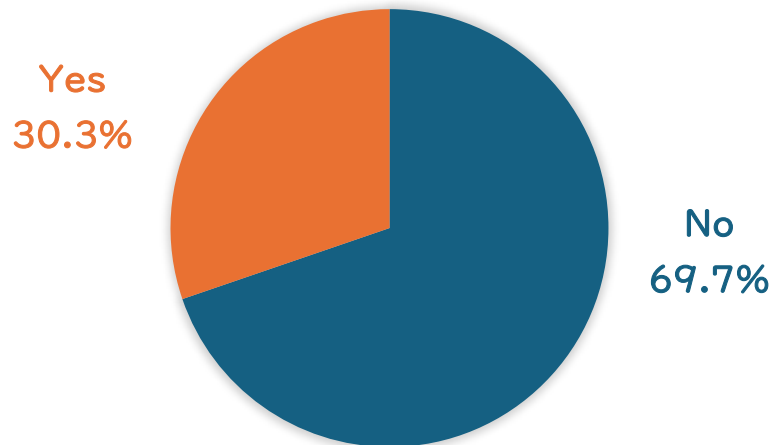
あなたは生成AIを使用していますか？

2024年

大学・大学院生 (n=1,688)

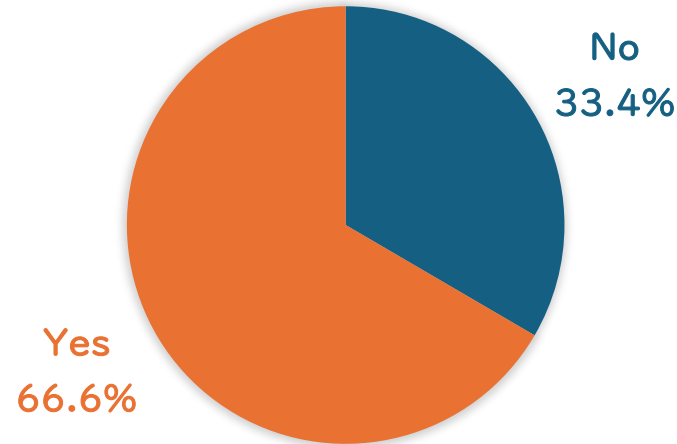


高校生 (n=2,184)

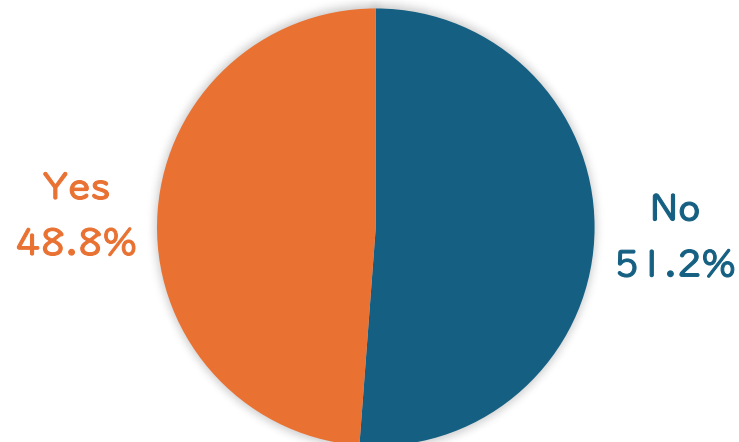


2025年

大学・大学院生 (n=1,724)



高校生 (n=2,432)

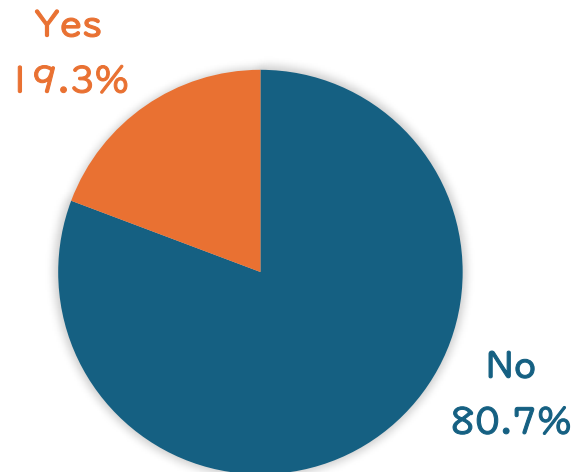


- 学生に対して、生成AIを使用しているかについて質問しました。
- 2025年度の調査では、大学・大学院生においては約66.6%が、高校生においては約48.8%が生成AIを使用していると回答しました。
- 特に大学・大学院生では過半数を大きく超える利用率となり、高校生でも約半数が利用している状況が明らかになりました。
- 2024年度の調査では、大学・大学院生の使用率が34.9%、高校生が30.3%と、全体的に約3割の学生が生成AIを使用しているに留まっていました。
- これらの結果から、この1年間で両者において生成AIの利用が飛躍的に進展したことが見て取れます。

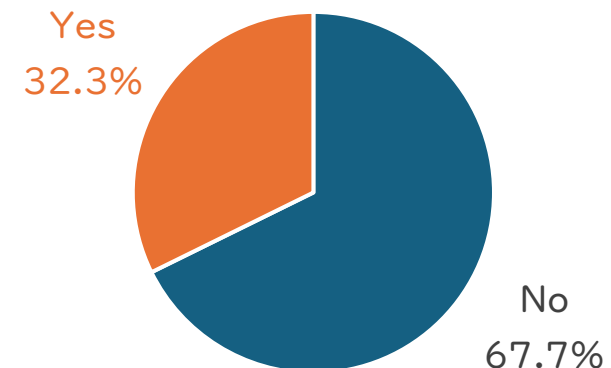
- 教員に対して、生成AIを使用しているかについて質問しました。
- 2025年の生成AI使用率は32.3%でした。これは、教員の約3分の1が生成AIを利用していることを示しています。
- 2024年の19.3%から2025年には32.3%へと、利用率が約13.0ポイント上昇しています。
- 教員間での生成AIの浸透が着実に進んでいると言えるでしょう。

あなたは生成AIを使用していますか？

2024年 (n=2,616)



2025年 (n=2,506)

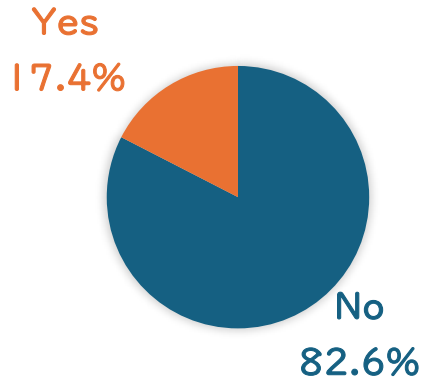


教員の生成AIの利用状況（学校種別）

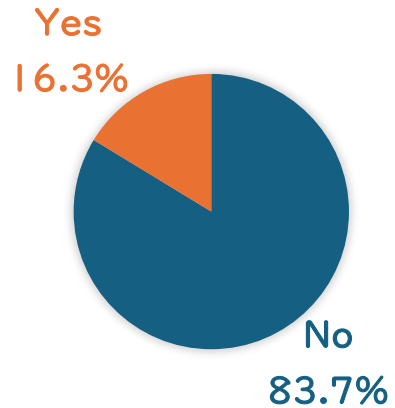
あなたは生成AIを使用していますか？

2024年

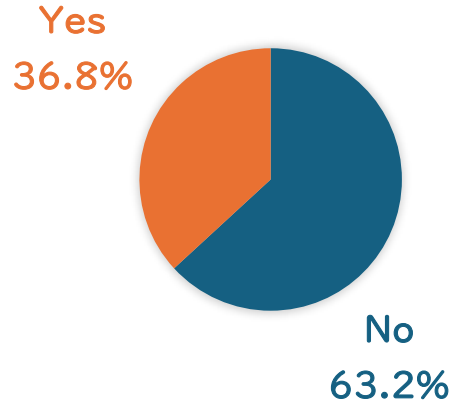
中学校教諭 (n=533)



高校教諭 (n=730)

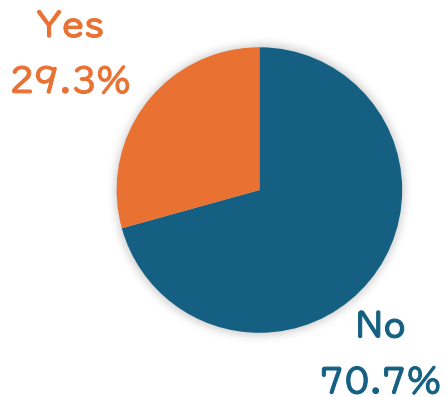


大学・大学院教員 (n=361)

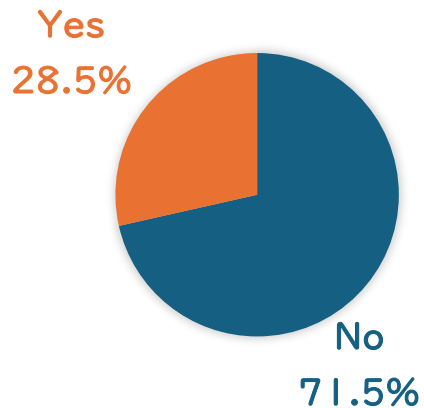


2025年

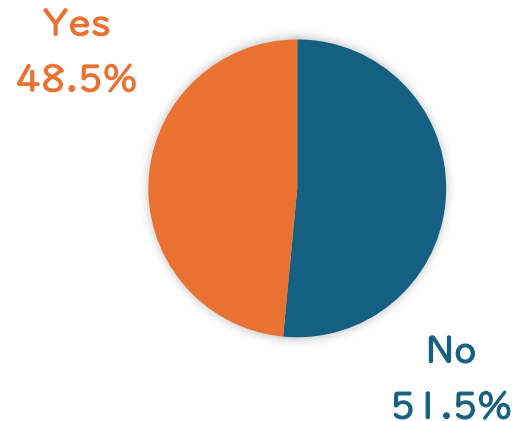
中学校教諭 (n=481)



高校教諭 (n=673)



大学・大学院教員 (n=369)

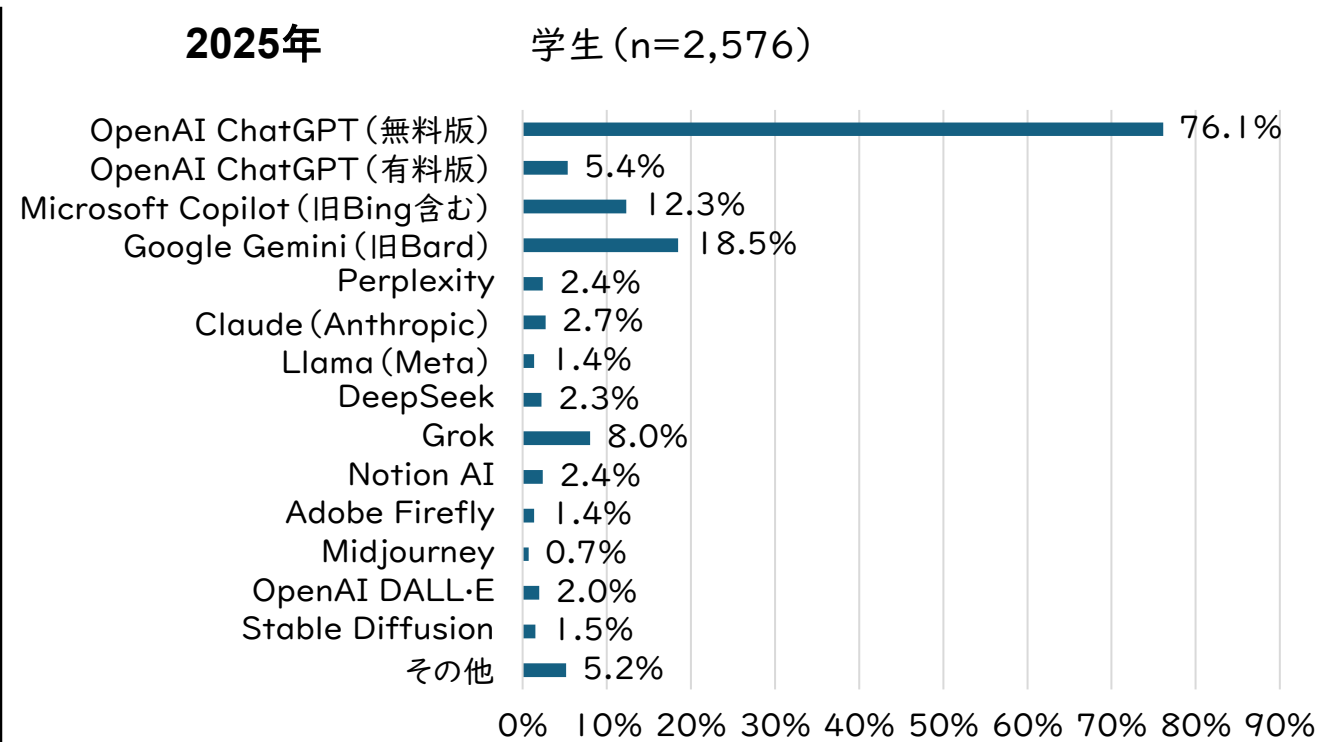
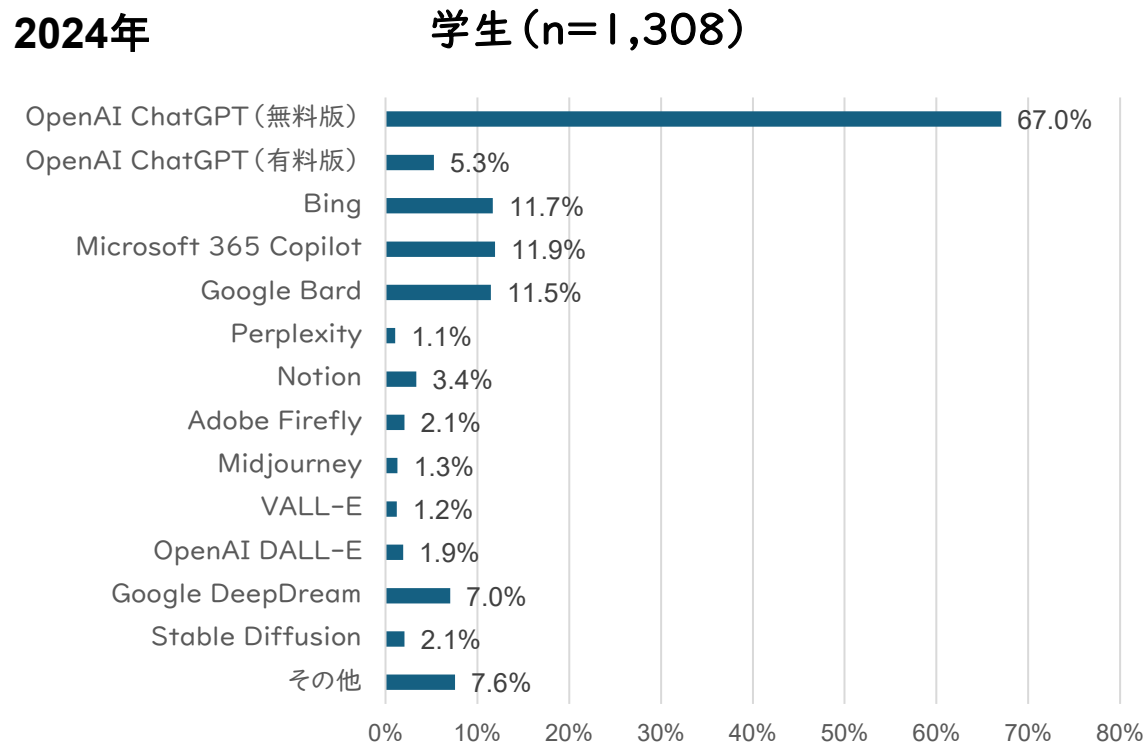


- 2024年度から2025年度にかけて、すべての学校種別で生成AIの利用が大きく進展しました。
- 中学校教諭は17.4%から29.3%へ約11.9ポイント増加、高校教諭も16.3%から28.5%へ約12.2ポイント増加し、両者ともに約3割近くまで利用が広がっています。
- この伸びは、中高の教員間でも生成AIの活用に対する関心が高まっていることが示唆されます。
- 最も顕著な進展を見せたのは大学・大学院教員で、2024年の36.8%から2025年には48.5%へと約11.7ポイント増加しました。
- ほぼ半数の大学・大学院教員が生成AIを利用しており、教育活動のみならず研究活動における活用も進んでいることが推測されます。

利用している生成AIのサービス（学生）

- 2025年度の調査では、学生の76.1%がOpenAI ChatGPT無料版を利用しており、最も広く普及していることが明らかになりました。次いでGoogle Gemini（旧Bardを含む）が18.5%、Microsoft Copilot（旧Bingを含む）が12.3%の利用率を示しています。その他、Grok（8.0%）やOpenAI ChatGPT有料版（5.4%）など、多様なサービスが利用されている状況です。
- 2024年度の調査と比較すると、まずOpenAI ChatGPT無料版の利用率が、2024年の67.0%から2025年には76.1%へと約9.1ポイント増加し、その圧倒的な普及がさらに加速していることが分かります。Google Bard（2024年11.5%）から改称されたGoogle Geminiの利用率は、18.5%へと大きく伸び、主要なサービスとしての地位を確立しました。また、Bing（11.7%）とMicrosoft 365 Copilot（11.9%）を合わせていたMicrosoft Copilotは、利用率が12.3%と微増しています。

あなたが使用している生成AIを<複数>選択してください。



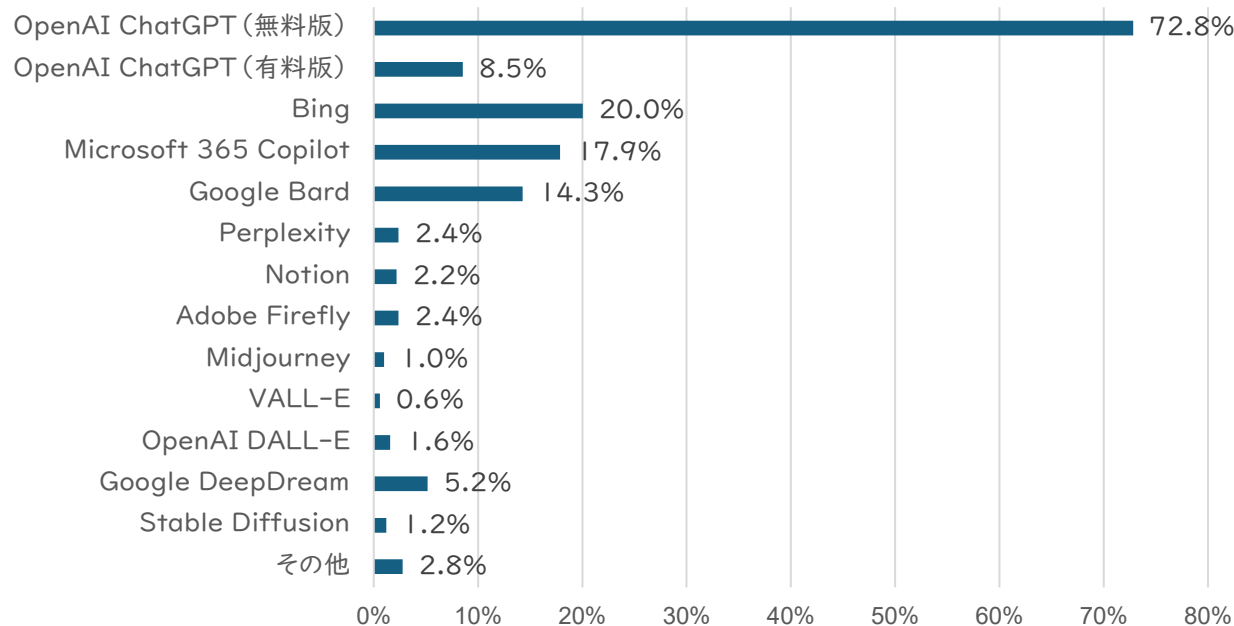
利用している生成AIのサービス（教員）

・2025年度の調査では、教員の67.4%がOpenAI ChatGPT無料版を利用しており、依然として最も利用されているサービスです。しかし、Google Gemini（旧Bardを含む）が30.8%、Microsoft Copilot（旧Bingを含む）が28.7%と利用率を伸ばし、主要なツールとしての存在感を増しています。OpenAI ChatGPT有料版も9.1%の利用率を示しました。

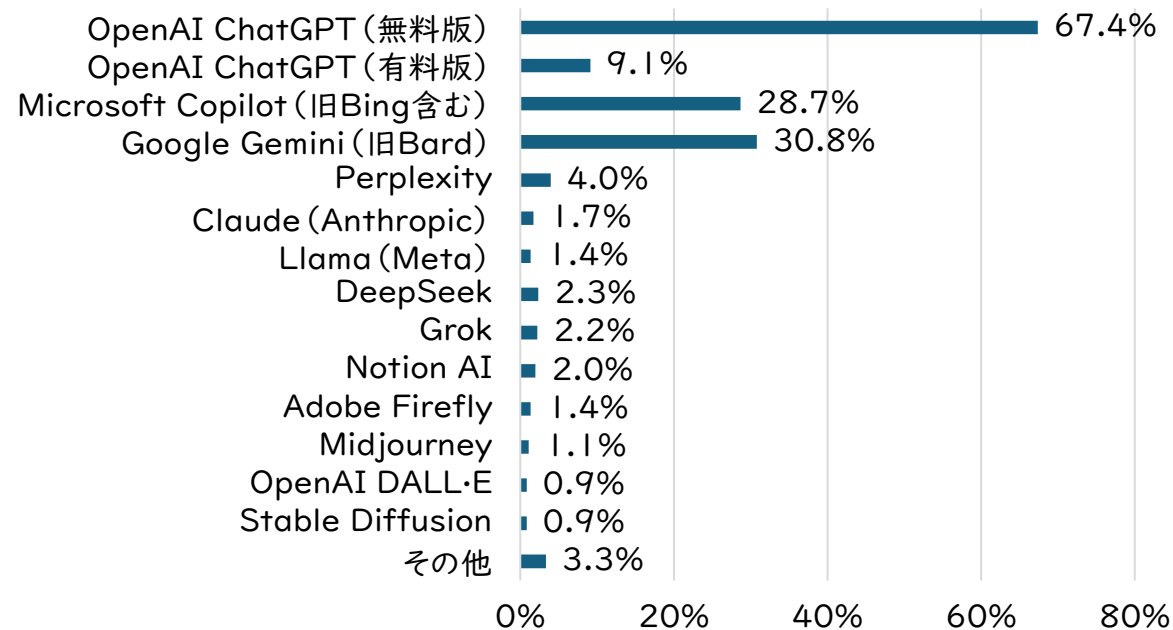
・2024年度の調査と比較すると、教員間の生成AIサービス利用動向に顕著な変化が見られます。OpenAI ChatGPT無料版は、2024年の72.8%から2025年には67.4%へと約5.4ポイント減少しており、その一方で他の主要サービスの利用が増加しました。特にGoogle Bardから改称されたGoogle Geminiは、2024年の14.3%から2025年には30.8%へと倍増以上の伸びを示し、Microsoft 365 Copilot（17.9%）とBing（20.0%）を合算したMicrosoft Copilotも、28.7%と上昇しています。

あなたが使用している生成AIを<複数>選択してください。

2024年 教員 (n=504)

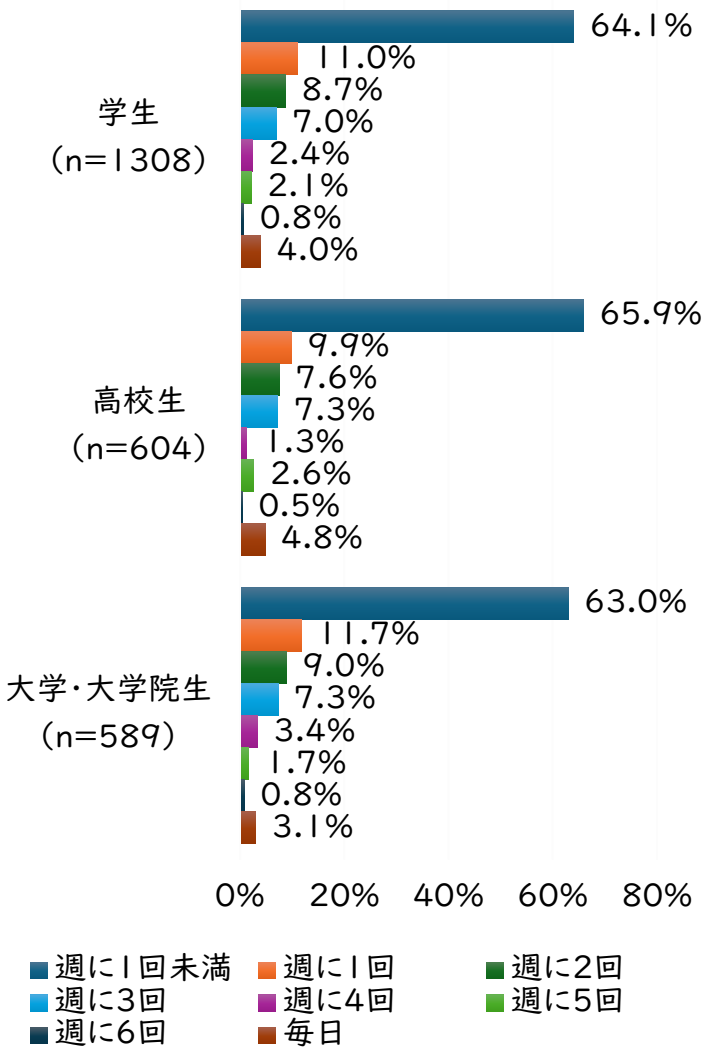


2025年 教員 (n=809)

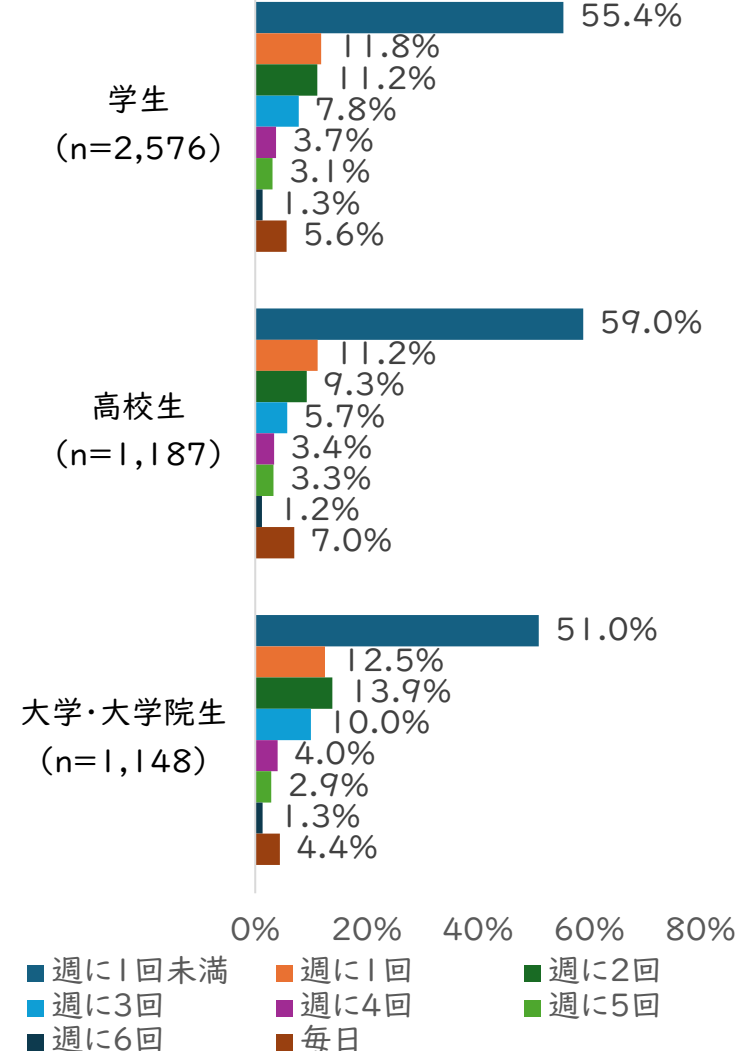


あなたは生成AIを一週間のうち、どのくらい使用していますか？

2024年



2025年

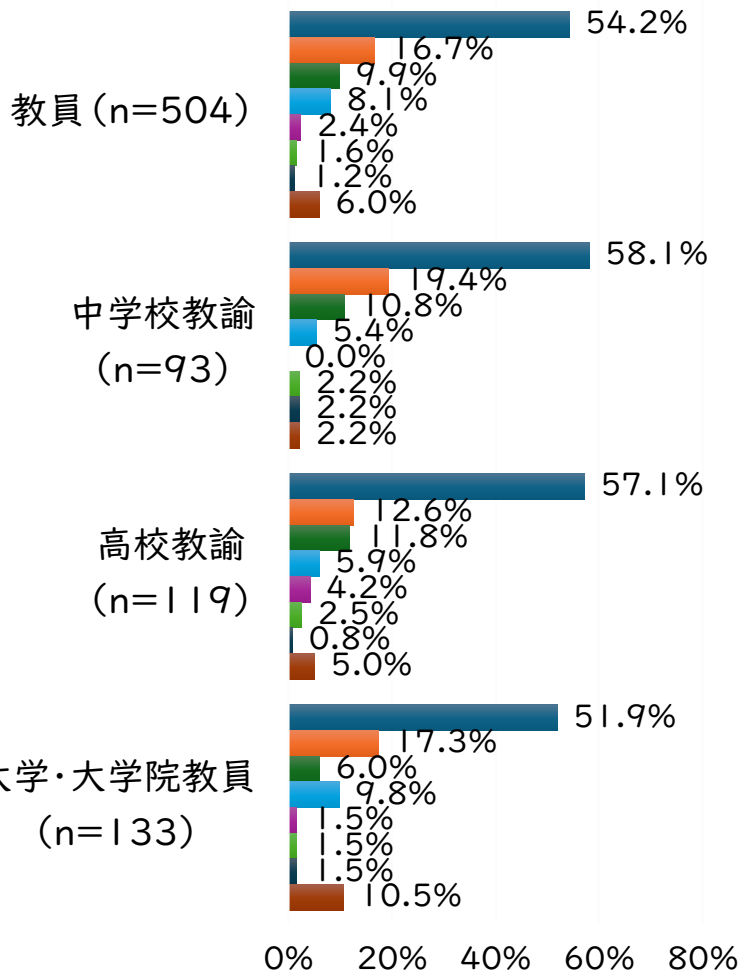


- 2025年度の調査では、学生全体で週に1回未満の生成AI使用頻度であると回答した割合は55.4%でした。
- しかし、週に1回以上利用する学生の割合は合計で44.6%に達しており、特に週に1回の利用が11.8%、週に2回が11.2%と、定期的な利用が広まっています。
- 大学・大学院生では週に1回未満が51.0%と半数程度にまで減少し、高校生では59.0%でした。
- 2024年度の調査では、学生全体の約64.1%が週に1回未満の使用頻度と回答しており、これは頻繁に利用しているというよりは、必要に応じて使用していることが考えられます。
- 大学・大学院生では63.0%、高校生では65.9%が週に1回未満の利用でした。
- 全体として「週に1回未満」の割合が減少しており、その分「週に1回」以上の利用頻度が増加しています。これは、比較的定期的な利用へと移行が進んでいると言えます。

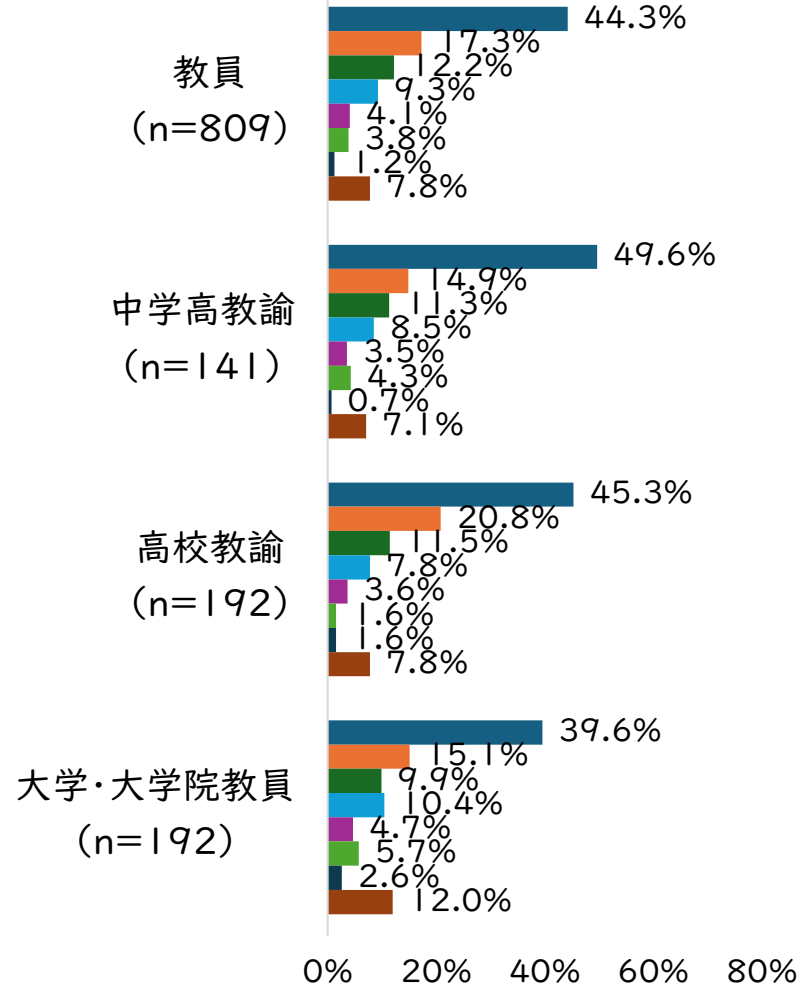
生成AIの使用頻度（教員）

あなたは生成AIを一週間のうち、どのくらい使用していますか？

2024年



2025年



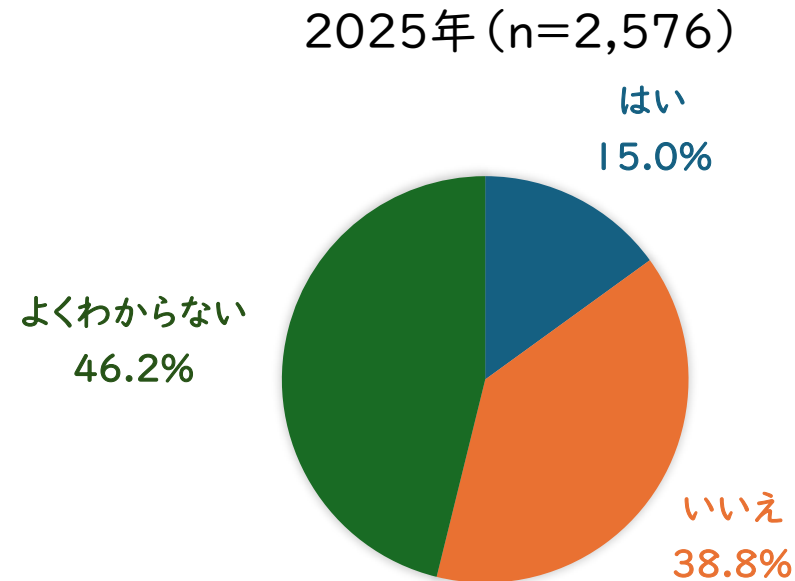
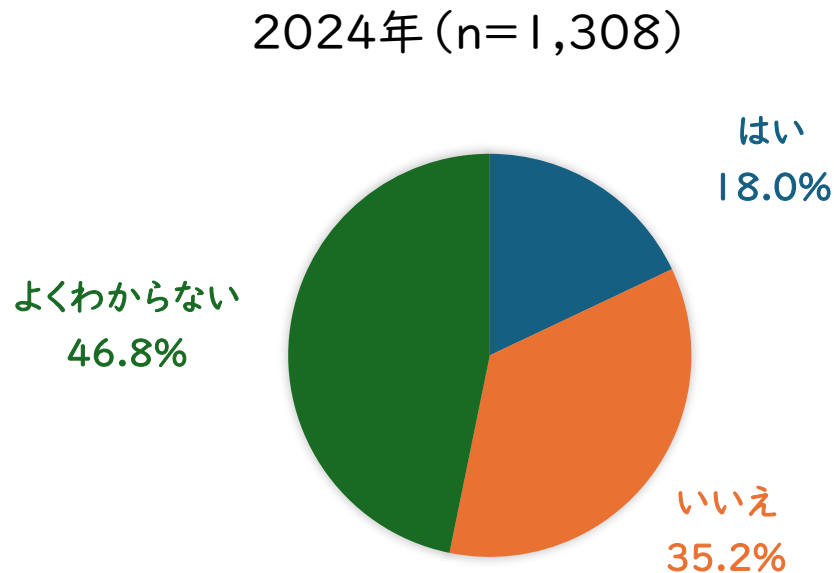
- 2025年度の調査では、教員全体で週に1回未満の生成AI使用頻度であると回答した割合は44.3%でした。
- これは、生成AIを利用する過半数の教員が週に1回以上生成AIを利用していることを示しており、週に1回の利用が17.3%、毎日利用する教員も7.8%に上ります。
- 学校種別に見ると、大学・大学院教員では週に1回未満が39.6%と最も低く、高校教諭は45.3%、中学校教諭は49.6%でした。
- 2024年度の調査では、教員全体の54.2%が週に1回未満の使用頻度と回答しており、使用頻度が高い教員は少数派でした。
- 学校種別では、大学・大学院教員が週に1回未満51.9%と他よりやや利用頻度が高く、毎日利用する割合も10.5%と突出していました。高校教諭は57.1%、中学校教諭は58.1%が週に1回未満の利用でした。
- これらの結果から、これまで偶発的に利用していた教員が、より定期的に生成AIを使用するようになったことが示唆されます。

■ 週に1回未満 ■ 週に1回 ■ 週に2回
 ■ 週に3回 ■ 週に4回 ■ 週に5回
 ■ 週に6回 ■ 毎日

■ 週に1回未満 ■ 週に1回 ■ 週に2回
 ■ 週に3回 ■ 週に4回 ■ 週に5回
 ■ 週に6回 ■ 毎日

- 2025年度の調査では、オプトアウト設定を利用したことがある学生は15.0%に留まりました。一方、「いいえ」（利用したことがない）と回答した学生は38.8%、「よくわからない」と回答した学生は46.2%と、依然として生成AIを利用する半数近くの学生がオプトアウト設定について認識不足であることが明らかになりました。
- 2024年度の調査では、オプトアウト設定を利用したことがある学生は18.0%と少数にとどまり、約35.2%が「いいえ」、そして特に46.8%もの学生が「よくわからない」と回答していました。
- この結果から、オプトアウト設定の利用がまだ行き届いておらず、情報提供と必要性の認識を促す機会の必要性がありました。しかしながら、2025年度の調査結果を見る限り、この状況は改善されたとは言えません。

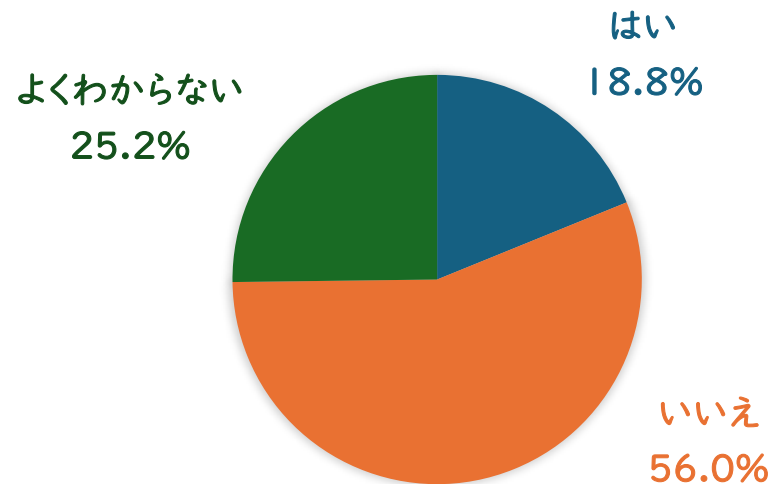
生成AIに入力した内容が利用されないようにするためのオプトアウト設定を利用したことがありますか？



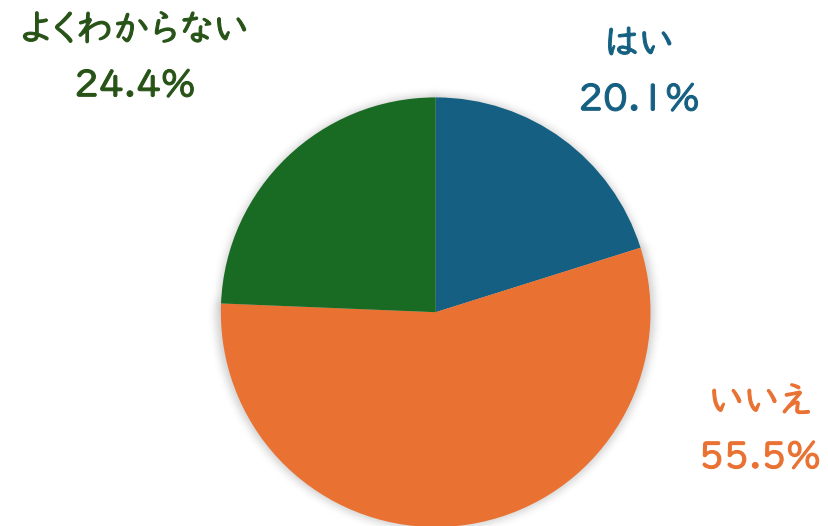
- 2025年度の調査の結果をみると、オプトアウト設定を利用したことがある教員は20.1%でした。「いいえ」（利用したことがない）と回答した教員は55.5%と依然として過半数を占め、「よくわからない」と回答した教員は24.4%でした。
- 2024年度の調査では、オプトアウト設定を利用したことがある教員は18.8%にとどまり、56.0%が「いいえ」、25.2%が「よくわからない」と回答していました。
- この結果から、教員においてもオプトアウト設定の利用は限定的であり、その認識も十分ではないことが示唆されます。
- 2024年度から2025年度にかけての推移を見ると、わずかながら改善の兆しが見られる一方で、依然として多くの教員がオプトアウト設定を活用していない状況が続いています。

生成AIに入力した内容が利用されないようにするためのオプトアウト設定を利用したことがありますか？

2024年 (n=504)



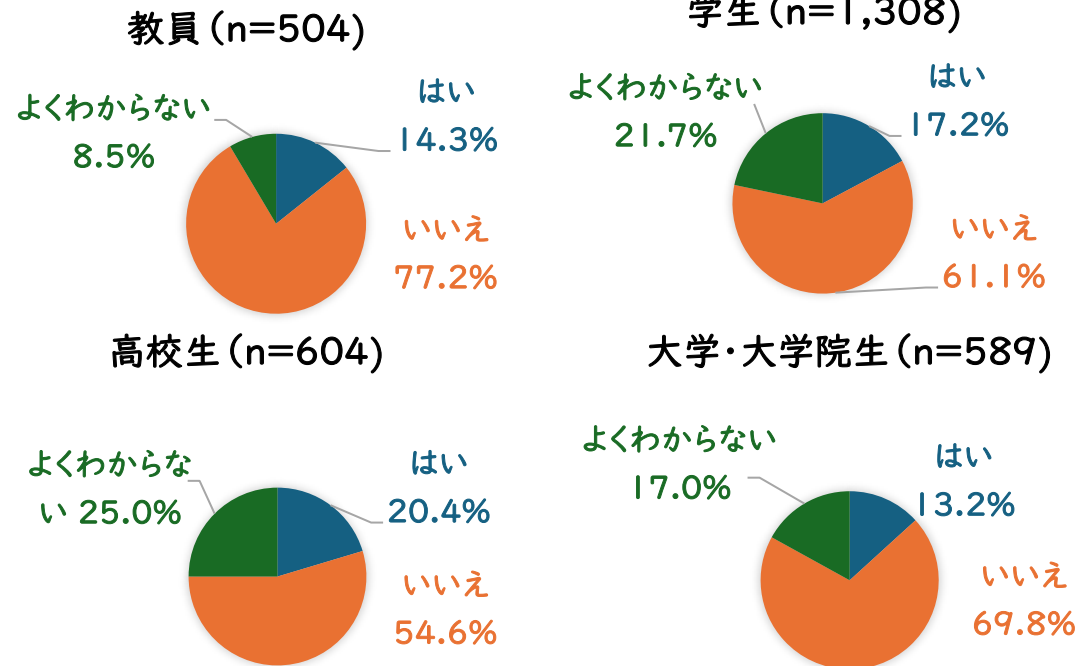
2025年 (n=809)



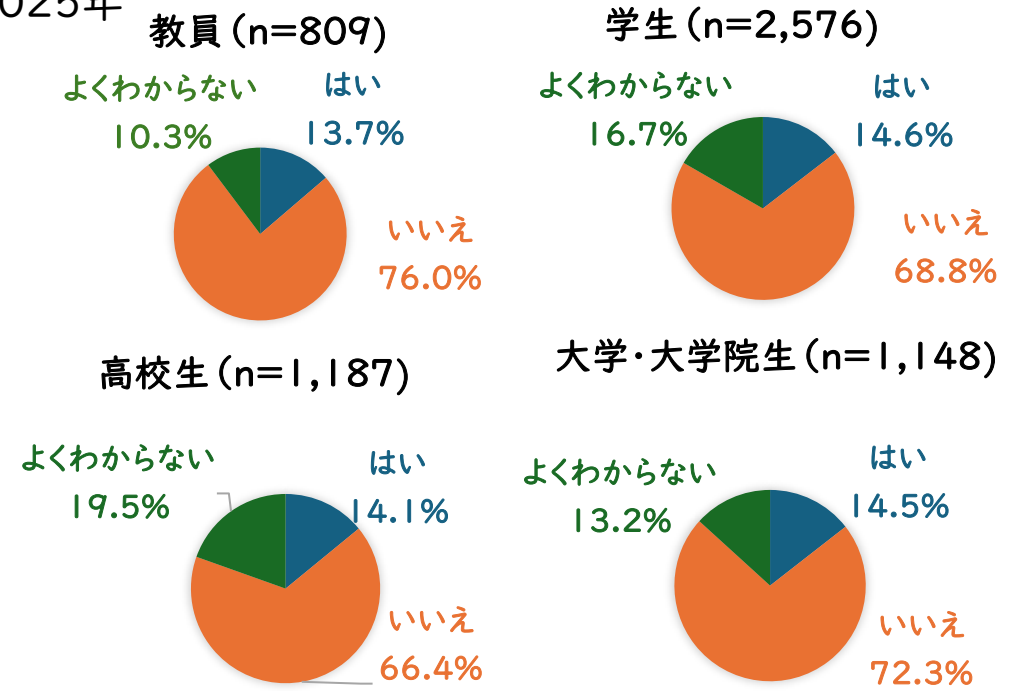
- 2024年の調査では、個人情報の入力経験が「はい」と回答した学生は17.2%、教員は14.3%でした。2025年の調査では、学生は14.6%、教員は13.7%とわずかに減少しました。しかし、「よくわからない」と回答した割合は、学生が21.7%から16.7%へ、教員が8.5%から10.3%へと変化しています。
- 学生を学校種別に見ると、個人情報を入力したか「よくわからない」と回答した割合は、2024年調査では高校生が25.0%と大学・大学院生よりも8ポイント高い数値でした。2025年の調査では、高校生の「よくわからない」の割合は19.5%と減少したものの、大学・大学院生の13.2%との間で依然として認識の差が見られます。
- これらのことから、学生・教員ともに個人情報の入力経験は横ばいであるものの、個人情報の入力に関する認識にはばらつきがあり、特に高校生に対しては個人情報に関する学びの機会を提供していくことが引き続き必要であると考えられます。

あなたは、生成AIに個人情報（氏名、生年月日、住所、所属大学・学校名等）を入力したことがありますか？

2024年



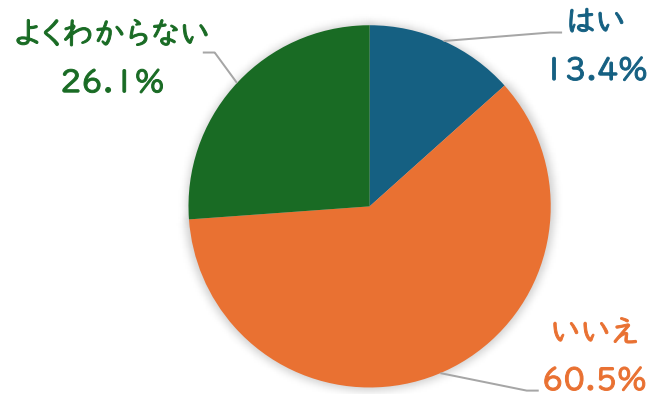
2025年



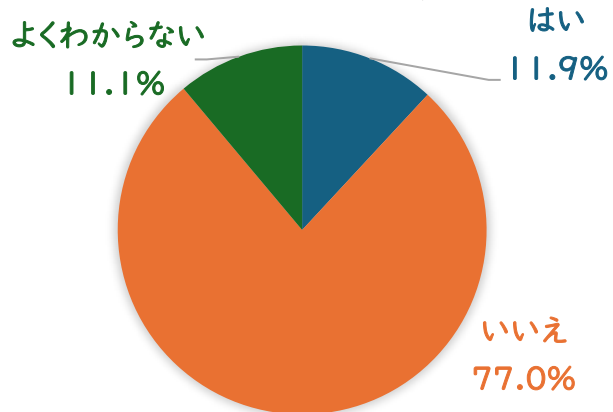
あなたは、生成AIにプライバシー情報（「個人が秘密にしたい情報」や「公開されると私生活に干渉される可能性がある情報」）を入力したことがありますか？

2024年

学生 (n=1,308)

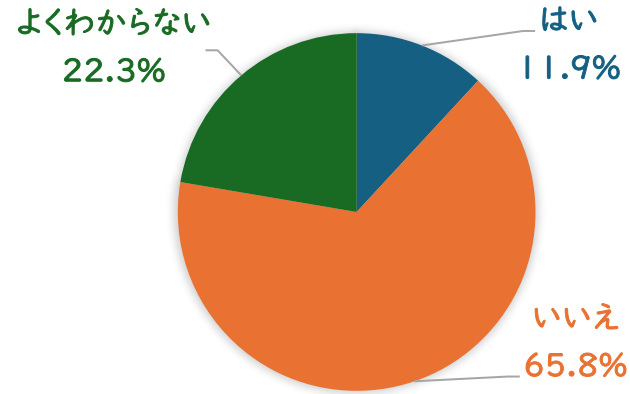


教員 (n=504)

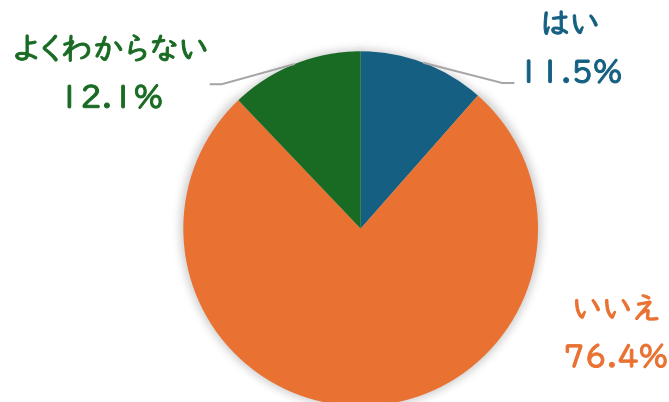


2025年

学生 (n=2,576)



教員 (n=809)



• 2024年の調査では、プライバシー情報の入力経験について「はい」と回答した学生は13.4%、教員は11.9%でした。2025年の調査では、学生は11.9%、教員は11.5%とわずかに減少しました。

• しかし、「よくわからない」と回答した割合は、2024年調査では学生が26.1%と、教員の11.1%を大きく上回っていました。2025年の調査では、この割合が学生で22.3%へと減少した一方で、教員は12.1%とわずかに増加しました。依然として、教員に比べて学生の方がプライバシー情報の入力経験を「よくわからない」と回答する傾向にあることが示されています。

• これらの結果から、学生と教員はともにプライバシー情報の入力経験は少ないものの、学生のプライバシー情報に関する知識と意識を向上させるための啓発の機会を提供していくことが引き続き必要であると考えられます。

教員の生成AIの使用用途

- ・2024年の調査では、「授業資料や教材の作成」の利用率が中学教諭で46.2%、高校教諭で40.3%と最も高かった一方、大学・大学院教員では「情報の収集」が51.1%で最も高く、次に「外国語の翻訳」が42.1%でした。
- ・2025年の調査では、教員全体の傾向として、「授業資料や教材の作成」（40.3%）と「情報の収集」（37.8%）の利用率が依然として高く、両用途の利用率がほぼ同率となりました。

項目	教員		中学校教諭		高校教諭		大学・大学院教員	
	2024年	2025年	2024年	2025年	2024年	2025年	2024年	2025年
授業資料や教材の作成	37.7%	40.3%	46.2%	39.7%	40.3%	43.8%	27.1%	35.4%
テスト問題・設問の作成	20.8%	22.9%	22.6%	26.2%	27.7%	30.2%	13.5%	13.5%
学生の質問への回答	10.1%	12.7%	7.5%	13.5%	10.1%	16.1%	3.8%	10.4%
生徒・学生への評価・コメントの作成	10.3%	12.9%	9.7%	12.8%	10.9%	14.6%	8.3%	8.3%
授業計画の作成	11.9%	14.6%	9.7%	13.5%	14.3%	12.5%	9.8%	13.0%
情報の収集	39.1%	37.8%	37.6%	29.8%	39.5%	41.1%	51.1%	44.8%
外国語の翻訳	26.2%	25.8%	19.4%	19.9%	21.8%	23.4%	42.1%	39.1%
自分の学習ツールとしての活用	24.2%	22.1%	15.1%	19.9%	27.7%	19.3%	31.6%	27.1%
データ分析・数値計算	12.9%	15.7%	5.4%	16.3%	14.3%	15.6%	15.8%	15.1%
表やグラフの作成	8.1%	10.3%	6.5%	5.0%	10.1%	11.5%	6.0%	10.4%
プログラム・コードの作成・デバッグ	11.5%	12.0%	5.4%	8.5%	12.6%	14.1%	16.5%	14.6%
アンケートの作成	11.9%	13.5%	10.8%	15.6%	13.4%	12.0%	9.0%	6.3%
画像・動画・音声の生成	9.9%	10.5%	6.5%	9.9%	10.9%	9.9%	12.8%	4.2%
報告書の作成	9.9%	17.3%	7.5%	16.3%	10.9%	19.8%	11.3%	19.8%
研究論文の執筆	5.6%	7.7%	1.1%	3.5%	5.0%	5.2%	11.3%	14.6%
校務に関する書類・記事・お便りの作成	16.1%	24.6%	19.4%	30.5%	24.4%	27.6%	9.8%	10.9%
文章の校正	20.2%	28.7%	21.5%	24.8%	25.2%	27.6%	27.1%	37.0%
その他	4.0%	1.7%	4.3%	3.5%	4.2%	2.1%	3.0%	0.5%

・特筆すべきは、「授業資料や教材の作成」は2024年の37.7%から40.3%へ、「テスト問題・設問の作成」は20.8%から22.9%へ、「外国語の翻訳」は26.2%から25.8%へと、多くの用途で利用率が増加していることです。

・大学・大学院教員においては、「情報の収集」が44.8%と最も高い利用率を維持しており、「外国語の翻訳」も39.1%と高い水準でした。また、高校教諭は「授業資料や教材の作成」が43.8%と最も高く、中学教諭も39.7%で最も高くなりました。

・これらの結果から、教員は校種を問わず、生成AIを授業準備や研究の効率化に広く活用しており、特に情報の収集や教材作成といったコア業務での利用が広がっているとと言えるでしょう。

学生の生成AIの使用用途

・2024年の調査では、「授業の課題やレポートの作成」が最も多く、57.6%の学生がこの経験があると回答していました。2025年の調査では、この割合が58.3%と微増し、6割近い学生がAIを学業に活用していることが示されました。また、「情報の収集」の用途も継続して高く、2024年の33.7%から2025年には35.9%に増加しています。「データ分析・数値計算」や「詩、物語、小説などの作成」といった用途も増加傾向にあり、学生が生成AIをより多様な目的で利用し始めていることがうかがえます。

・学校種別に見ると、大学・大学院生は引き続き「授業の課題やレポートの作成」の利用率が最も高く、2024年の57.7%から2025年には61.8%へと増加しました。一方で、高校生は2024年の57.1%から56.5%とわずかに減少しています。

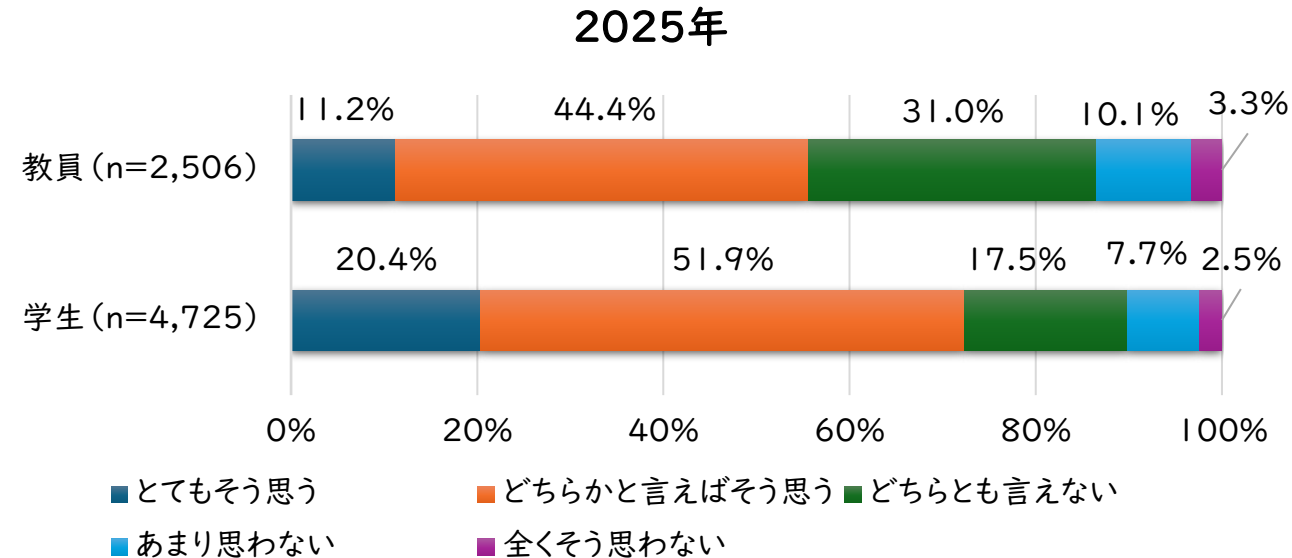
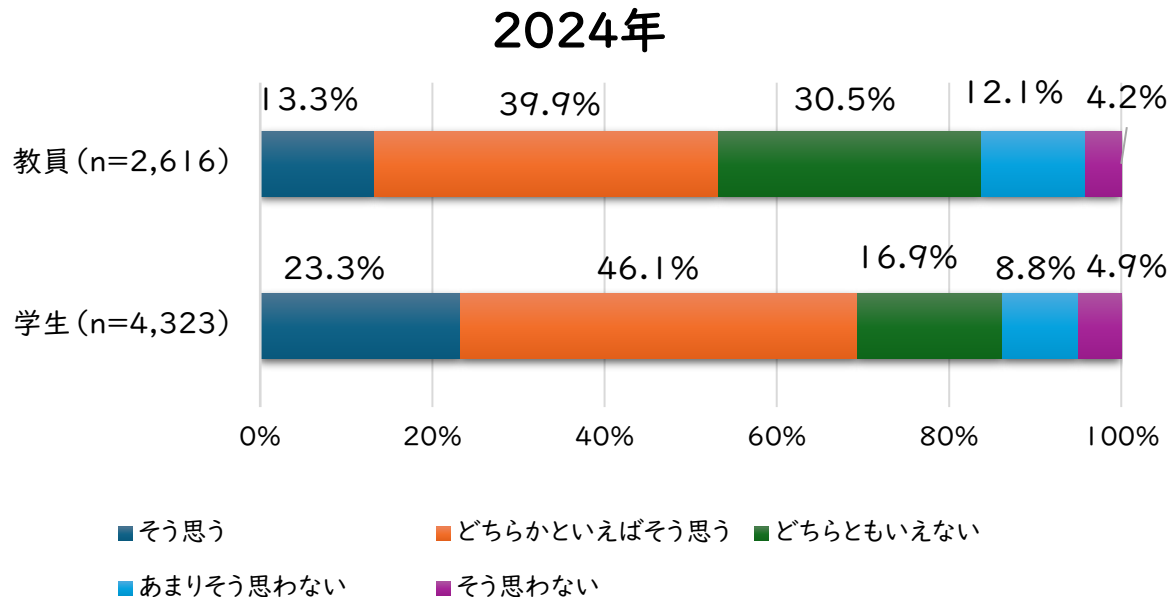
・これらの結果から、学生は学業において生成AIを徐々に拡張させており、特に大学・大学院生の間ではその活用がより進んでいると言えるでしょう。

項目	学生		高校生		大学・大学院生	
	2024年	2025年	2024年	2025年	2024年	2025年
授業の課題やレポートの作成	57.6%	58.3%	57.1%	56.5%	57.7%	61.8%
語学学習	22.7%	22.1%	24.8%	23.5%	20.5%	21.5%
テスト問題の回答	14.9%	16.3%	16.1%	17.0%	13.8%	15.2%
情報の収集	33.7%	35.9%	34.1%	34.0%	34.1%	37.4%
外国語の翻訳	27.6%	28.6%	31.3%	30.9%	24.1%	27.4%
データ分析・数値計算	16.1%	17.6%	16.4%	17.2%	15.8%	18.2%
表やグラフの作成	11.9%	10.5%	13.7%	11.5%	8.7%	9.2%
プログラム・コードの作成・デバッグ	11.1%	10.0%	9.8%	7.3%	12.2%	11.8%
画像・動画・音声の生成	12.8%	13.0%	15.2%	14.4%	9.8%	10.7%
研究論文の執筆	5.8%	6.0%	5.3%	5.8%	7.0%	6.4%
web記事の作成	4.4%	4.0%	5.1%	4.7%	3.7%	3.4%
ソーシャル・メディアへの投稿文作成	3.9%	4.2%	4.1%	4.0%	3.6%	4.4%
詩、物語、小説などの作成	6.2%	8.2%	7.8%	10.0%	3.9%	5.5%
その他	3.1%	4.7%	2.5%	5.4%	3.2%	3.6%

学生と教員の
生成AIの教育・学習利用に対す
る意識

- 「教育・学習における可能性が広がると思う」という設問に対し、2025年では、学生の20.4%が「とてもそう思う」、51.9%が「どちらかといえばそう思う」と回答しており、合計で72.3%が肯定的な見方を示しています。「あまり思わない」は7.7%、「全くそう思わない」は2.5%、「どちらとも言えない」は17.5%でした。「そう思う」および「どちらかといえばそう思う」と回答した学生の割合（72.3%）は、教員の同様の回答（55.6%）を上回っています。
- 一方、教員は11.2%が「とてもそう思う」、44.4%が「どちらかといえばそう思う」と回答し、合計で55.6%が肯定的な見方を示しています。「あまり思わない」は10.1%、「全くそう思わない」は3.3%、「どちらとも言えない」は31.0%でした。
- 2024年の調査では、生成AIによって教育・学習における可能性が広がると考える割合は、学生の方が教員よりも高い傾向にあり、学生と教員の間で生成AIに対する認識のギャップが見られました。
- しかし、2025年には両者ともに生成AIの教育・学習における可能性に対して非常に高い期待を抱いていることが示されました。特に教員層における肯定的な見方の急増は、教育現場での生成AI導入・活用に向けた理解が進んでいることを強く示唆しているでしょう。

教育・学習における可能性が広がると思う

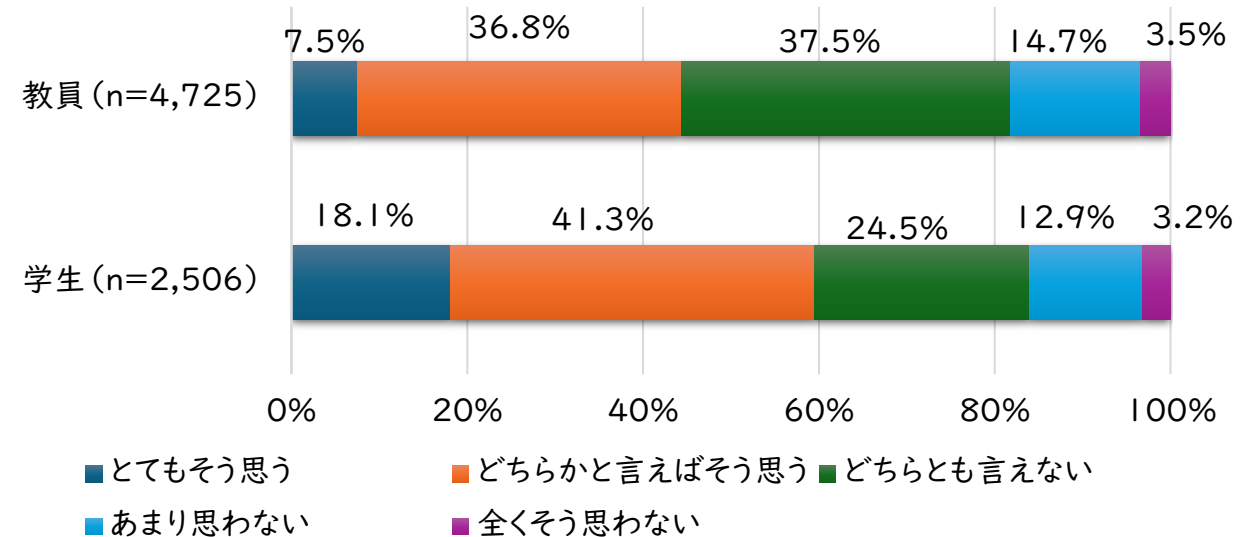
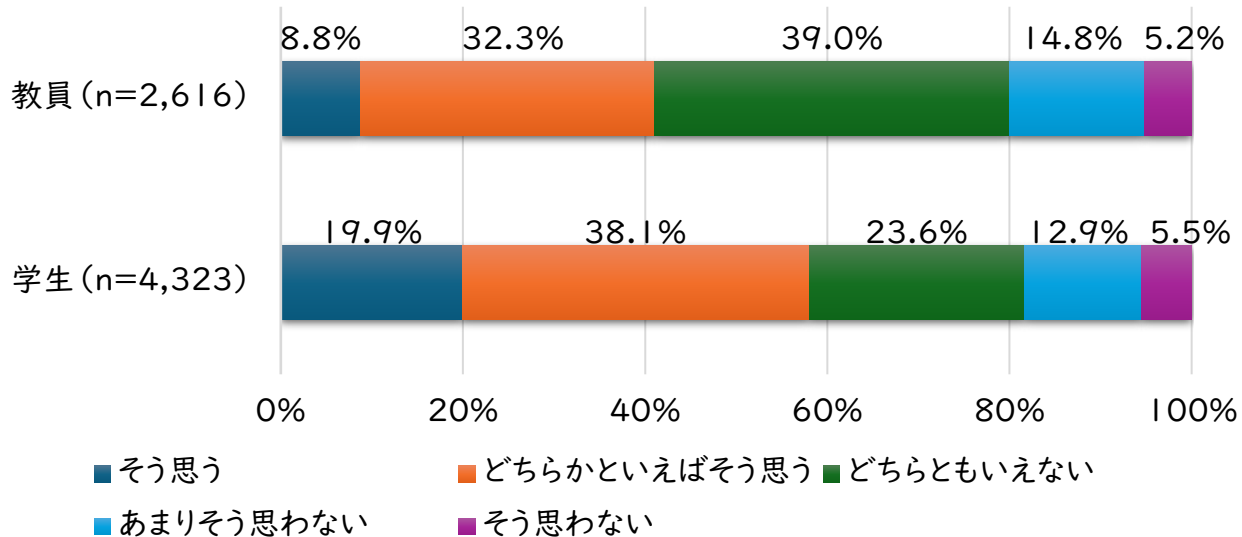


- 「教育・学習上の効果が上がると思う」という設問に対し、2025年では、学生の18.1%が「とてもそう思う」、41.3%が「どちらかといえばそう思う」と回答しており、合計で59.4%が肯定的な見方を示しています。「あまりそう思わない」は12.9%、「全くそう思わない」は3.2%、「どちらともいえない」は24.5%でした。
- 一方、教員は7.5%が「とてもそう思う」、36.8%が「どちらかといえばそう思う」と回答し、合計で44.3%が肯定的な見方を示しています。「あまり思わない」は14.7%、「全くそう思わない」は3.5%、「どちらともいえない」は37.5%でした。
- 2024年から2025年を比較すると、生成AIに対する学生と教員の認識は肯定的な方向に前進してい傾向が見られます。
- 2024年時点では、学生が教員よりも生成AIの教育・学習における可能性や効果を肯定的に見ていた一方で、教員は慎重な姿勢が目立ちました。しかし2025年には、学生の肯定的な見方がさらに強化されただけでなく、教員の肯定的な回答も大幅に増加しています。「どちらともいえない」の割合が減少し、教員も生成AIの教育的価値をより強く認識し始めていることが示唆されます。

教育・学習上の効果が上がると思う

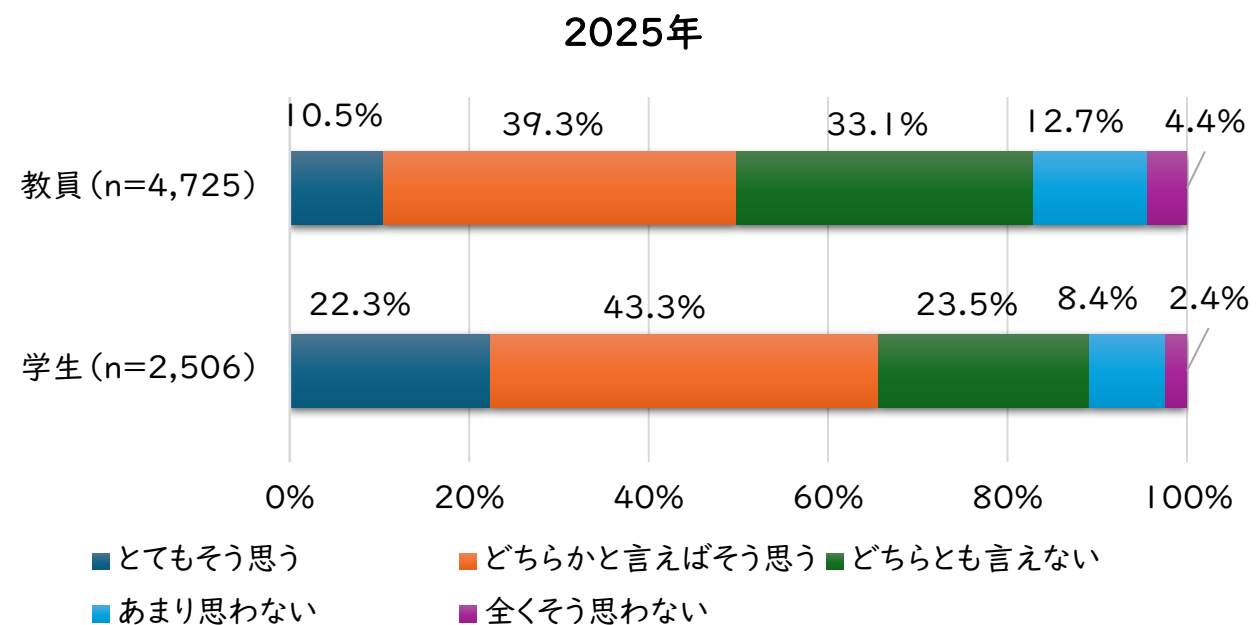
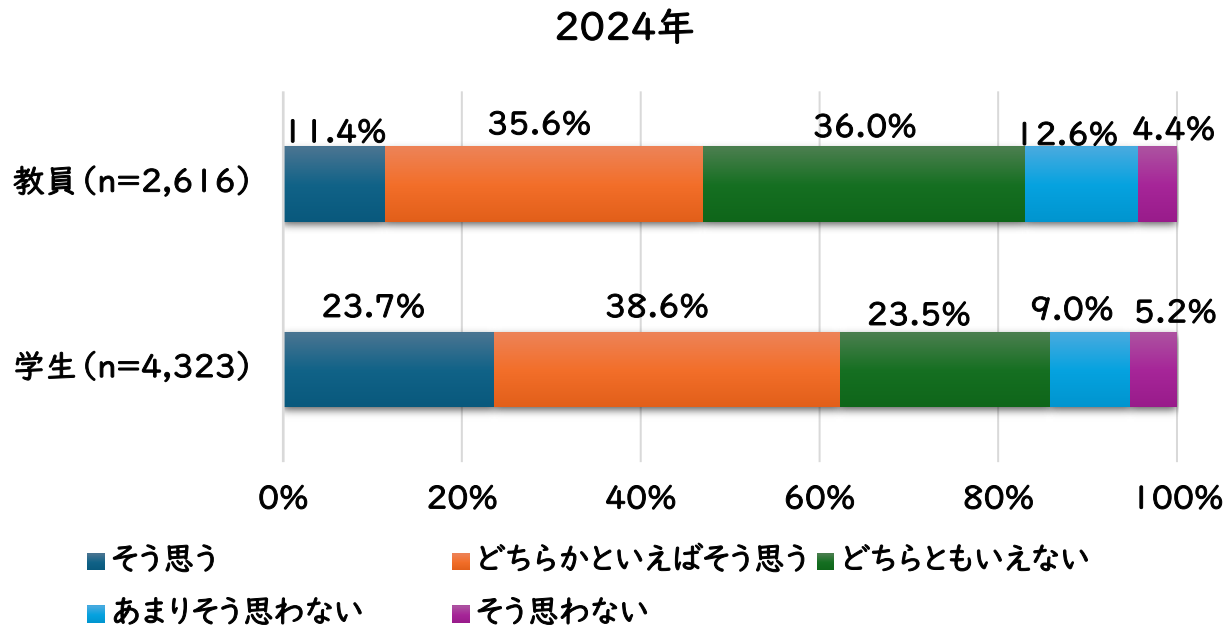
2024年

2025年



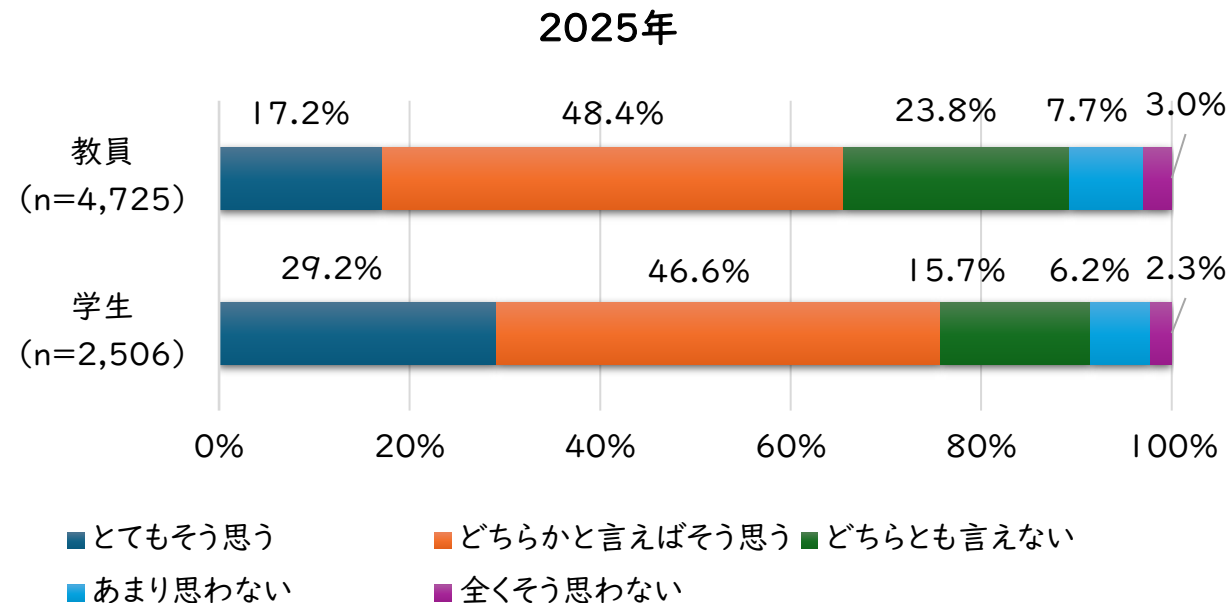
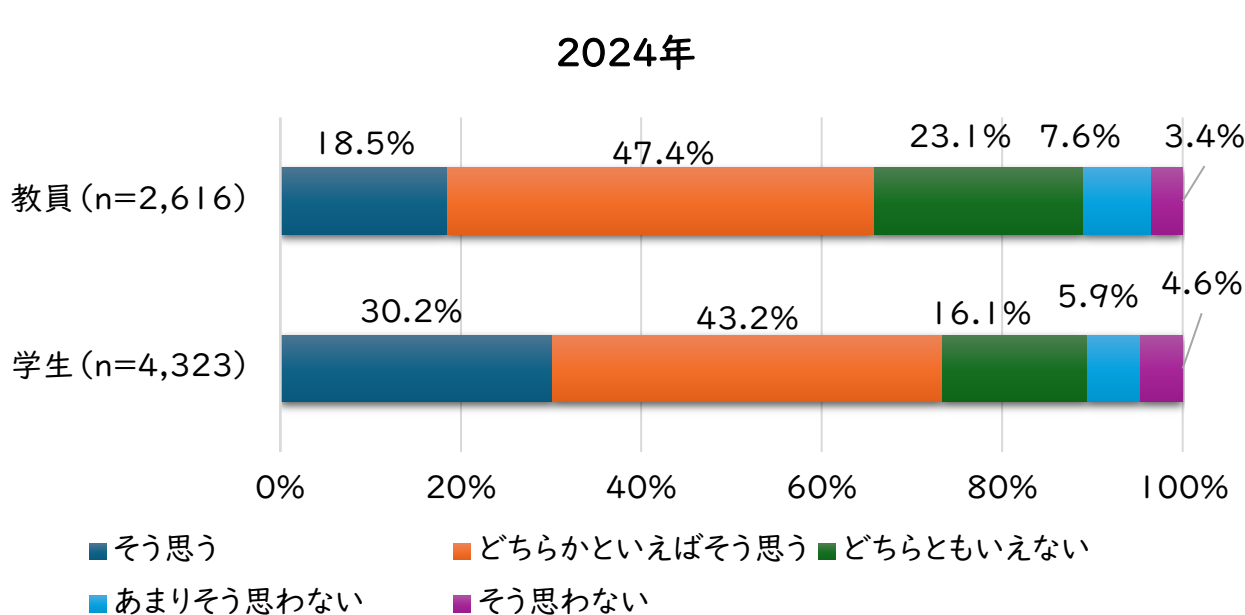
- 「生成AIは自分の将来に役立つと思う」という設問に対し、2025年では、学生の22.3%が「とてもそう思う」、43.3%が「どちらかと言えばそう思う」と回答しており、合計で65.6%が肯定的な見方を示しています。「あまりそう思わない」は8.4%、「全くそう思わない」は2.4%、「どちらとも言えない」は23.5%でした。
- 一方、教員は10.5%が「とてもそう思う」、39.3%が「どちらかと言えばそう思う」と回答し、合計で49.8%が肯定的な見方を示しています。「あまりそう思わない」は12.7%、「全くそう思わない」は4.4%、「どちらとも言えない」は33.1%でした。
- 2024年から2025年にかけて、生成AIが「将来に役立つ」という学生・教員双方の肯定的な見方が強まりました。特に学生は高い期待を抱き続け、2025年には肯定派が65.6%に増加。教員も肯定派が49.8%に微増し、「どちらとも言えない」が減少しました。
- この変化は、生成AIの教育・学習への導入と活用に対する両者の期待が着実に高まっていると言えるでしょう。

生成AIは自分の将来に役立つと思う



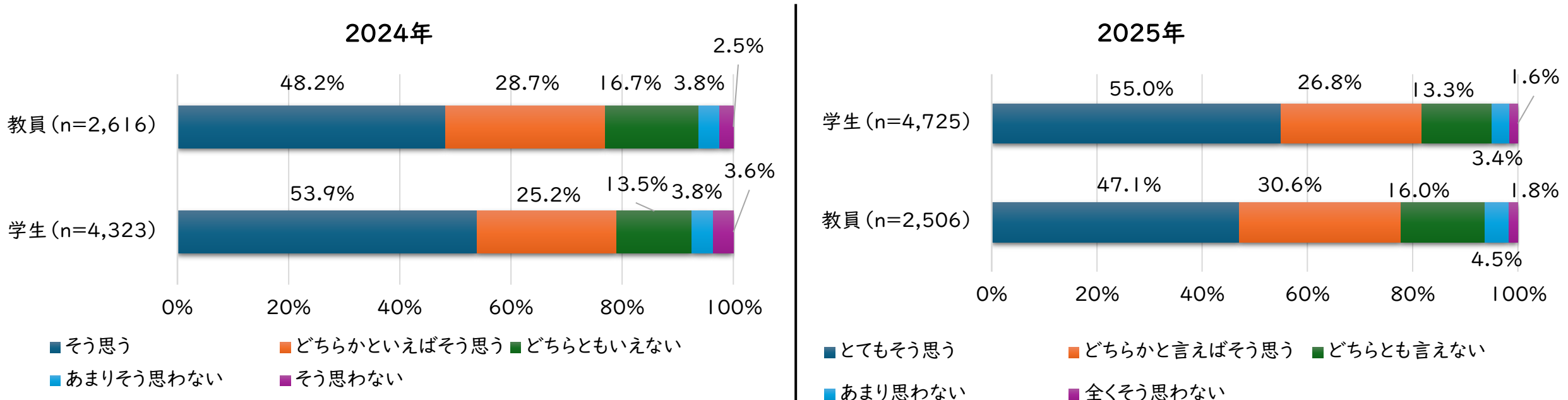
- 「生成AIを活用することで学び方が変化すると思う」という設問に対し、2025年では、学生の29.2%が「とてもそう思う」、46.6%が「どちらかといえばそう思う」と回答しており、合計で75.8%が肯定的な見方を示しています。「あまりそう思わない」は6.2%、「全くそう思わない」は2.3%、「どちらとも言えない」は15.7%でした。
- 一方、教員は17.2%が「とてもそう思う」、48.4%が「どちらかといえばそう思う」と回答し、合計で65.6%が肯定的な見方を示しています。「あまりそう思わない」は7.7%、「全くそう思わない」は3.0%、「どちらとも言えない」は23.8%でした。
- 2024年から2025年にかけて、生成AIによる「学び方の変化」に対する学生と教員の肯定的な認識が両者ともに強化されました。
- 学生の期待は引き続き高く、肯定派が75.8%に微増。教員も、肯定派が65.6%と高い水準を維持し、「どちらとも言えない」の割合が微減したことで、AIが学び方を変えるという明確な認識が浸透したことが示唆されます。

生成AIを活用することで、学び方が変化すると思う



- 「生成AIの利用が、不正行為に該当しないように注意しなければならないと思う」という設問に対し、2025年では、学生の47.1%が「とてもそう思う」、30.6%が「どちらかと言えばそう思う」と回答しており、合計で77.7%が肯定的な見方を示しています。「あまりそう思わない」は4.5%、「全くそう思わない」は1.8%、「どちらとも言えない」は16.0%でした。
- 一方、教員は55.0%が「とてもそう思う」、26.8%が「どちらかと言えばそう思う」と回答し、合計で81.8%が肯定的な見方を示しています。「あまりそう思わない」は3.4%、「全くそう思わない」は1.6%、「どちらとも言えない」は13.3%でした。
- 2024年から2025年にかけて、生成AIの「不正利用への注意」意識は、学生・教員ともに引き続き高い水準を維持しています。特に教員は「とてもそう思う」の割合が大幅に増加し、より強く注意の必要性を認識しています（2024年48.2%から2025年55.0%）。
- 学生は「とてもそう思う」の割合は減少したものの（2024年53.9%から2025年47.1%）、全体として依然8割近い学生が注意の必要性を感じている状況です。

生成AIの利用が、不正行為に該当しないように注意しなければならないと思う

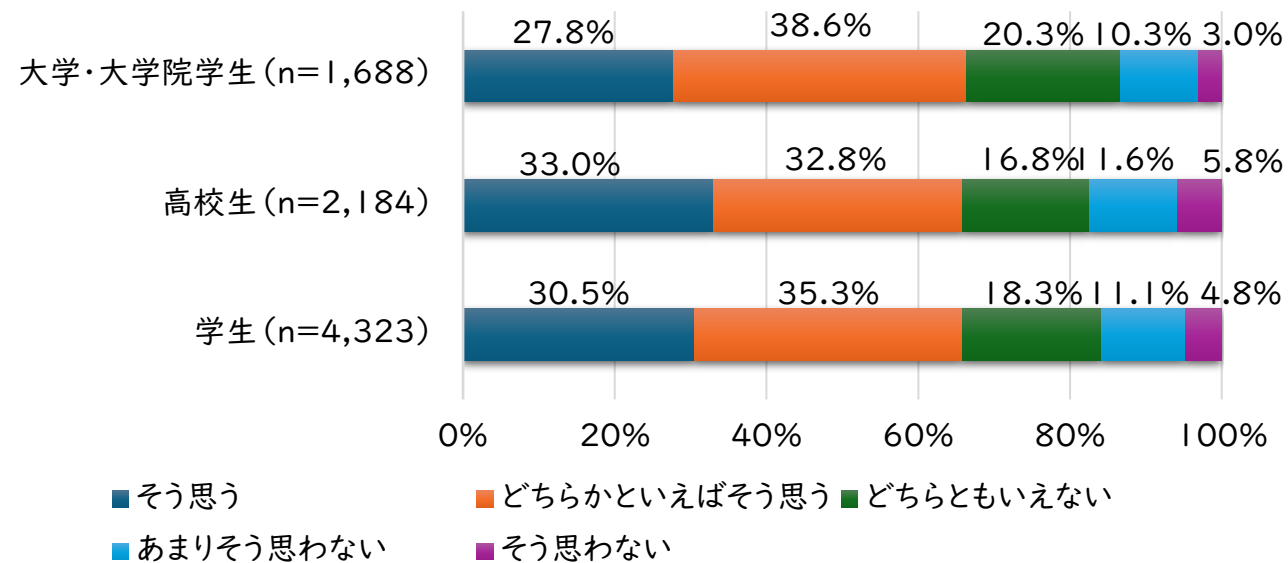


学習活動が生成AIに依存してしまうことへの不安（学生）³⁴

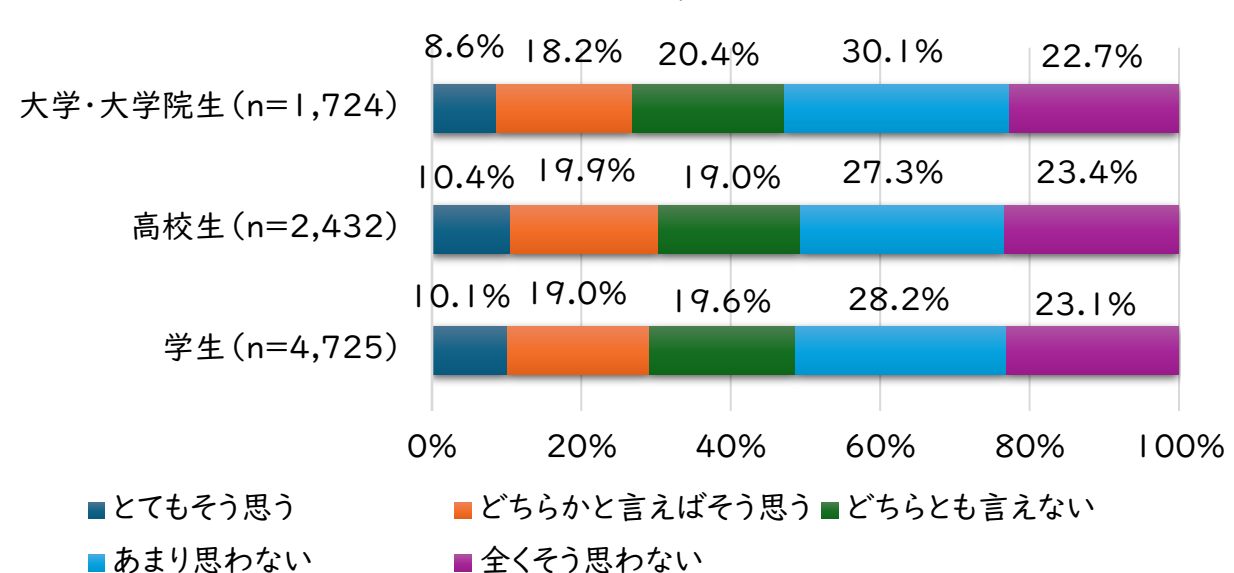
- 2024年の調査では、学生全体で「そう思う」および「どちらかといえばそう思う」と回答した割合は65.8%でした。一方、2025年の調査では29.1%と大幅に減少しました。
- 大学・大学院生：不安を感じる割合が2024年の66.4%から2025年には26.8%へ大幅に減少しました。特に「とてもそう思う」と強く回答した割合が27.8%から8.6%へと大きく減少している点が注目されます。
- 高校生：不安を感じる割合は2024年の65.8%から2025年には30.3%へと大幅に減少しました。「とてもそう思う」と回答した割合は33.0%から10.4%へと大幅に減少しました。
- これらの結果から、学生の「生成AI依存への不安」は全体として大幅に低下しました。ただし約3割は依然として不安ありで、懸念は残っています。

教育・学習が、生成AIに依存してしまうのではないかと不安だ

2024年



2025年



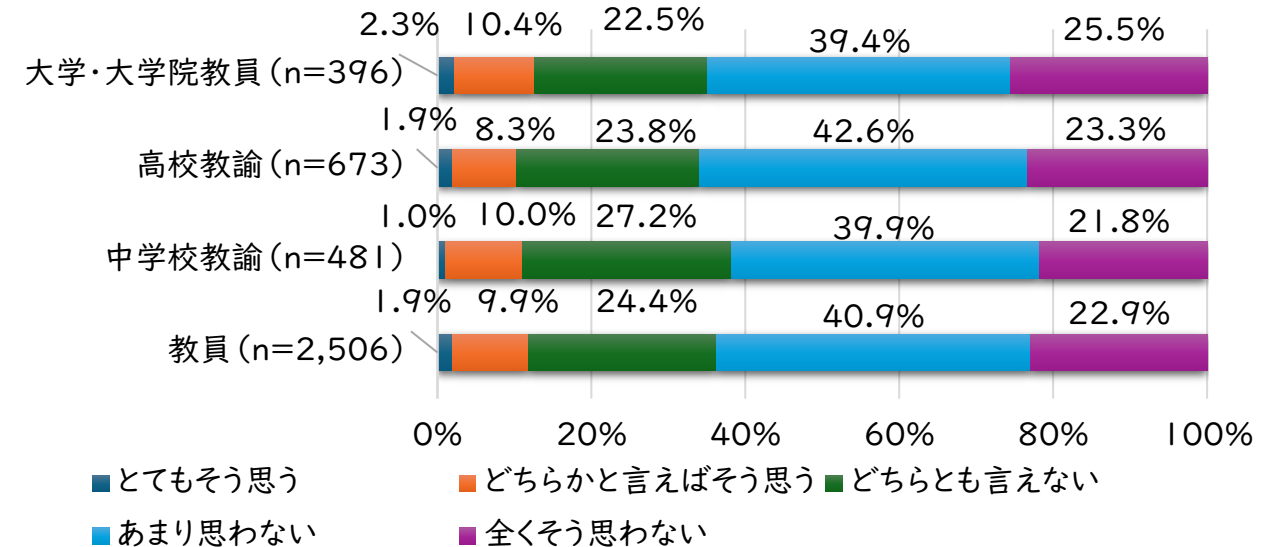
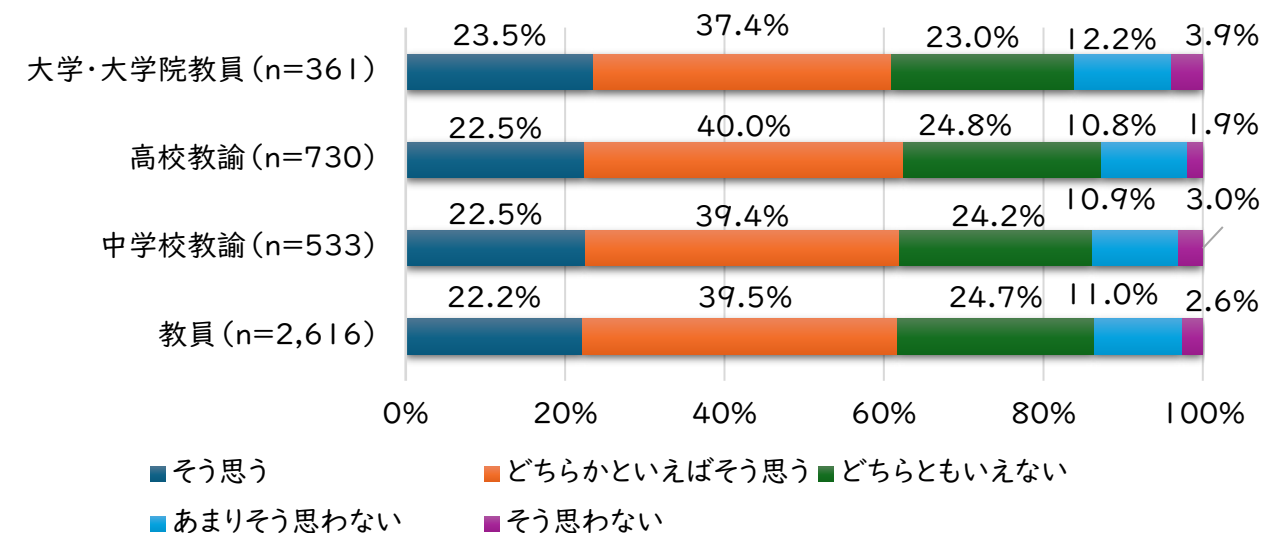
学習活動が生成AIに依存してしまうことへの不安（教員）³⁵

- 2024年の調査と2025年の調査を比較した結果、教育・学習が生成AIに依存してしまうことへの教員の不安は、減少傾向にあることがわかりました。
- 2024年の調査では、教員全体で「そう思う」および「どちらかといえばそう思う」と回答した割合は61.7%でした。一方、2025年の調査では11.8%と、不安を感じる割合が大幅に減少しました。
- 大学・大学院教員は、2024年の60.9%から2025年には12.7%へと大幅に減少し、高校教諭は、2024年の62.5%から2025年には10.2%へと大幅に減少し、中学教諭は、2024年の61.9%から2025年には11.0%へと大幅に減少しています。
- これらの結果から、1年間で教員全体で教育・学習におけるAI依存への不安が大きく低減していることがわかります。

教育・学習が、生成AIに依存してしまうのではないかと不安だ

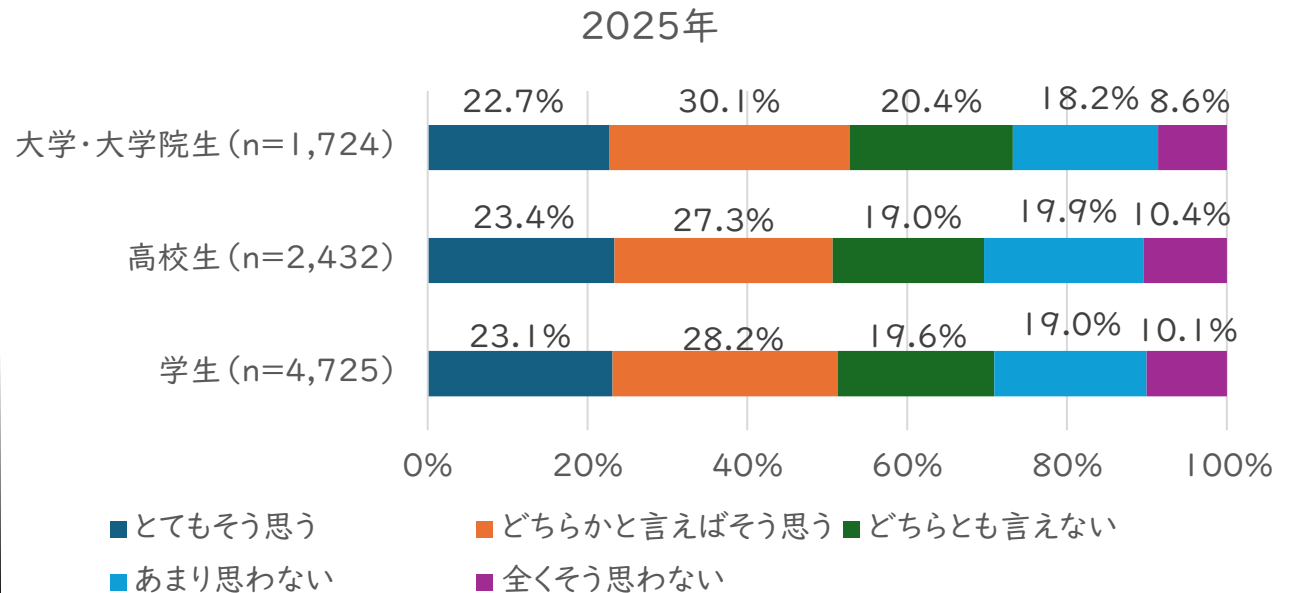
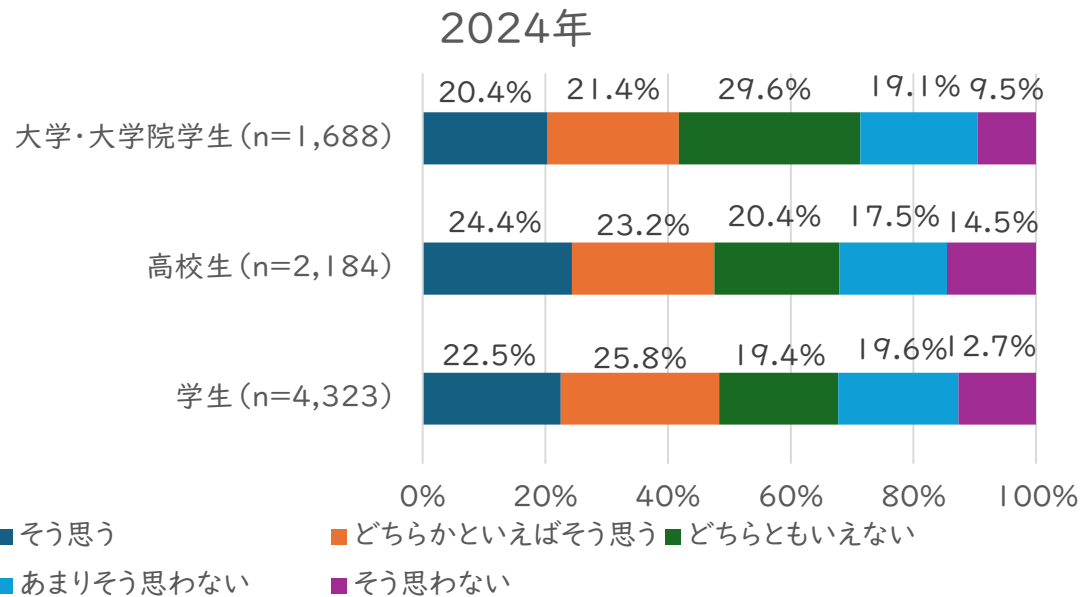
2024年

2025年



- 2025年度の調査では、生成AIを使ったカンニングをしてしまいそうで不安かという質問に対して「とてもそう思う」および「どちらかといえばそう思う」と回答した全学生の割合は51.3%でした。内訳を見ると、大学・大学院生では52.8%が不安を感じており、高校生では50.7%となりました。
- 2024年度の調査では、「そう思う」および「どちらかといえばそう思う」と回答した全学生の割合は48.3%でした。大学・大学院生が41.8%であり、高校生が47.6%となりました。高校生の方がカンニングに対する不安意識が高い傾向が示されていました。
- このように、生成AIの普及に伴い、学生の「AIによる不正利用」への自覚的懸念は高まっていると言えます。

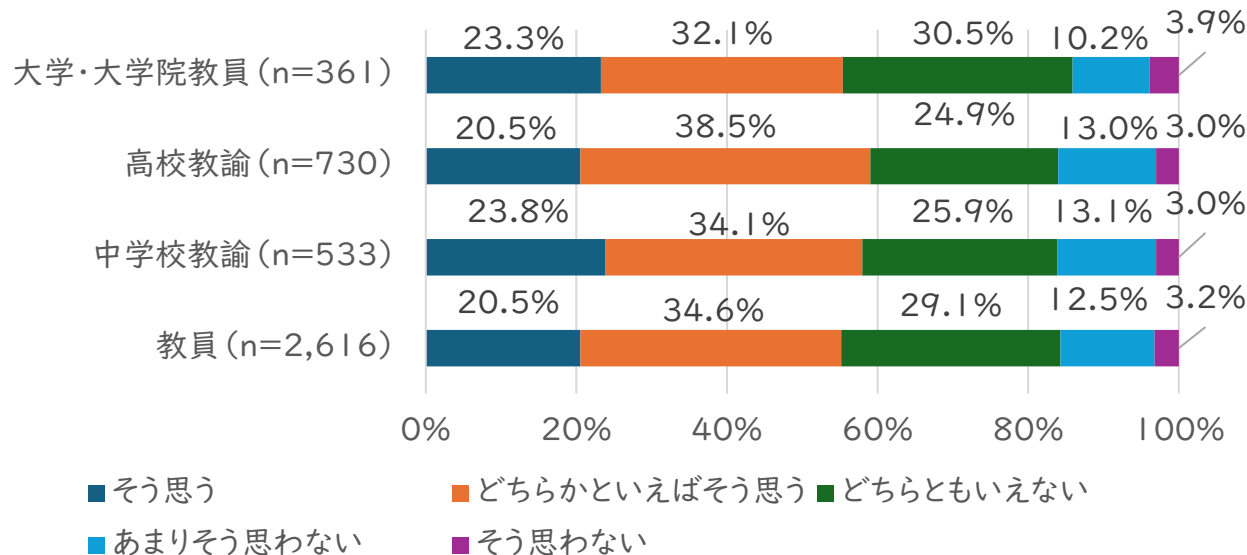
AIを使ってカンニングをしてしまいそうで不安だ



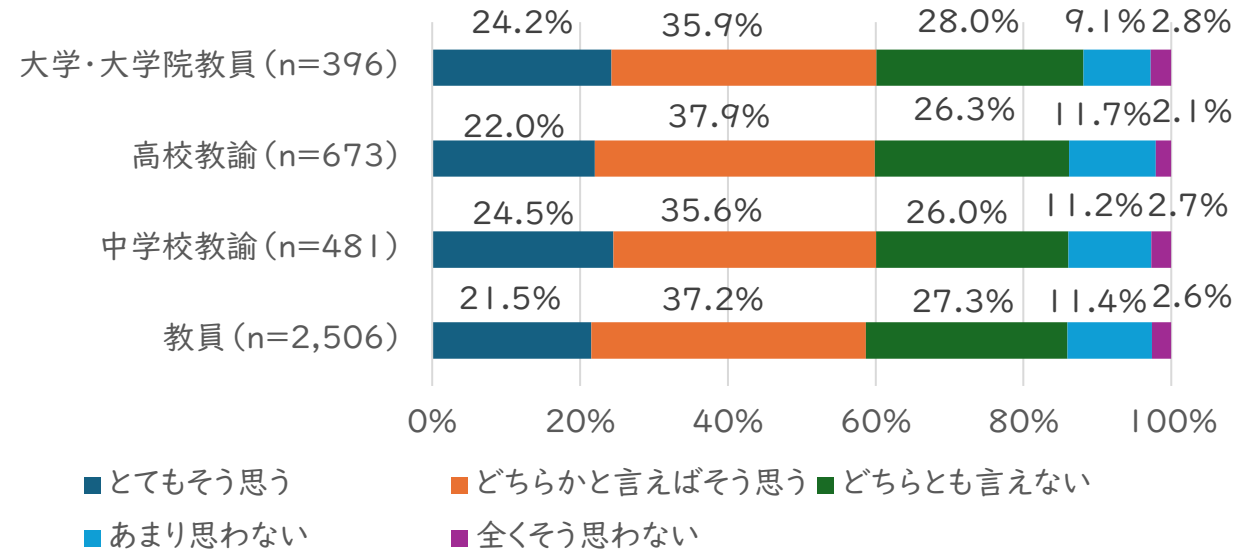
- 2025年度の調査では、生成AIを使ったカンニングをしてしまいそうで不安かという質問に対して「とてもそう思う」および「どちらかといえばそう思う」と回答した教員全体の割合は58.7%でした。学校種別に見ると、大学・大学院教員が60.1%、高校教諭が59.9%、中学校教諭が60.1%となりました。また、「どちらともいえない」と回答した教員は全体で28.0%に減少しています。
- 2024年度の調査では、教員全体で「そう思う」および「どちらかといえばそう思う」と回答した割合は55.1%でした。学校種別では、大学・大学院教員が55.4%、高校教諭が59.0%、中学校教諭が57.9%となり、教員は学生よりも生成AIを使ったカンニングのリスクを感じている傾向が指摘されていました。
- 2025年、教員の生成AIカンニング不安意識は全体で増加しました。AIの普及に伴い、不安を感じる教員が増えており、リスク認識がより明確になっている状況が伺えます。

AIを使ってカンニングしてしまいそうで不安だ

2024年

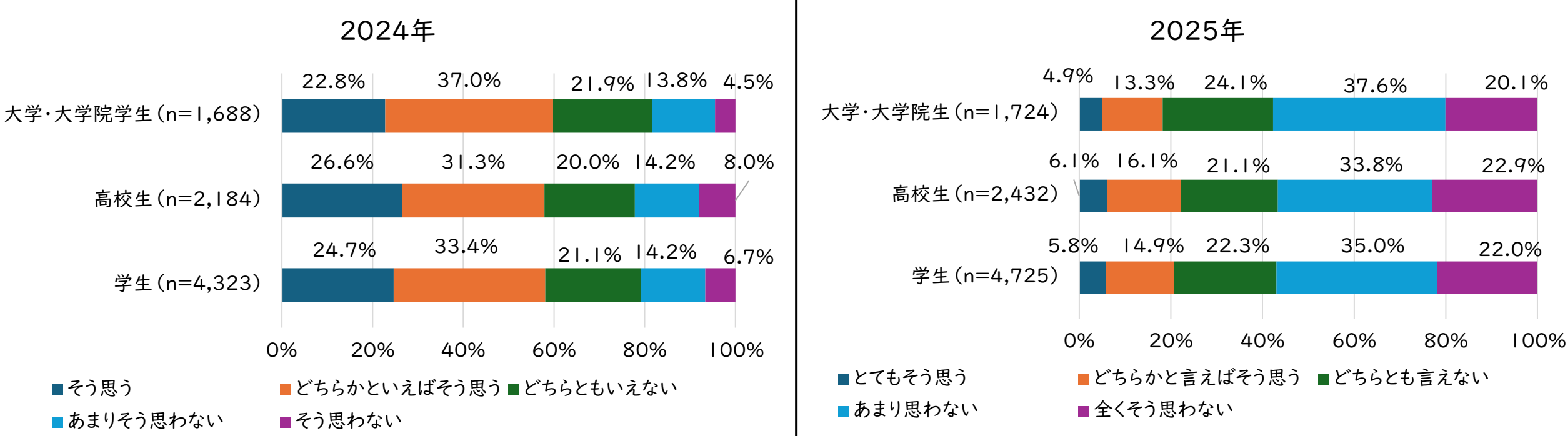


2025年



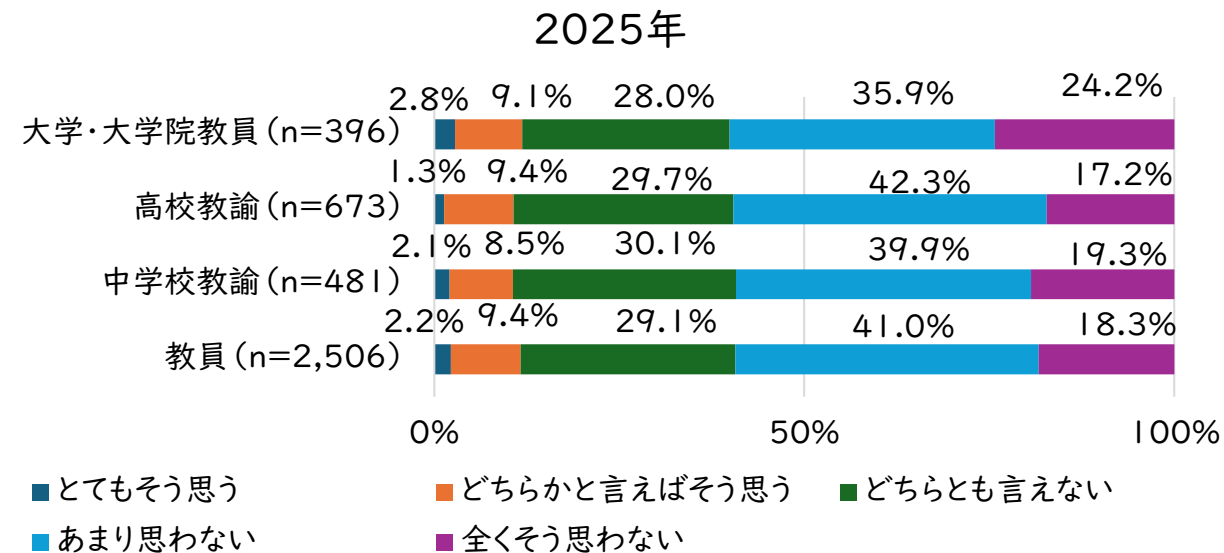
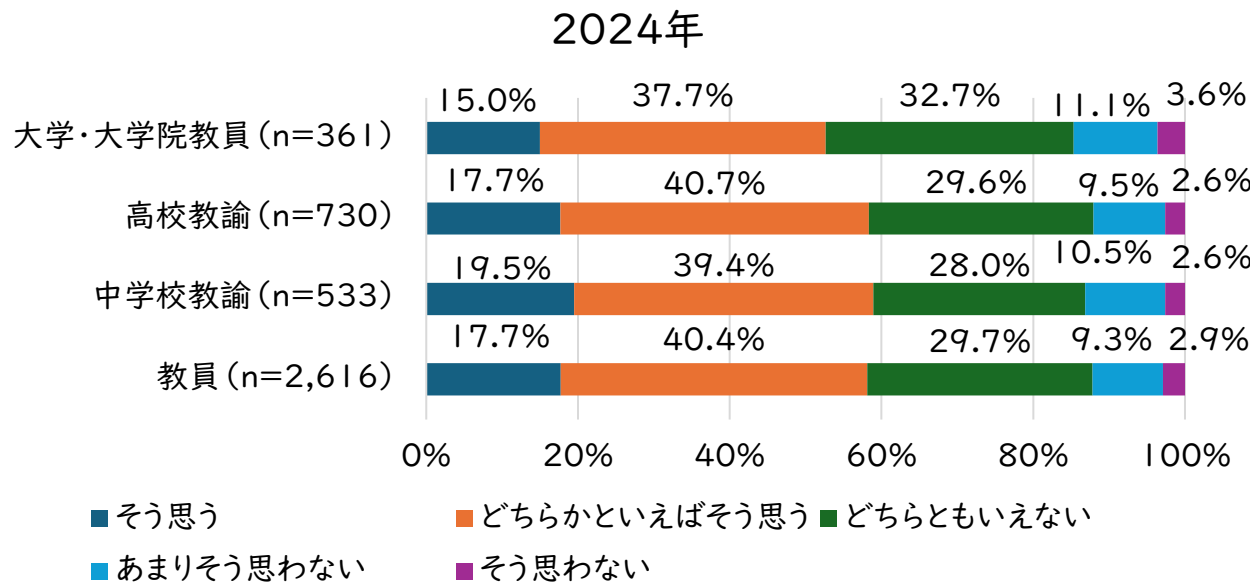
- 2025年度の調査では、学習情報のプライバシーや学校の情報セキュリティに不安を感じるかという質問に対して「とてもそう思う」および「どちらかと言えばそう思う」と回答した学生全体の割合は20.7%でした。学校種別に見ると、大学・大学院生は18.2%、高校生は22.2%、高校生の方が若干、不安を感じていることがわかります。
- 2024年度の調査では、同様の不安を感じると回答した学生全体の割合は58.1%であり、大学・大学院生は59.8%、高校生は57.9%でした。約6割が不安を示しており、とくに大学・大学院生の割合がやや高い傾向にありました。
- この結果を比較すると、2024年度から2025年度にかけて学生の不安感は大幅に減少したことが明らかです。全体で約4割近くの減少が見られ、特に大学・大学院生において顕著です。学生は生成AIの利用環境に慣れ、プライバシーや情報セキュリティに対する不安を相対的に弱めていることがうかがえます。

学習情報のプライバシーや学校の情報セキュリティに関する不安を感じる



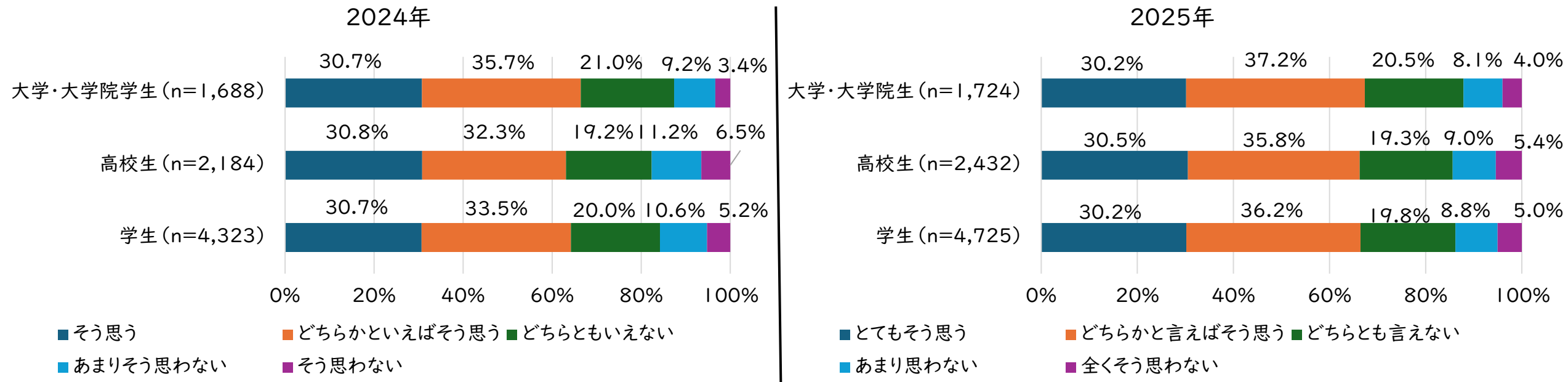
- 2024年の調査では、「そう思う」および「どちらかといえばそう思う」と回答した割合が全教員の58.1%、高校教諭の58.4%、中学校教諭の58.9%と、約6割の教員が不安を感じていました。一方、大学・大学院教員は52.7%と他の教員に比べて若干低い傾向を示していました。
- 2025年の調査では、教員全体で「とてもそう思う」および「どちらかと言えばそう思う」と回答した割合は11.6%にとどまり、不安を感じる教員が大幅に減少していることが明らかになりました。
- 校種別に見ても、大学・大学院教員は11.9%、高校教諭は10.7%、中学校教諭は10.6%と、いずれの層も不安を感じる割合は前年と比較して大幅に低下しています。
- この結果から、2024年の調査とは対照的に、生成AI利用に伴うプライバシーや情報セキュリティへの不安は、多くの教員にとって高い懸念事項ではなくなっていると言えるでしょう。

学習情報のプライバシーや学校の情報セキュリティに関する不安を感じる



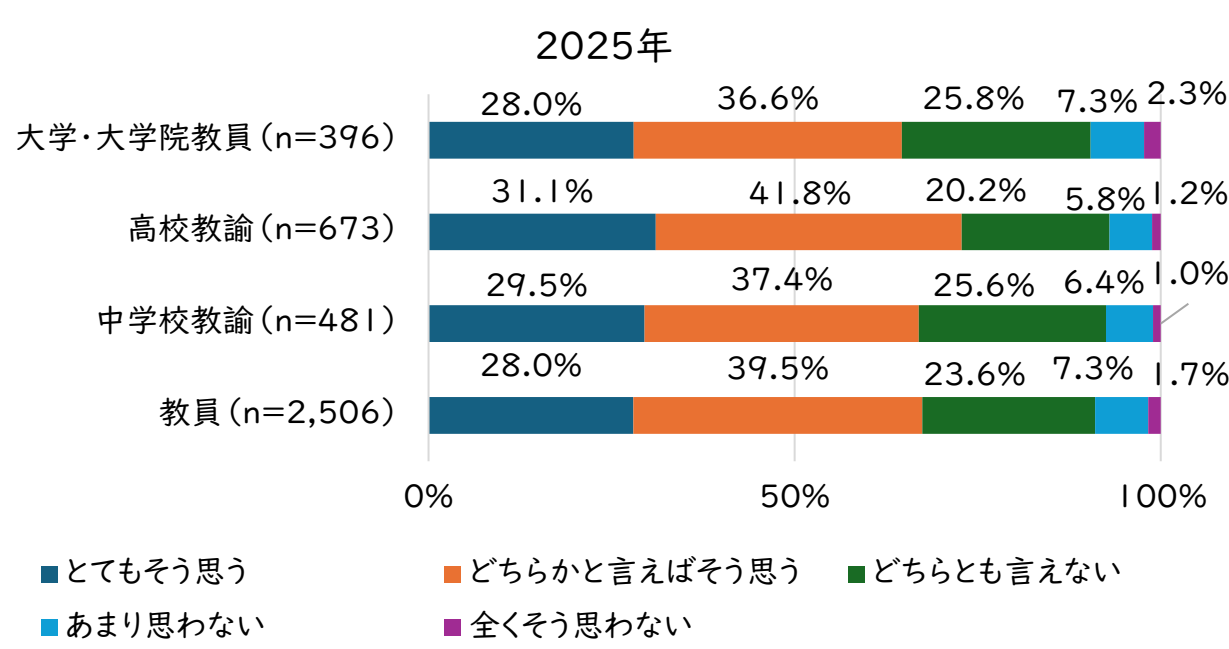
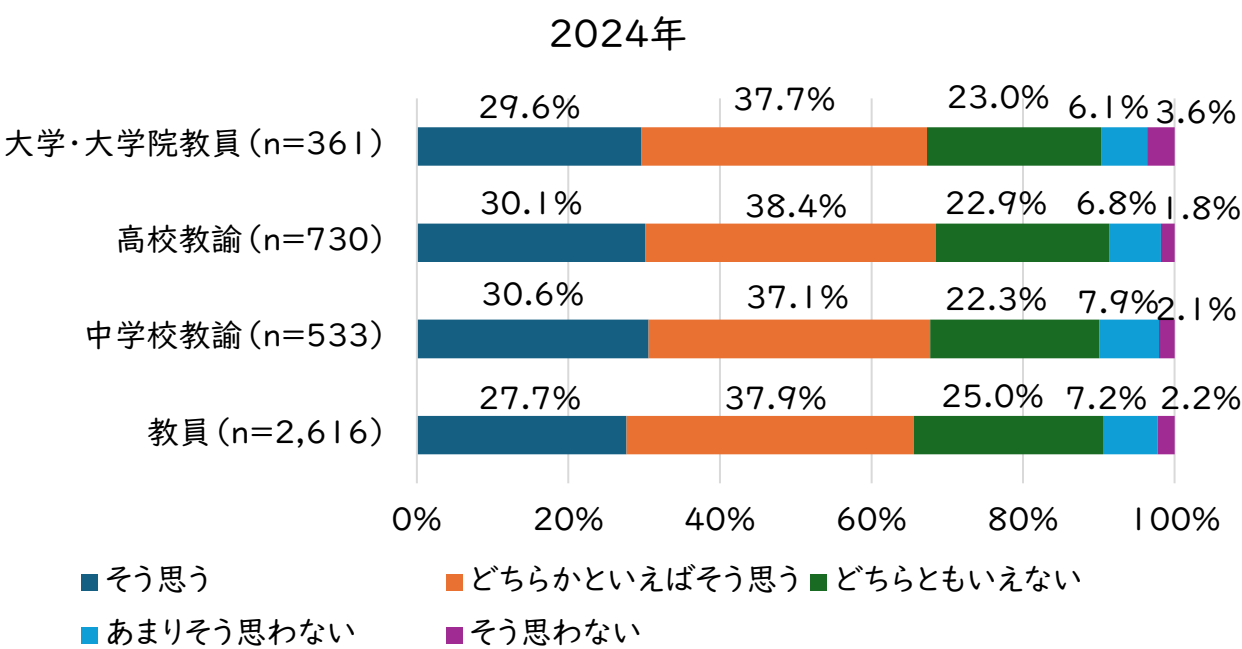
- 2025年度の調査では、AIを使って作成されたレポートなどが不正行為に当たってしまうのではないかと質問に対して「とてもそう思う」および「どちらかといえばそう思う」と回答した全学生の割合は66.4%に達しました。内訳を見ると、大学・大学院生では67.4%、高校生では66.3%が不安を感じています。「どちらとも言えない」と回答した学生は全体で20.5%でした。
- 2024年度の調査では、同様の不安を感じると回答した全学生の割合は64.2%であり、大学・大学院生は66.4%、高校生は63.1%といずれも高い割合を示していました。この結果から、当時すでに学生が不正行為に対して高い不安感を持っていることが指摘されていました。
- 生成AIで作成された課題・レポートが不正行為に当たるかという学生の不安感は、2024年から2025年にかけて全体でやや増加しました。特に高校生で顕著な上昇が見られます。中立層は安定しており、AI利用の拡大に伴い、学生が学術的な不正行為へのリスク意識をより強く持つようになった傾向が伺えます。

AIを使って作成されたレポートや文書が、不正行為に当たってしまいそうで不安だ



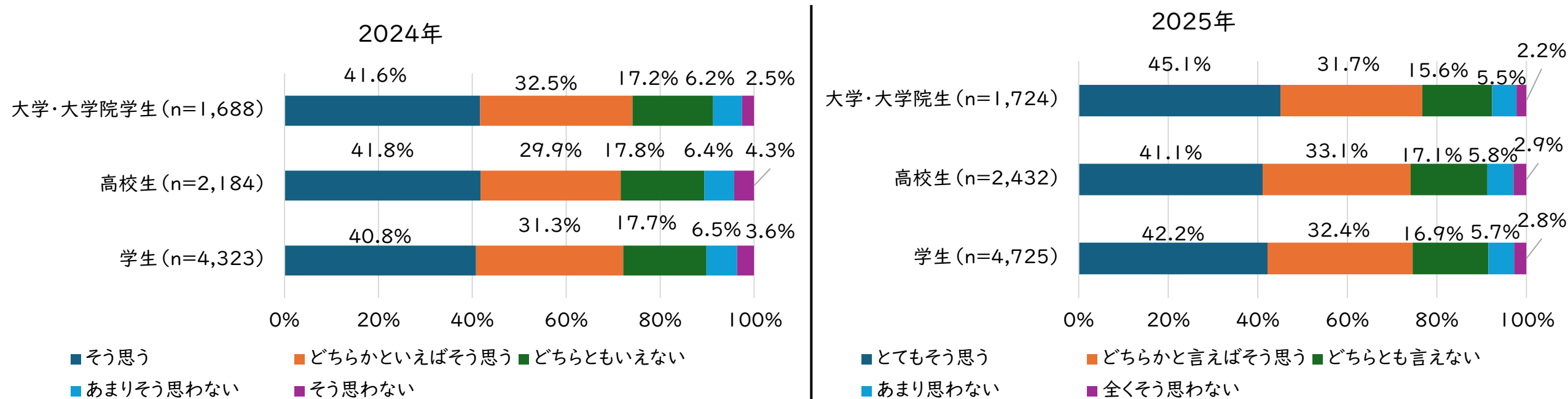
- 2025年度の調査では、AIを使って作成されたレポートや文書が、不正行為に当たってしまいそうで不安かという質問に対して「とてもそう思う」および「どちらかといえばそう思う」と回答した教員全体の割合は67.5%でした。学校種別に見ると、大学・大学院教員が64.6%、高校教諭が72.9%と最も高く、中学校教諭が66.9%となっています。
- 2024年度の調査では、同様の不安を感じると回答した教員全体の割合は65.6%であり、大学・大学院教員は67.3%、高校教諭は68.5%、中学校教諭は67.7%でした。いずれも6割を超える高い割合で不安が示されています。
- この結果を比較すると、2024年度から2025年度にかけて教員全体の不安割合はやや増加していることがわかります。特に高校教諭では不安感がさらに強まり、7割を超える結果となりました。一方で、大学・大学院教員と中学校教諭はわずかに減少しており、校種間で不安感の差が広がりつつある傾向が見られます。こうした動向から、生成AIによる課題・レポート利用に関する不正行為のリスク認識は依然として高く、教員の立場や教育段階によって温度差が生じていることがうかがえます。

AIを使って作成されたレポートや文書が、不正行為に当たってしまいそうで不安だ



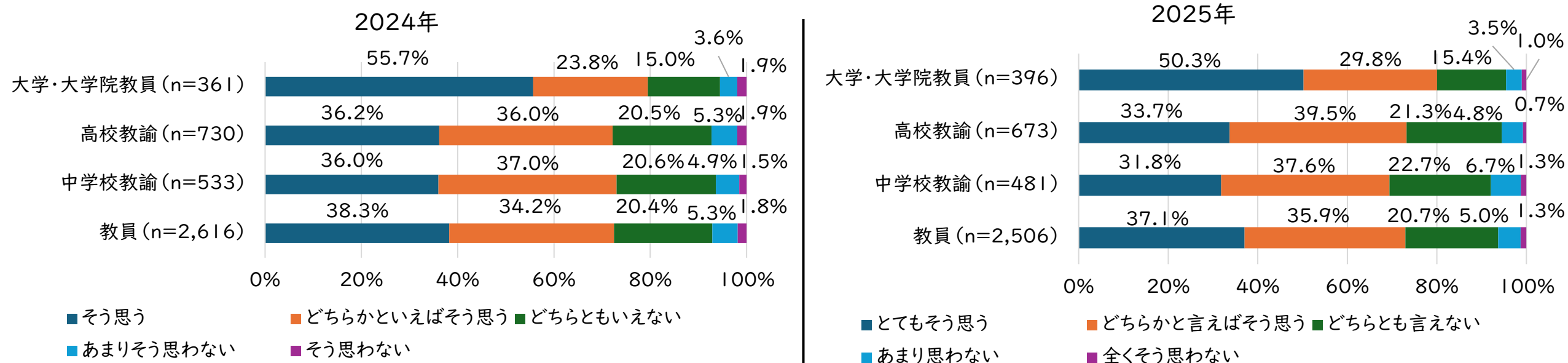
- 2025年度の調査では、生成AIの出力結果が正しいかどうかの確認が必要かという質問に対して「とてもそう思う」および「どちらかと言えばそう思う」と回答した全学生の割合は74.6%に達しました。特に大学・大学院生では76.8%、高校生でも74.2%と非常に高い割合を占めています。「あまり思わない」および「全くそう思わない」と回答した学生の割合は、全学生でわずか8.5%と極めて低い水準になりました。
- 2024年度の調査では、同様に確認の必要性を感じるという回答した全学生の割合は72.1%でした。大学・大学院生は74.1%、高校生は71.7%と、この時点でもすでに高い意識が見られていました。
- 2025年、学生の生成AI出力確認意識は全般的に強化されています。確認不要と考える層が減少し、AI結果を鵜呑みにせず批判的に評価する意識が浸透してきていることが伺えます。

生成AIから出力された結果は、正しいか否かの確認をしなければならないと思う



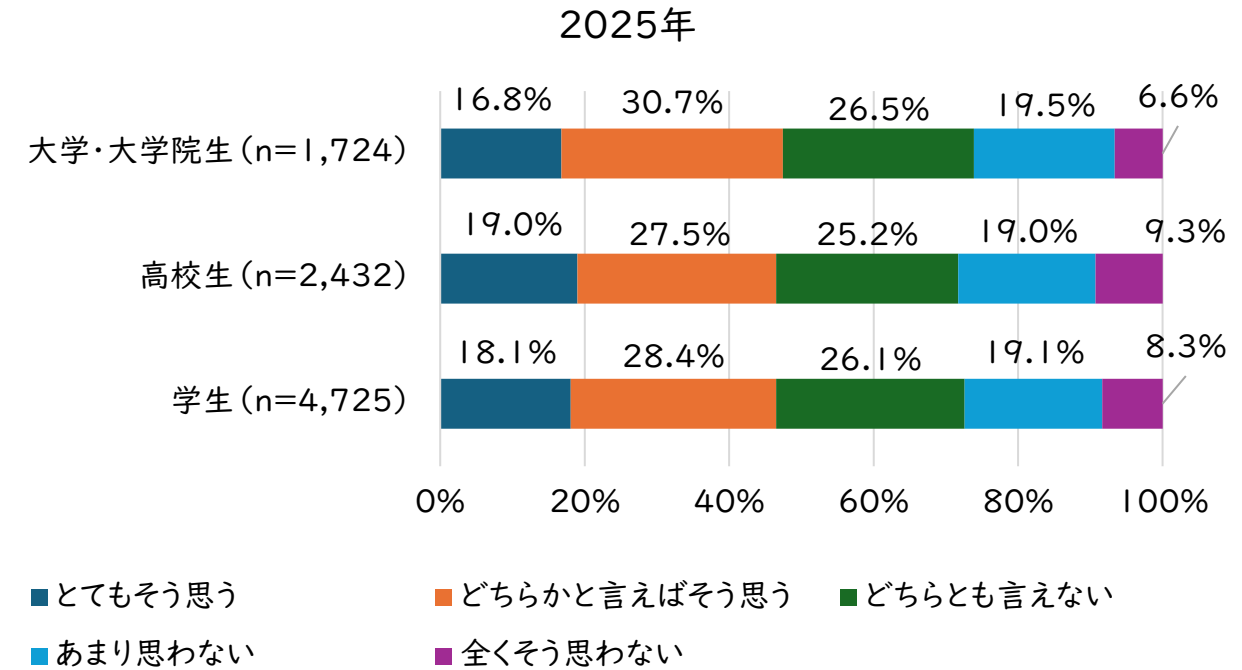
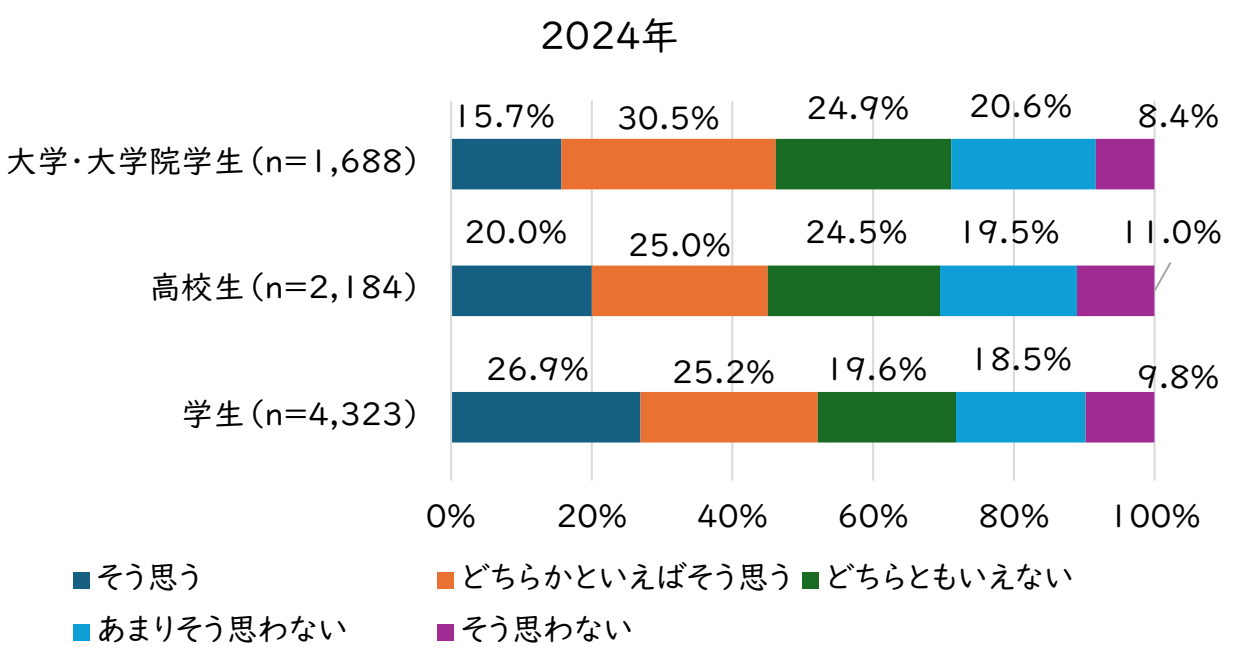
- 「生成AIから出力された結果は、正しいか否かの確認をしなければならないと思う」という設問に対し、2025年度の調査では、「とてもそう思う」および「どちらかと言えばそう思う」と回答した教員全体の割合は73.0%でした。
- 大学・大学院教員では80.1%、高校教諭では73.2%、中学校教諭では69.4%が確認の必要性を感じています。特に「そう思わない」「あまりそう思わない」といった確認の必要性を感じない層は極めて低い割合にとどまりました。
- 2024年度の調査では、同様に確認の必要性を感じると回答した教員全体の割合は72.5%でした。大学・大学院教員は79.5%、高校教諭は72.2%、中学校教諭は73.0%と、この時点ですでに高い意識が示されており、特に大学・大学院教員においてその傾向が顕著でした。
- 生成AIの出力確認に対する教員の意識は、2024年から2025年にかけて全体でわずかに増加しました（72.5%から73.0%へ）。そして、大学・大学院教員ではさらに確認意識がわずかに高まっています（79.5%から80.1%へ）。全体的に、AI出力の不確かさへの認識は強く、鵜呑みにせず検証する姿勢が教員間で引き続き見られます。

生成AIから出力された結果は、正しいか否かの確認をしなければならないと思う



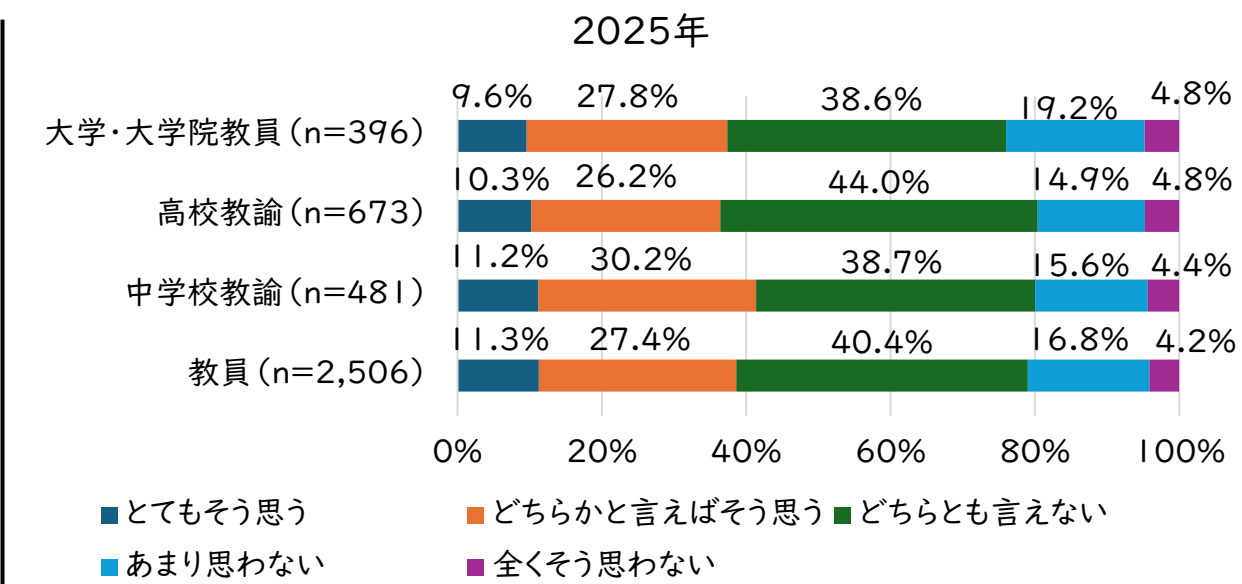
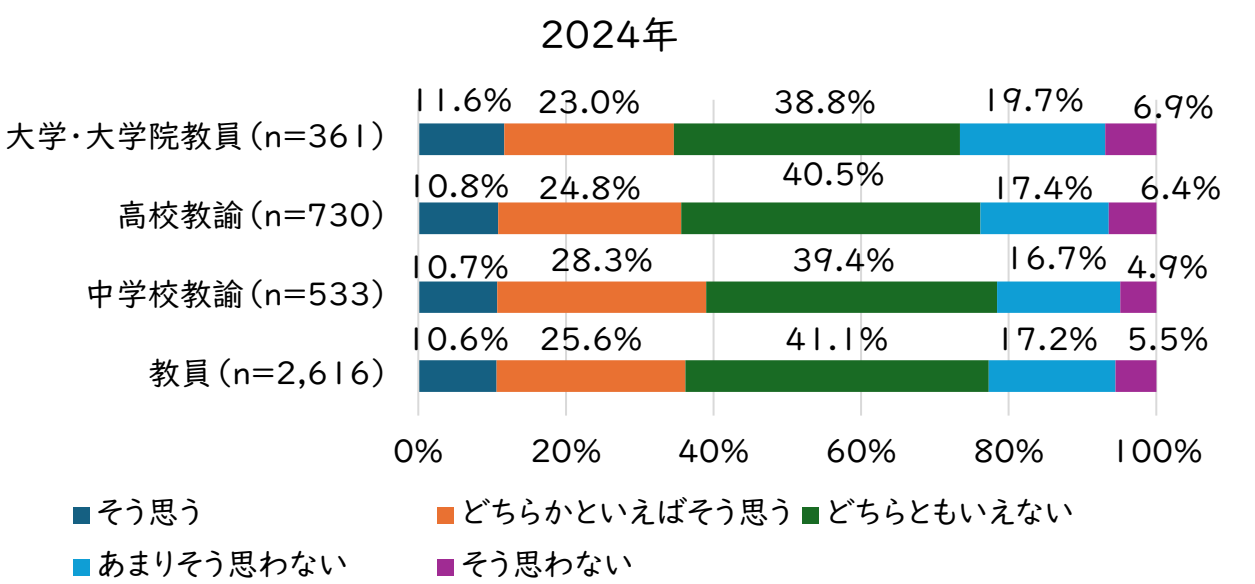
- 2025年度の調査では、入力データ利用に対して不安かという質問に対して「とてもそう思う」および「どちらかといえばそう思う」と回答した全学生の割合は46.5%でした。大学・大学院生では47.5%、高校生では46.5%が不安を感じています。
- 2024年度の調査では、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」と回答した全学生の割合は52.1%でした。大学・大学院生は46.2%、高校生は45.0%で、当時すでにその割合は5割を切っていました。この時点では、学生が入力データの製品改良への利用リスクをあまり強く感じていない可能性が指摘されていました。
- 学生の生成AI入力データ利用への不安感は、2024年から2025年にかけて全体で減少しました。特に「どちらともいえない」中立層が大幅に増加しています。これは、データ利用に対する学生の意識が単純な不安だけでなく、メリットとリスクを比較検討する、より多角的な視点へと変化していることを示唆しています。

自分が入力した内容がAIの出力精度を上げるために使われているかと思うと不安だ



- 2025年度の調査では、自分が生成AIに入力した内容が製品改良のために解析に使われることに対して不安を感じる（「とても思う」および「どちらかといえば思う」の合計）と回答した教員全体の割合は38.7%でした。学校種別に見ると、大学・大学院教員は37.4%、高校教諭は36.5%、中学校教諭は41.4%が不安を感じていると回答しています。
- 2024年度の調査では、教員全体で入力データ利用への不安を感じる割合は36.2%であり、大学・大学院教員は34.6%、高校教諭は35.6%、中学校教諭は39.0%と、いずれも4割を切る低い水準でした。この結果から、教員は入力データが製品改良に使われることへのリスクをあまり感じていないと解釈されています。
- 2025年、教員の生成AI入力データ利用への不安感は2024年より約2.5ポイント増加し、38.7%となりました。中立層がわずかに減少したことで、教員がデータ利用の問題をより明確に認識し、不安を感じる割合が増加したことが伺えます。AI利用に伴うデータプライバシーへの意識向上が示唆されます。

自分が入力した内容がAIの出力精度を上げるために使われているかと思うと不安だ



教員の生成AIによる 教育上の課題

教員の勤務する学校・大学で生じている生成AIに関する問題 47

- ・2024年の調査では、大学・大学院教員が最も多く回答した問題は「生成AIの使用が疑われる不正な提出レポート」で44.3%でした。しかし、2025年調査ではこの項目は29.3%にまで減少しました。これは、不正行為を疑う以前に、より根本的な問題、すなわち教員自身の生成AIに対する知識不足が顕在化したためだと考えられます。
- ・実際、2025年の調査では「生成AIに対する教員の知識不足」が、大学・大学院教員（21.0%）、高校教諭（19.8%）、中学校教諭（17.7%）において他の項目と比べて高い割合でした。
- ・「生成AIのどのような使用が、不正行為となるかの判断」について、大学・大学院教員が17.2%と高い割合を占めており、不正行為の判断基準に関する課題が依然として残っていることが示されました。
- ・これらの結果から、教員の認識は「不正行為の判断」といった個別具体的な問題から、「教員の知識不足」という根本的な問題へとシフトしていると言えるでしょう。教育現場で生成AIを適切に活用するためには、教員への知識提供と研修が喫緊の課題であることが示唆されます。

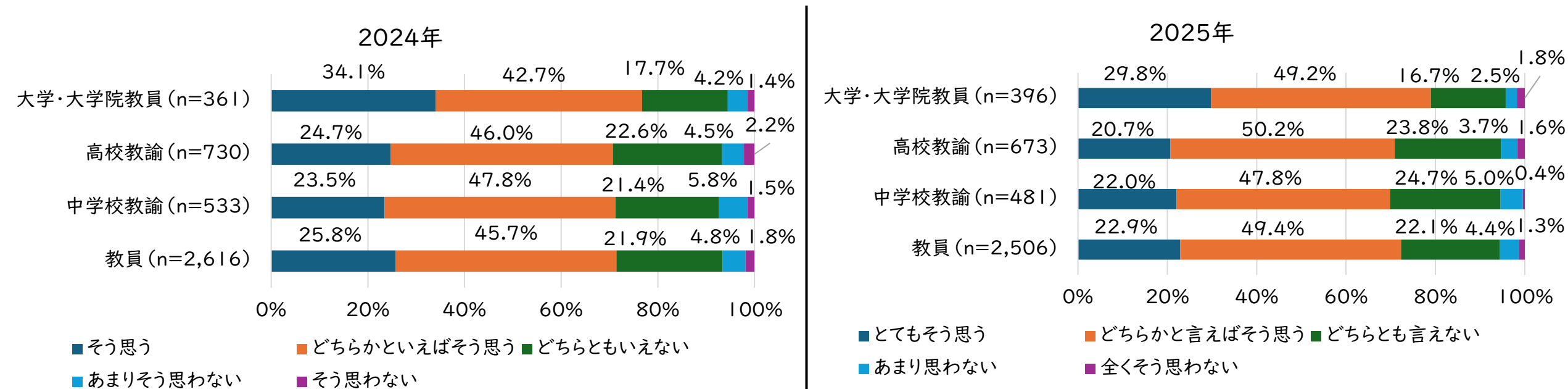
あなたの勤務する教育現場において、生成AIに関連してどのような問題が生じていますか？

項目	教員		中学校教諭		高校教諭		大学・大学院教員	
	2024年	2025年	2024年	2025年	2024年	2025年	2024年	2025年
生成AIの使用が疑われる不正な提出レポート	26.3%	43.9%	22.3%	44.9%	27.5%	44.0%	44.3%	29.3%
生成AIに対する教員の知識不足	40.9%	18.5%	42.6%	17.7%	43.8%	19.8%	42.4%	21.0%
生成AIのどのような使用が、不正行為となるかの判断	25.3%	13.9%	22.7%	14.3%	26.7%	13.1%	36.8%	17.2%
生成AIを効果的に教育に組み込む方法	23.5%	9.7%	23.6%	8.1%	22.6%	9.5%	29.9%	11.4%
生徒・学生が生成AIを安易に使ってしまっていること	21.8%	5.4%	19.9%	7.3%	22.6%	5.2%	33.2%	6.8%
生徒・学生が生成AIに頼っていること	18.1%	3.6%	18.6%	2.5%	18.2%	2.7%	24.1%	8.1%
自校における生成AI利用ガイドラインがない	30.7%	2.3%	35.1%	1.9%	23.0%	2.8%	22.4%	2.8%
教員の生成AIに対する抵抗感	28.2%	2.8%	32.3%	1.2%	23.2%	3.0%	19.1%	3.3%
その他	6.3%	0.0%	4.7%	0.2%	0.1%	0.0%	1.9%	0.3%

教員の生成AIによる教育的課題に対する意識①

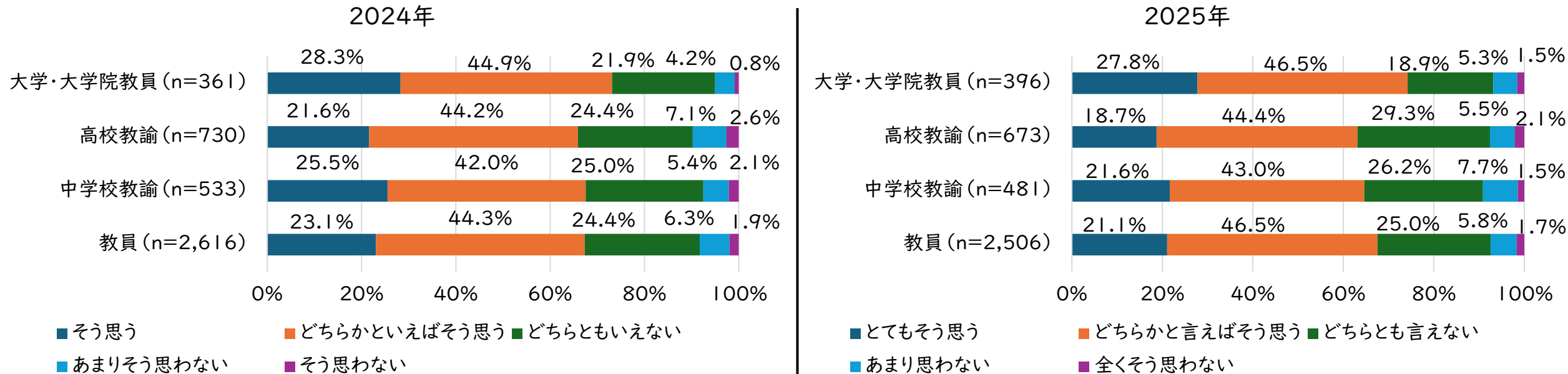
- 2025年度の調査では、生成AIが使われることで生じる教育的課題に対処しなければならないかという質問に対して「とてもそう思う」および「どちらかと言えばそう思う」と回答した教員全体の割合は72.3%でした。学校種別では、大学・大学院教員が79.0%と約8割に達し、高校教諭は70.9%、中学校教諭は69.8%がその必要性を感じています。一方、「全くそう思わない」と回答した層はごくわずかでした。
- 2024年度の調査では、生成AIによる教育的課題に対処する必要性を感じると回答した教員全体が約7割（71.5%）を占めていました。特に大学・大学院教員はその割合が76.8%と、高校・中学の教員に比べて6ポイントほど高い傾向にありました。
- 2025年、教員の生成AIによる教育的課題への対処意識は、全体で7割超と依然高い水準を維持しており、大学・大学院教員ではさらに増加し、最も強い対応必要性を感じています。また、中等教育の教員も意識が高い水準であり、生成AI普及による教育環境の変化に対し、教員が課題を認識し、対応を模索する姿勢が強く示されています。

生成AIが使われることで生ずる教育的課題に対処しなければならないと思う



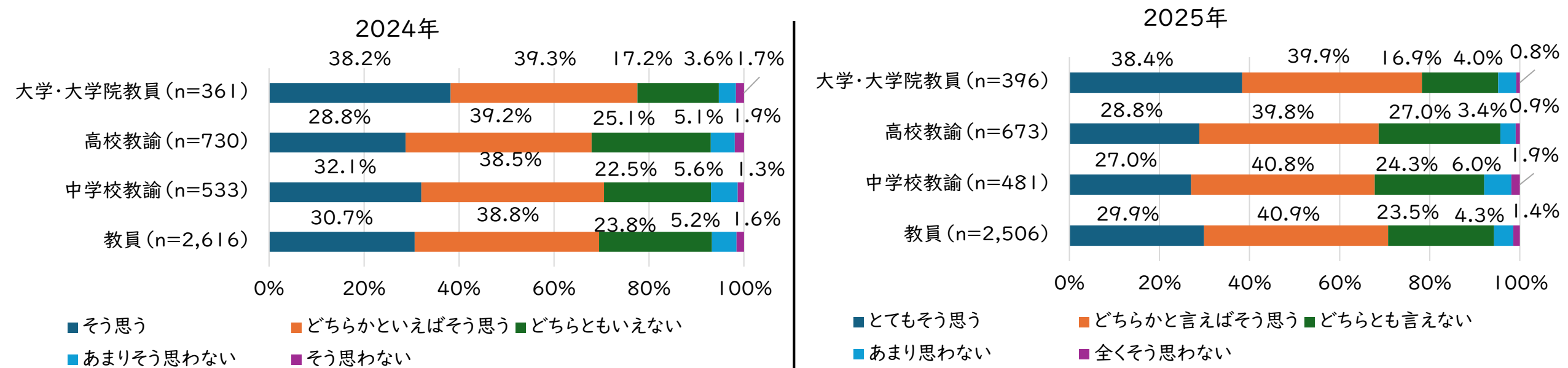
- 「生成AIを前提とした新しい教育の実践方法を検討しなければならないと思う」かを問う質問に対して、2025年度の調査では、「とてもそう思う」および「どちらかといえばそう思う」と回答した教員全体の割合は67.6%でした。学校種別で見ると、大学・大学院教員が74.3%、高校教諭が63.1%、中学校教諭が64.6%がその必要性を感じています。一方で、「あまり思わない」および「全くそう思わない」と回答した層は教員全体で7.5%であった。
- 2024年度の調査では、生成AIを前提とした新しい教育実践方法を検討する必要性を感じると回答した教員は、全体で67.4%でした。特に大学・大学院教員はその割合が73.2%と、高校・中学の教員に比べて6ポイントほど上回る傾向にありました。
- 教員の生成AIを前提とした新たな教育実践の検討意識は6割超と高い水準を維持しています。

生成AIを前提とした新しい教育の実践の方法を検討しなければならないと思う



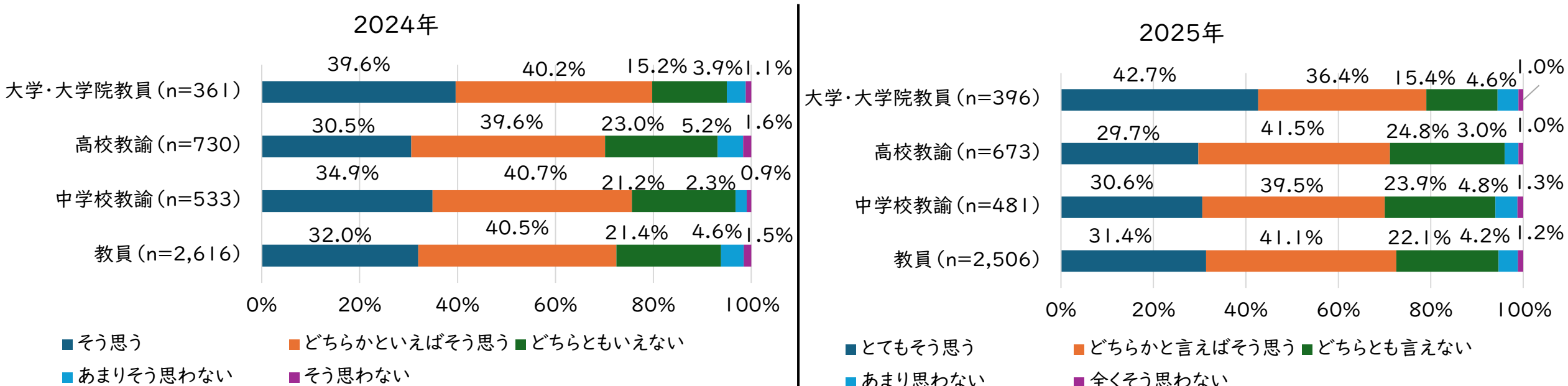
- 2025年度の調査では、自校における生成AIの利用ガイドラインの策定が必要かを問う質問に対して「とてもそう思う」および「どちらかといえばそう思う」と回答した教員全体の割合は70.8%でした。
- 学校種別で見ると、大学・大学院教員が78.3%と最も高く、高校教諭は68.6%、中学校教諭は67.8%がガイドライン策定の必要性を感じていることが分かりました。特に「あまり思わない」「全くそう思わない」といった、必要性を感じない層は非常に少ない割合に留まっています。
- 2024年度の調査では、自校における生成AI利用ガイドラインの策定が必要だと感じている教員全体の割合は69.5%でした。学校種別で見ると、大学・大学院教員は約77.5%が必要性を感じており、高校教諭よりも9.5ポイントほど高い傾向が示されていました。教員は学生の生成AI利用を踏まえ、その対処方針としてガイドライン策定の必要性を感じていると解釈されていました。
- 2025年、教員の生成AI利用ガイドライン策定の必要性への意識は、2024年より全的として微増しました。特に大学・大学院教員は高い水準を保っています。生成AIの普及に伴い、教員がより一層、利用ルール整備の喫緊性を認識していることがうかがい知れます。

自校において生成AIの利用ガイドラインを策定することが必要だと思う



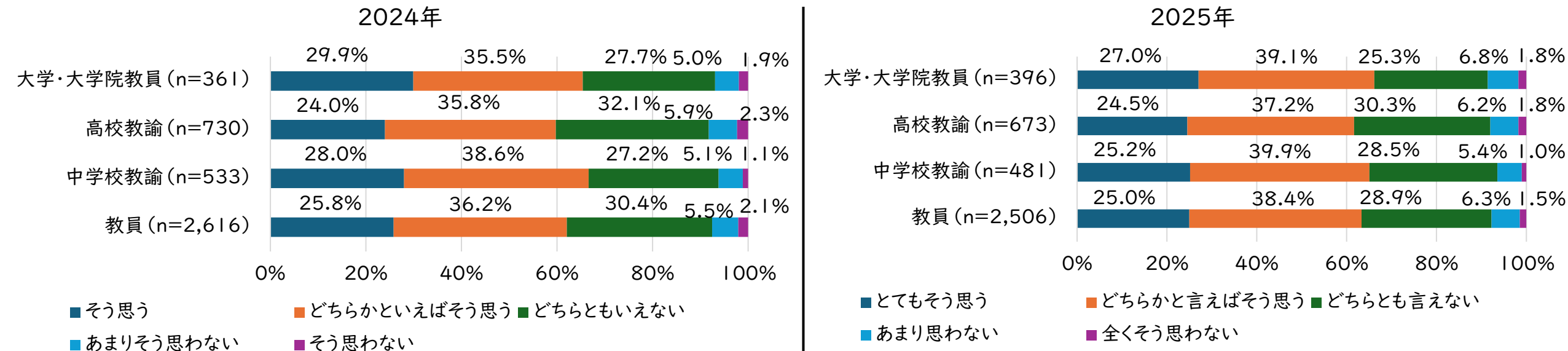
- 「生成AIを使った不正行為をさせないようにするための取り組みが必要だと思う」という質問について2025年度の調査では、「とてもそう思う」および「どちらかといえばそう思う」と回答した教員全体の割合は72.5%でした。
- 学校種別に見ると、大学・大学院教員が79.1%、高校教諭が71.2%、中学校教諭が70.1%がその必要性を感じています。「あまり思わない」「全くそう思わない」と回答した層は教員全体で5.4%と少ない状況で、不正防止の取り組みへの高い意識が継続していることが示されました。
- 2024年度の調査では、生成AIを使った不正行為防止への取り組みが必要だと感じている教員は72.5%を占めていました。特に大学・大学院教員と中学校教諭においてその傾向が顕著であり、それぞれ約8割の教員が必要だと考えていると報告されていました。
- 特に大学・大学院教員の8割近くが教員が不正行為防止への取り組みが必要と考えており、AI普及に伴う不正リスクへの対策を一層強く認識し、取り組もうとする姿勢が伺えます。

生成AIを使った不正行為をさせないようにするための取り組みが必要だと思う



- 「レポートでなく筆記試験にするなど、生成AIを利用できない状況での評価が重要だと思う」という質問について、2025年度の調査では、「とてもそう思う」および「どちらかといえばそう思う」と回答した教員全体の割合は63.4%でした。
- 学校種別に見ると、大学・大学院教員が66.1%、高校教諭が61.7%、中学校教諭が65.1%がその重要性を感じています。一方、「あまり思わない」および「全くそう思わない」といった、重要性を感じない層は全体で7.8%に留まっています。
- 2024年度の調査では、生成AIを利用できない状況での評価方法の重要性を感じている教員は、全体で62.0%でした。特に中学校教諭が約66.6%と最も高く、次いで大学・大学院教員も同様の傾向を示していました。高校教諭においては、「どちらともいえない」と回答する割合が32.1%と他のグループよりやや高い傾向が見られました。
- これらのことから、2025年においても教員の「生成AIを利用できない状況での評価」の重要性意識の変化は依然として高い傾向にあると言えます。

レポートではなく筆記試験にするなど、生成AIを利用できない状況での評価が重要だと思う

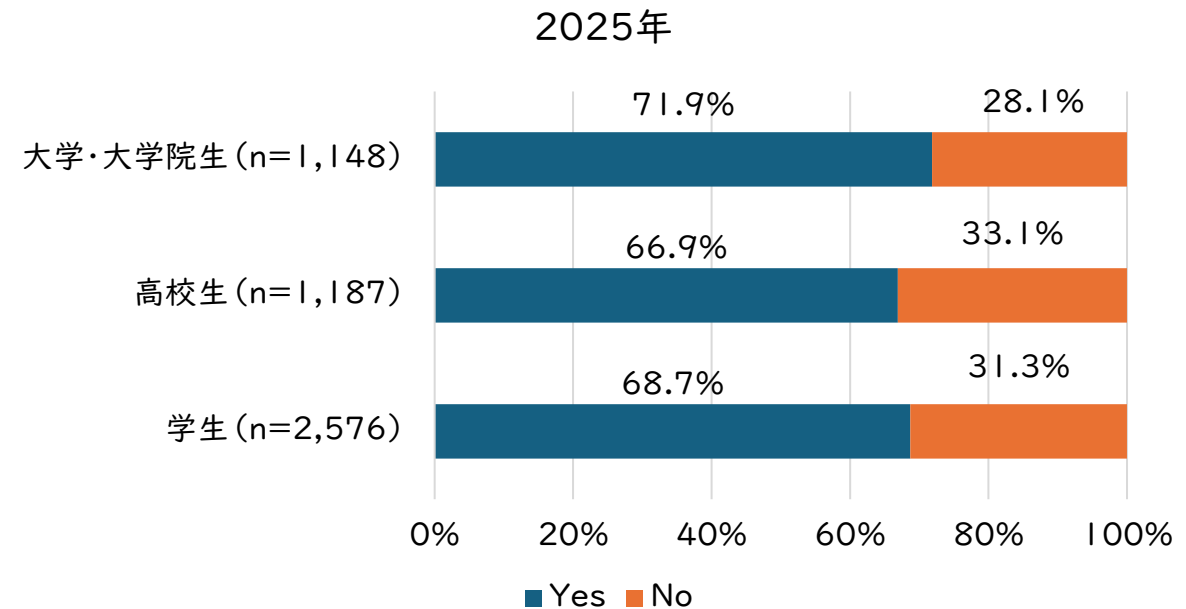
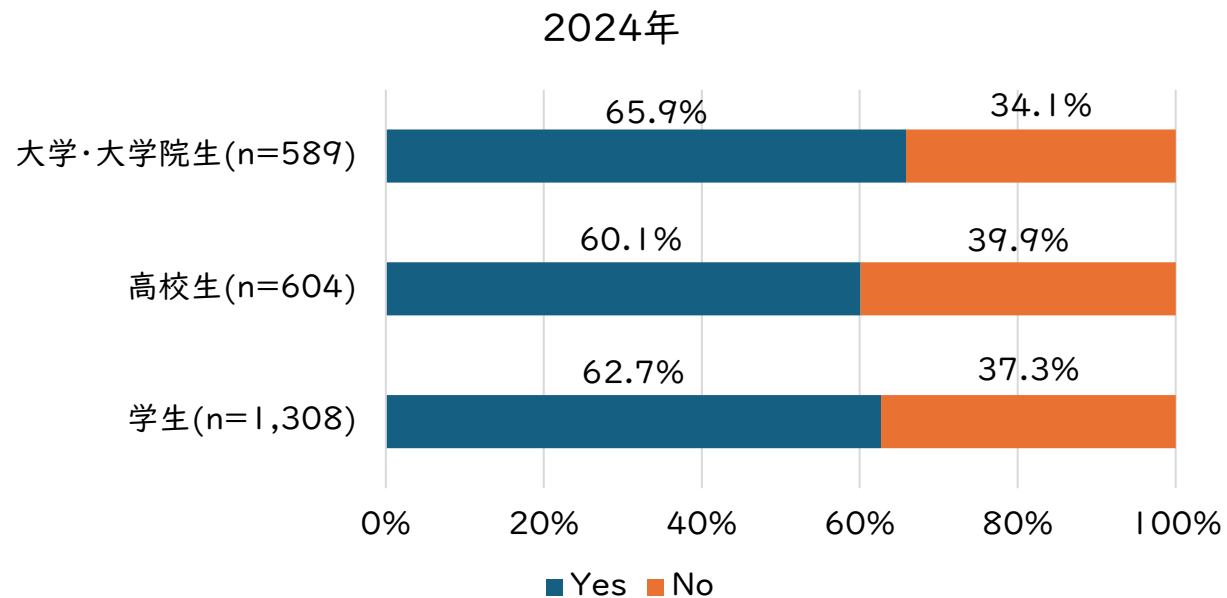


学生の生成AIを利用した 学習上の問題行動と課題

学生の生成AIを利用した課題作成

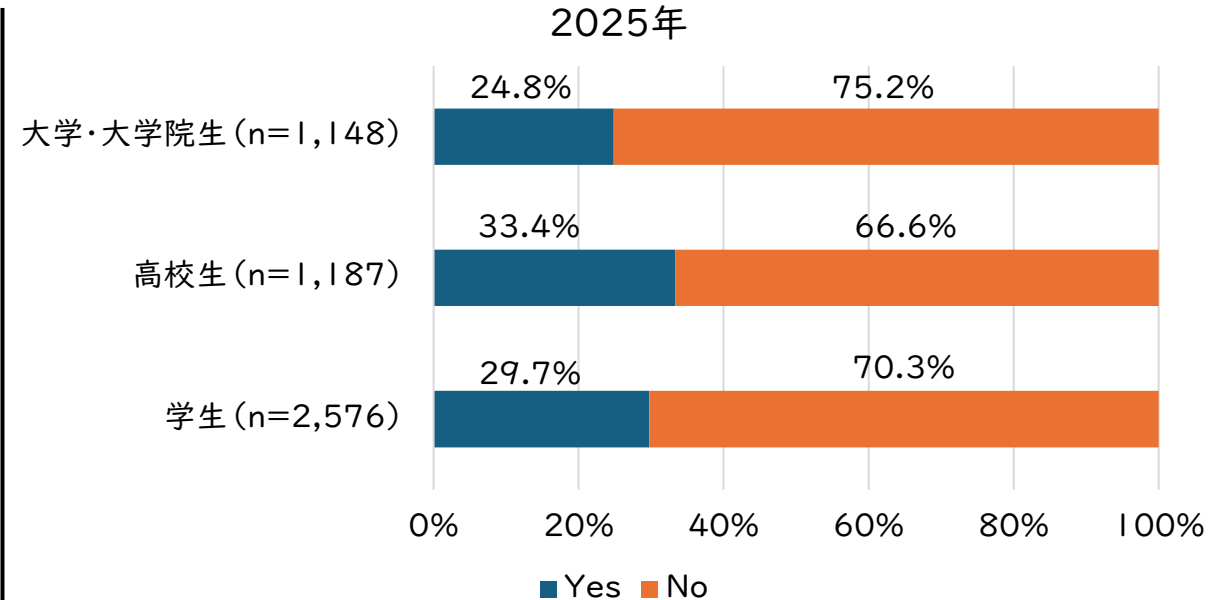
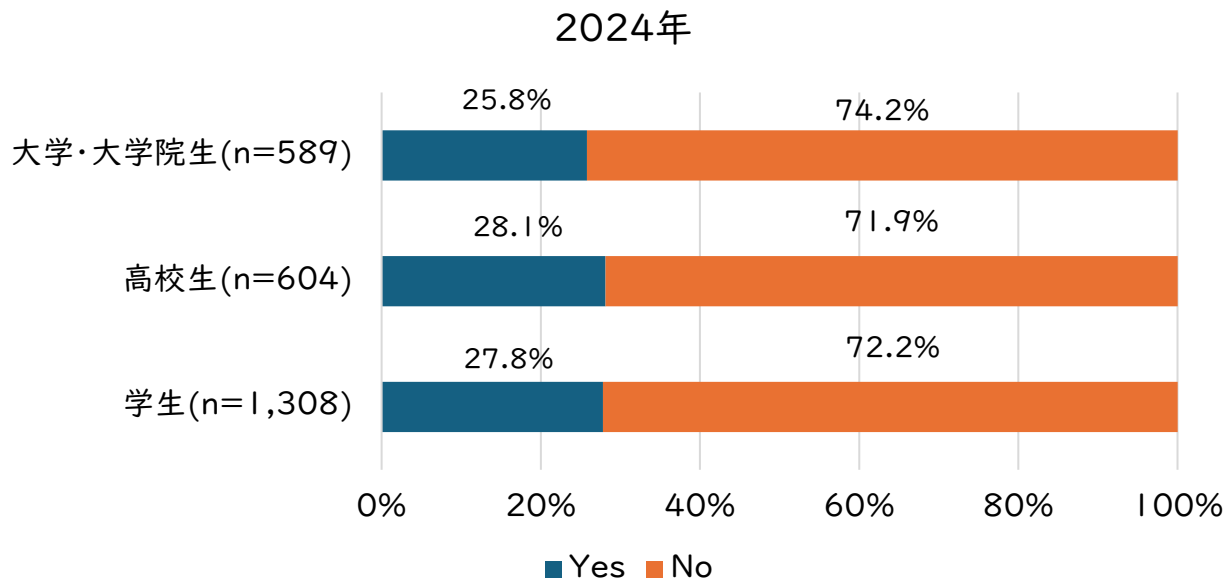
- 2024年の調査と2025年の調査を比較した結果、生成AIを利用して課題やレポートを作成する学生の割合が増加していることが明らかになりました。
- 2024年の調査では、生成AIを利用して課題やレポートを作成したことがあると回答した学生全体が62.7%でしたが、2025年の調査では68.7%に増加し、6ポイントの上昇が見られました。
- 利用経験を詳細に見ると、高校生は2024年の60.1%から2025年には66.9%に増加し、大学・大学院生は2024年の65.9%から2025年には71.9%に増加しました。いずれの層でも利用経験者が増加しており、特に大学・大学院生は7割を超え、高い利用率を維持しています。
- これらの結果から、学生のあいだで生成AIを利用して課題やレポートを作成することが、より一般的になっていると言えるでしょう。

課題やレポートを作成する際に、生成AIを使用したことがある



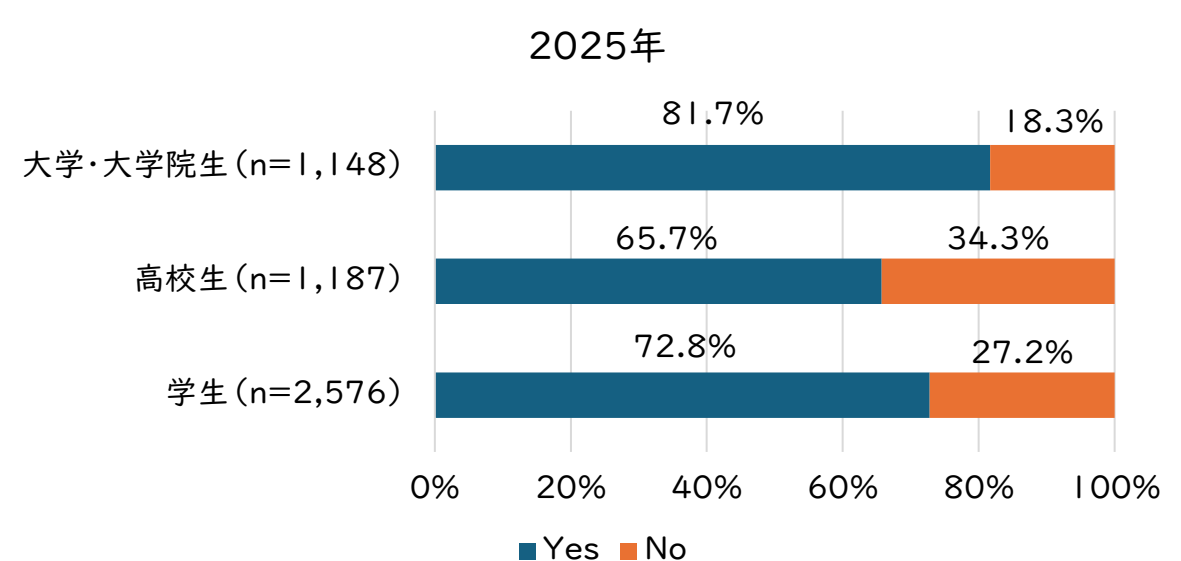
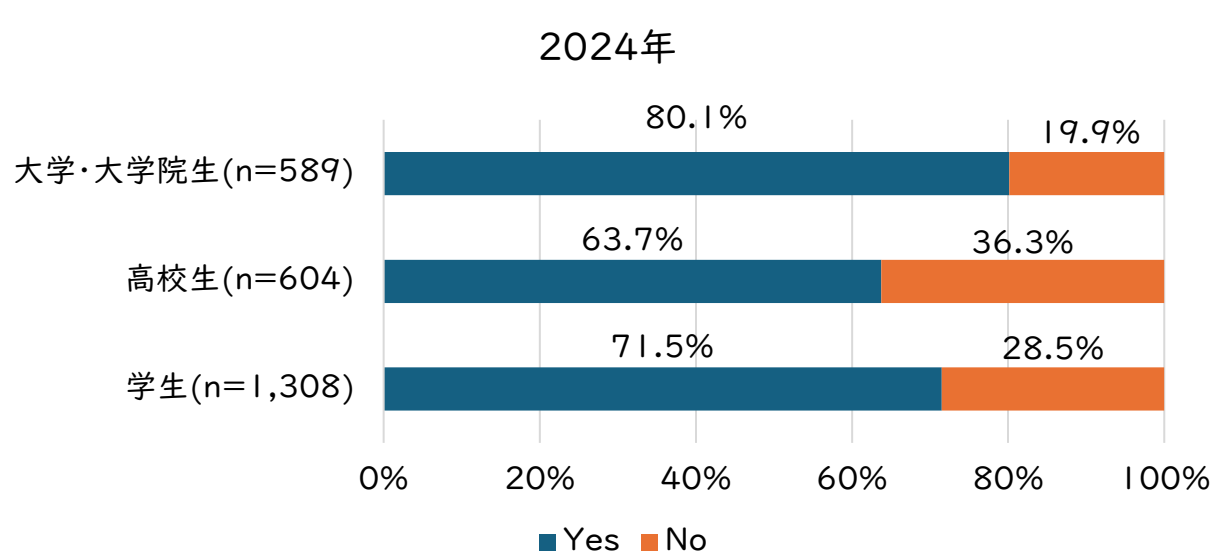
- 2024年の調査と2025年の調査を比較した結果、生成AIの出力結果をコピー&ペーストして提出した経験がある学生の割合は、全体ではわずかに増加したものの、高校生と大学・大学院生の間で異なる傾向が見られました。
- 2024年調査では、生成AIの出力結果をコピー&ペーストして提出したことがあると回答した学生全体が27.8%でしたが、2025年の調査では29.7%と、わずかに増加しました。
- しかし、学生の層別に見ると、大学・大学院生は2024年の25.8%から2025年には24.8%とわずかに減少したのに対し、高校生は28.1%から33.4%へと増加しました。
- これらの結果から、生成AIの出力結果をそのまま提出する経験は、高校生の中で増加傾向にあると言えるでしょう。

生成AIが出力した結果をコピー&ペーストして提出したことがある



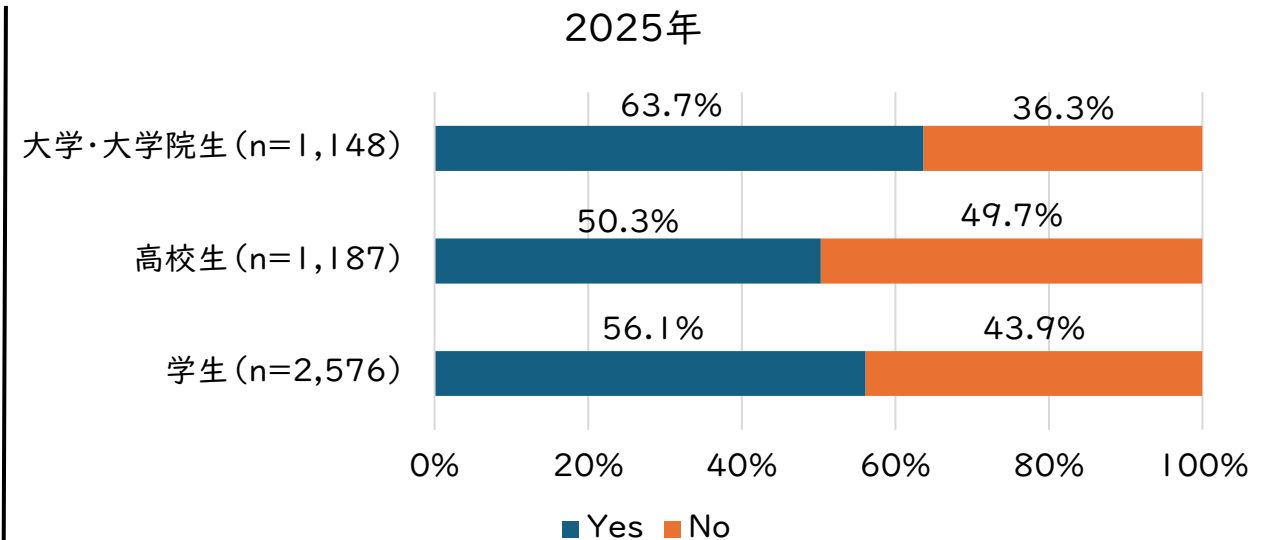
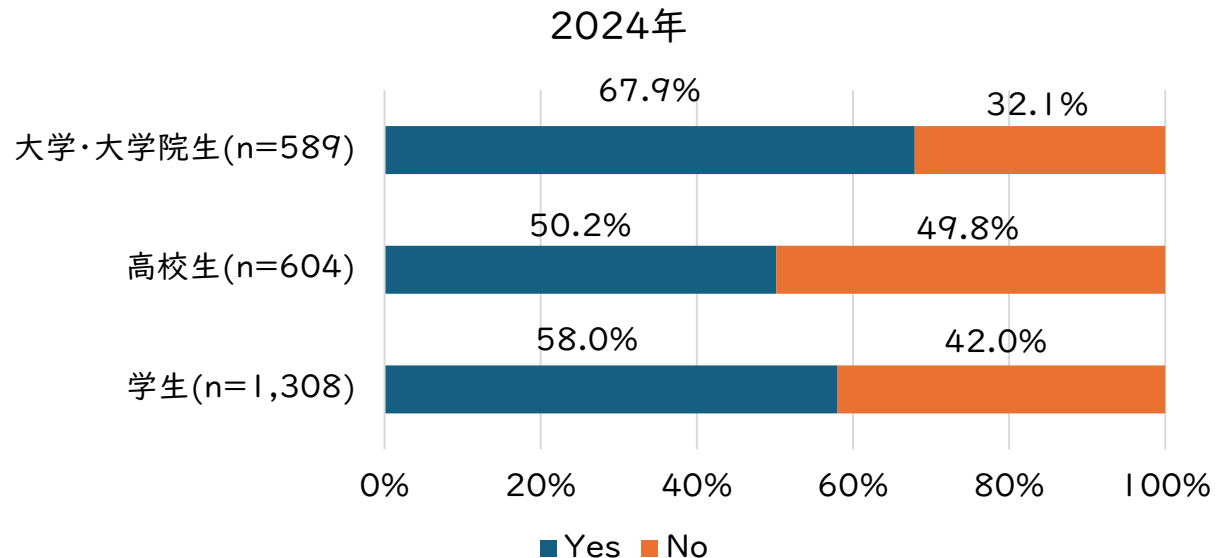
- 2024年の調査と2025年の調査を比較した結果、生成AIが出力した結果をそのままコピー&ペーストして提出することが不正行為にあると認識している学生の割合は、わずかに増加していることがわかりました。
- 2024年の調査では、学生全体で71.5%が不正行為であると「知っている」と回答しましたが、2025年の調査では72.8%とわずかに増加しました。
- しかし、学生の層別に見ると、大学・大学院生は2024年の80.1%から2025年には81.7%へと高い割合を維持しているのに対し、高校生は2024年の63.7%から2025年には65.7%に留まっており、大学・大学院生と高校生の間には、不正行為に対する認識の点で大きな差があることが引き続き示されました。
- これらのことから、生成AIを利用して生じてしまうかもしれない不正行為の諸形態について、どのような行為が不正行為に当たるのか、引き続き学ぶ機会を提供する必要があると言えるでしょう。

生成AIが出力した結果をコピー&ペーストして提出することは不正行為であることを知っている



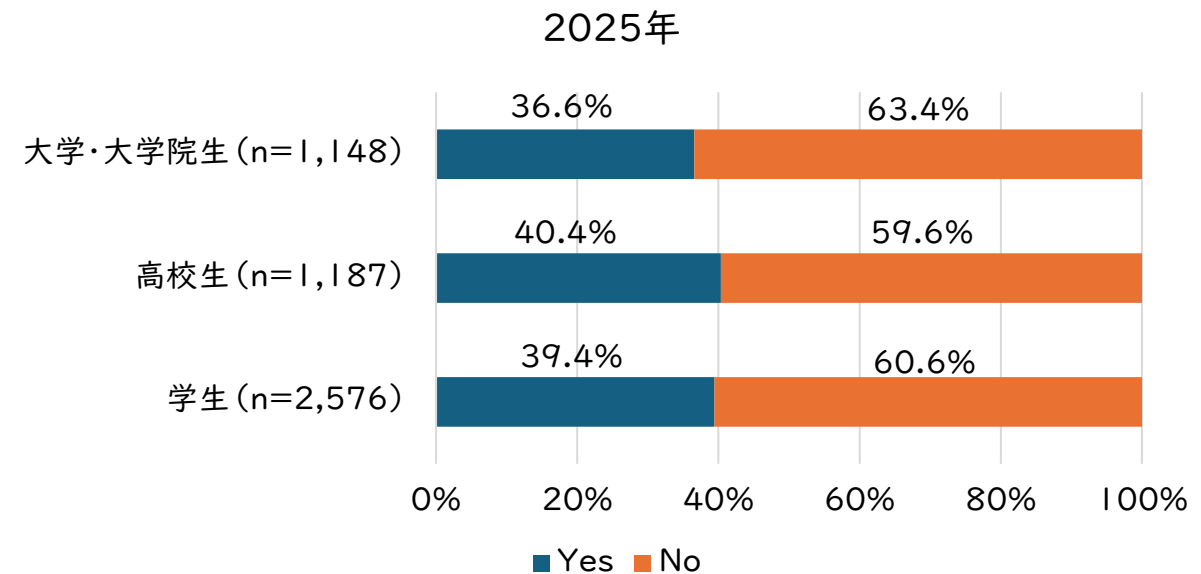
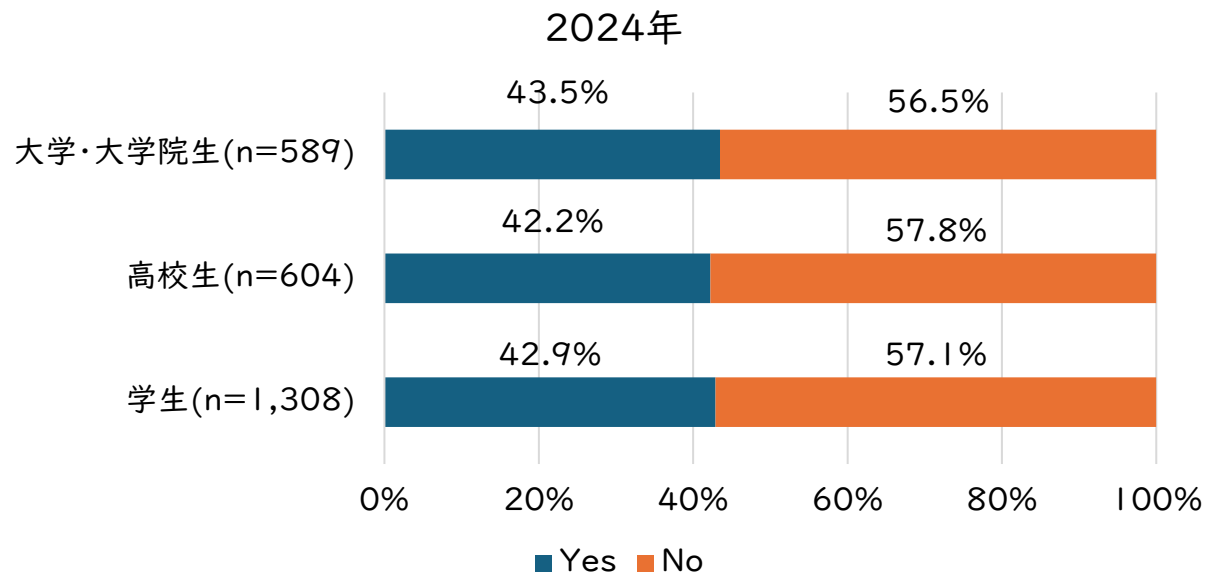
- 2024年の調査と2025年の調査を比較した結果、生成AIを利用した場合にどのような行為が不正行為に当たるか判断できると回答した学生の割合は、全体としてわずかに減少していることがわかりました。
- 2024年の調査では、学生全体で58.0%が不正行為であるか判断できると回答しましたが、2025年の調査では56.1%に減少しました。
- しかし、学校種別に見ると、大学・大学院生は2024年の67.9%から2025年には63.7%へと割合が減少したのに対し、高校生は2024年の50.2%から2025年では50.3%と横ばいでした。この結果、不正行為を判断できると回答した割合は、依然として大学・大学院生の方が高校生を大きく上回っており、両者の間に大きな差があることが引き続き示されました。
- これらのことから、学生に対して、特に高校生に対して、生成AIを利用することで生じてしまうかもしれない不正行為の諸形態、どのような行為が不正行為に当たってしまうのかについて学ぶ機会を提供する必要があると言えるでしょう。

生成AIを使用した場合、どの様な行為が不正行為に当たるか判断できる



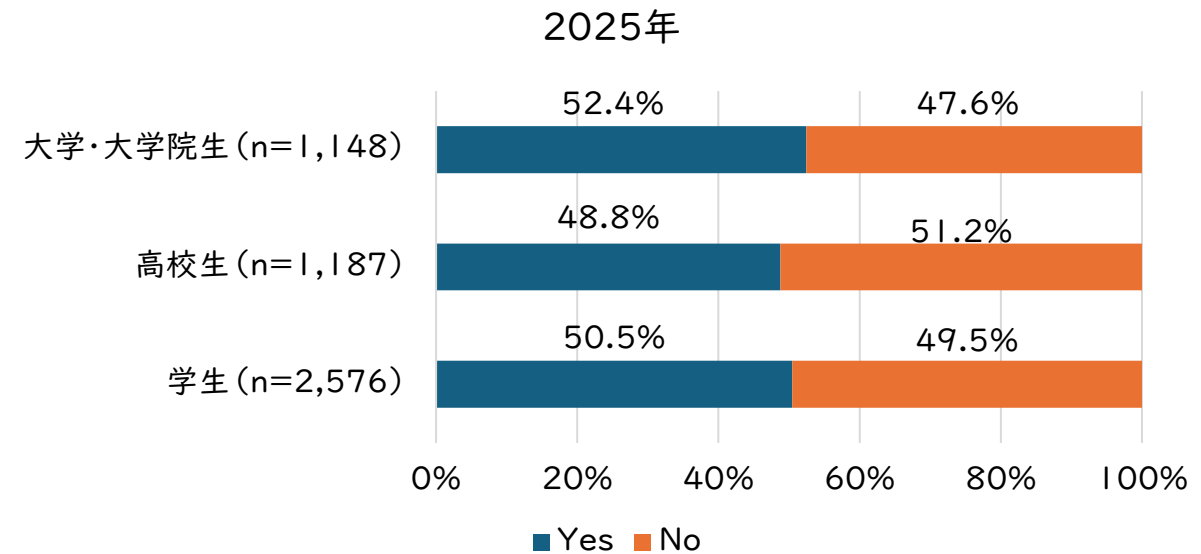
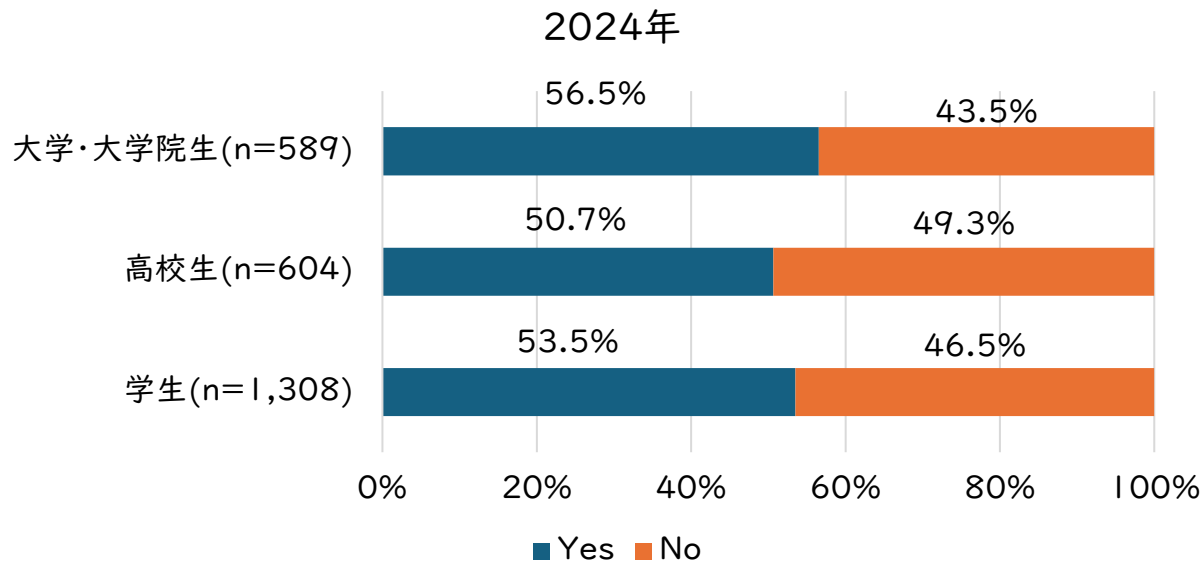
- 2024年の調査と2025年の調査を比較した結果、生成AIが書いた文章の引用の仕方を「知らない」と回答した学生の割合が増加し、依然として6割以上を占めていることがわかりました。
- 2024年の調査では、学生全体で57.1%が引用の仕方を知らないと回答していましたが、2025年の調査では60.6%に増加しました。
- 学校種別に見ると、大学・大学院生は2024年の56.5%から2025年には63.4%へと増加しました。高校生も2024年の57.8%から59.6%へと微増しています。
- これらの結果を踏まえて、生成AIを使用した場合の適切な引用の仕方に関する学習の機会を設けることが重要であると言えるでしょう。

生成AIが書いた文章の引用の仕方を知っている



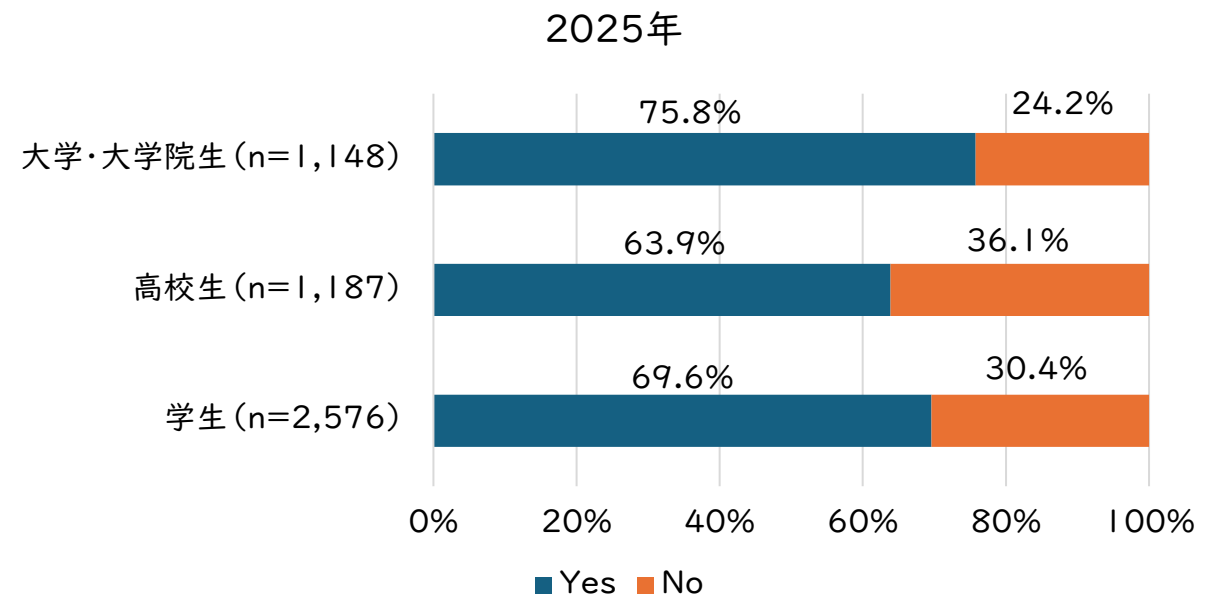
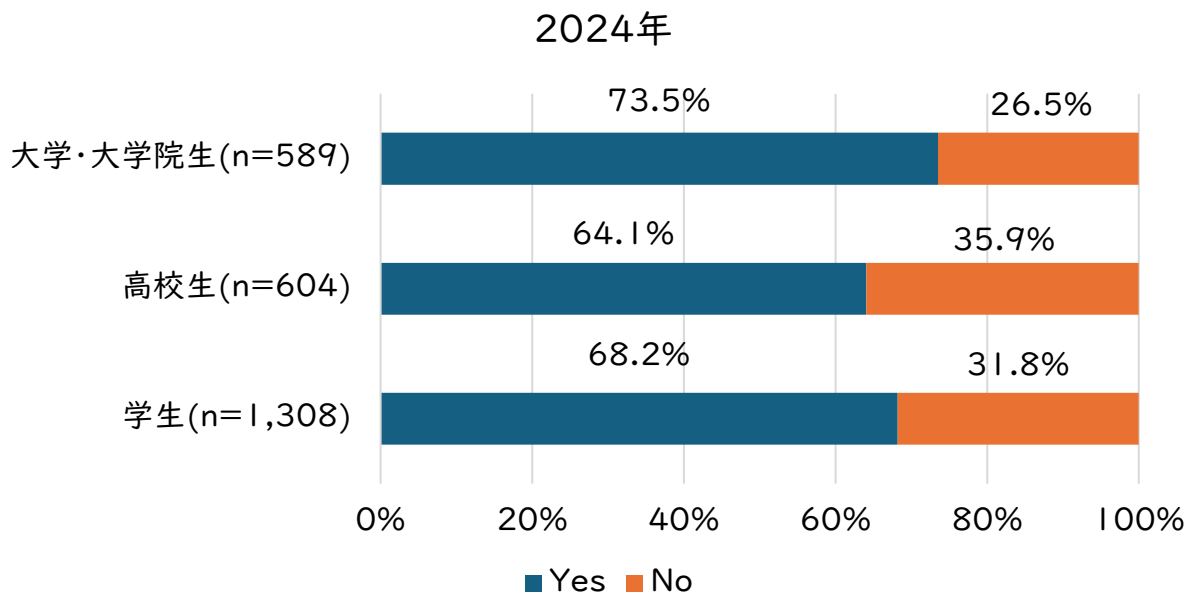
- 2024年の調査と2025年の調査を比較した結果、生成AIを利用して不正行為に当たらないよう適切に使える自信がある学生の割合は、全体として減少傾向にあることがわかりました。
- 2024年の調査では、学生全体で53.5%が「自信がある」と回答していましたが、2025年の調査では50.5%に減少しました。この割合は依然として半数程度に留まっています。
- 学校種別に見ると、大学・大学院生は2024年の56.5%から2025年には52.4%へと減少したのに対し、高校生は2024年の50.7%から2025年には48.8%と、わずかに減少しました。自信があると回答した割合は、引き続き大学・大学院生が高校生を上回っていますが、両者の差はわずかに縮小しました。
- これらの結果から、学生は生成AIを適切に使うことへの自信が依然低い状態にあると言えるでしょう。生成AIの適切な利用に向けた教育の必要性が改めて示されています。

自分は生成AIを使った場合、不正行為に当たらないように適切に使える自信がある



- 2024年の調査と2025年の調査を比較した結果、生成AIの出力結果に偏り（バイアス）が生じることを知っている学生の割合は、全体として増加傾向にあることがわかりました。
- 2024年の調査では、学生全体で68.2%が「知っている」と回答していましたが、2025年の調査では69.6%に増加しました。
- 学校種別に見ると、大学・大学院生は2024年の73.5%から2025年には75.8%へとわずかに増加しました。一方、高校生は2024年の64.1%から63.9%とほぼ横ばいでした。バイアスに対する認識は、引き続き大学・大学院生の方が高く、高校生とは約10ポイントの開きがあることが示されました。
- これらのことから、学生の生成AIのバイアスに対する認識は徐々に高まっているものの、特に高校生に対してはバイアスに関する知識を提供していくことが求められると言えるでしょう。

生成AIの出力結果には、偏り（バイアス）が生ずることを知っている

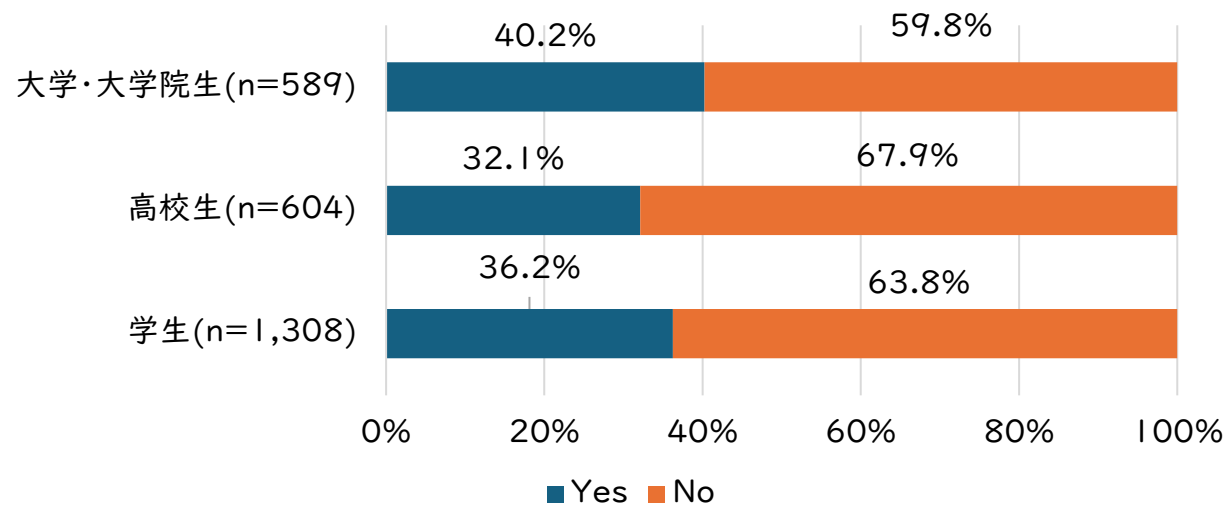


学生のファクトチェックに関する知識

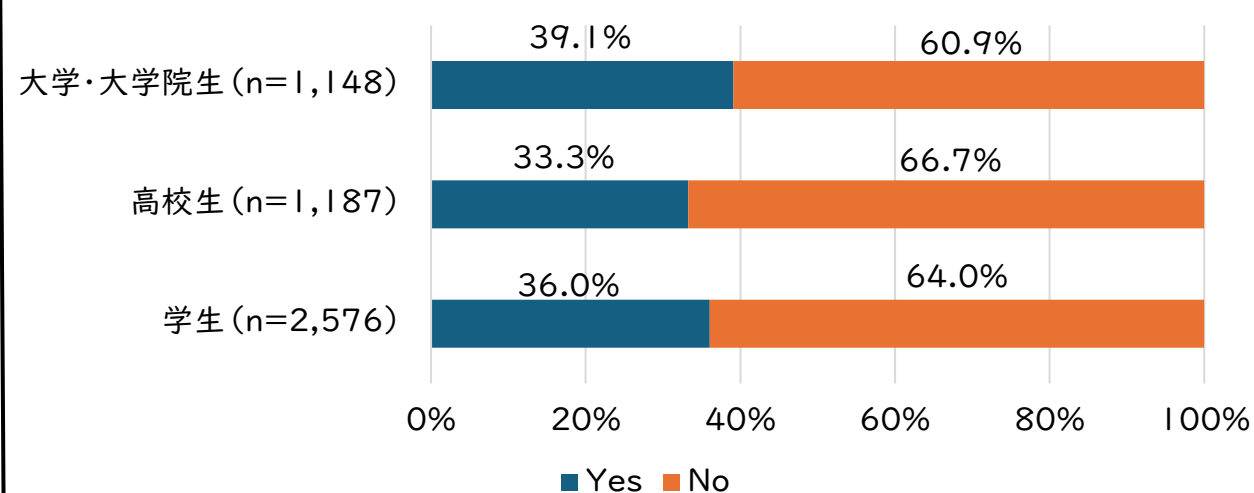
- 2024年の調査と2025年の調査を比較した結果、生成AIが書いた内容をファクトチェックする方法を「知らない」と回答した学生の割合は、全体としてわずかに増加しました。
- 2024年の調査では、学生全体で63.8%がファクトチェックの方法を知らないと回答していましたが、2025年の調査では64.0%とほぼ横ばいでした。この割合は依然として6割を超えています。
- 学校種別に見ると、大学・大学院生は2024年の59.8%から2025年には60.9%とわずかに増加しました。高校生も2024年の67.9%から2025年には66.7%とわずかに減少しました。しかし、ファクトチェックの方法を知らないと回答した割合は、引き続き高校生が大学・大学院生を大きく上回っており、両者の間に大きな差があることが示されました。
- これらのことから、生成AIの出力結果に対するファクトチェックに関する教育の提供は不可欠であると言えるでしょう。

生成AIが書いた内容が正しいかを確認するファクトチェックのやり方を知っている

2024年

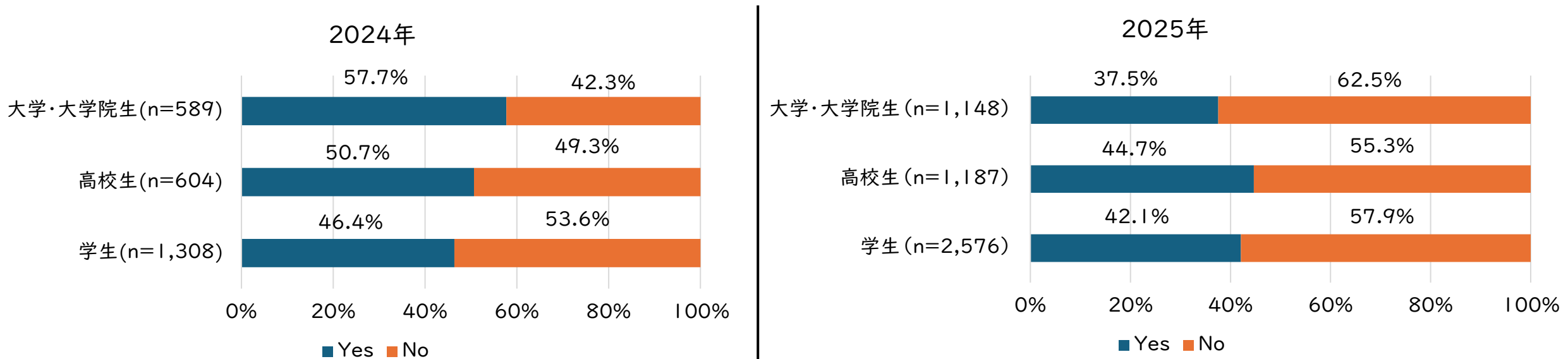


2025年



- 2024年の調査と2025年の調査を比較した結果、生成AIの利用規約で年齢制限や保護者の同意が求められていることを「知らない」と回答した学生の割合は、全体として増加傾向にあることがわかりました。
- 2024年の調査では、学生全体で53.6%が利用規約を知らないと回答していましたが、2025年の調査では57.9%に増加し、知らない学生が6割近くに達していることが明らかになりました。
- 学校種別に見ると、大学・大学院生は2024年の42.3%から2025年には62.5%へと大幅に増加しました。また、高校生は2024年の49.3%から55.3%に増加しており、両者の間で増加傾向が見られます。
- これらのことから、多くの生成AIサービスプロバイダーが利用条件を定めていることを認識させるための啓発活動が求められると言えるでしょう。また、知らない学生が増加したのは純粋に生成AI利用者が増加したことも要因の一つだと考えられます。

生成AIの利用規約では、年齢制限や保護者の同意が求められていることを知っている



可否から「設計」へ——不安の“質的変化”が起きた一年

1. 生成AI活用は実装段階へ

2025年度調査の結果は、生成AIの教育現場での活用が「導入の是非」を問う段階から、授業や課題設計、評価方法、開示ルールのあり方といった実装段階に移行していることを示しました。学生の利用率と利用頻度は確実に高まり、特に課題作成や学習準備において生成AIが日常的に用いられるようになっていきます。一方で、教員・学生ともに不正行為や依存に関する懸念は依然として高水準にあり、特に高校段階では迷いながら利用する学生が増えていることが明らかになりました。生成AIを使用した場合のプロセスの開示や逐次版の提出、口頭での確認なども活用し、学びの過程を適切に把握できる評価方法を徐々に取り入れていくことが望まれます。

2. 情報活用スキル育成の必要性

学生の引用スキルやファクトチェックの知識、適切な活用への自信はまだ十分ではなく、今後も授業の中で段階的に指導していくことが望まれます。教員側でも知識不足が課題として挙がっており、校内で共有可能な評価ルーブリックや開示テンプレート、プロンプト設計の事例などを整え、研修や事例交換を通じて徐々に実践力を高めていく必要があります。

3. 校種別の重点課題と今後の方向性

今後は、校種や学習段階ごとに異なる重点課題に応じた支援策を講じることが重要です。高校では引用・検証スキルの未習得への対応、大学では正当な協働の可視化と開示ルールの明確化を重視する必要があります。生成AIを「学びを深める道具」として位置づけ、学習者が検証しながら活用できる環境を整えることが、次世代の情報活用教育における重要な課題であるといえます。

未来の学びに向けて

本調査は、生成AIの教育利用が急速に広がる一方で、学校現場がいまだ模索と混乱の中にあることを浮き彫りにしました。現場では不正行為や依存への懸念、評価設計やルール整備への迷いが残っており、統一的な対応や判断基準が十分に共有されているとは言えません。

このような状況だからこそ、未来の学びに向けて必要なのは、性急な制度化ではなく、学校全体での合意形成と試行錯誤を重ねながら進める仕組みです。学習者が生成AIと向き合い、自ら問い、確かめ、判断できるようにするために、引用や検証、プロセス開示を含む実践的な学びの機会を授業に組み込み、経験を通じてメタ認知力を育てることが重要と言えるでしょう。

また、教員が安心して授業で生成AIを扱えるよう、事例集や簡易なルーブリック、プロンプト例を校内で共有し、互いにフィードバックし合う文化を整えていく必要があります。学校は、完璧な答えを提示する場ではなく、生成AI時代の学び方を共に探究する場であることを明確にし、学生と教員が協働して学びの新しいスタンダードを築いていくことが求められるでしょう。

学生と教員を対象とした生成AIの教育利用状況と意識に関する全国調査 2024年－2025年比較調査

発行日：2025年10月

発行者：仙台大学

〒989-1605 宮城県柴田郡柴田町船岡南2丁目2-18

電話：0224-55-1121

担当：仙台大学体育学部スポーツ情報マスメディア学科AI教育研究チーム
